

茨城県石岡市

国分遺跡

2008

石 岡 市
石 岡 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

序

当地は北に国の特別史跡である常陸国分寺・国分尼寺が存在し、南に常陸国衙跡が存在するといういわば奈良・平安時代の都会というべき場所です。そんな、当時の都会でこの度、発掘調査が行われました。

人類は文字の発明以来、個人の思想や知恵を脳の外側に貯え、それを保存することを可能としましたが、発掘調査というものも古の人々の生活の知恵を復元し、その情報を将来に伝えるという大変重要な役割を担っております。

くしくも当地は「図書館」を中心とした複合文化施設の建設に伴い、調査された遺跡です。一度、遺跡が発掘されてしまうと二度と基に戻すことはできません。したがって、これら発掘調査を通して判明した成果を今後は石岡市民全体の知恵として、将来に引き継ぐ義務があるのです。そのために刊行されたのがこの報告書なのです。

報告書に記載されたこれらの地域史を石岡市教育委員会として活用を図ることをお約束しつつ、ご挨拶とさせていただきます。

最後になりますが、発掘調査より報告書刊行にいたるまで、ご指導いただきました関係諸機関、各氏に心より御礼申し上げます。

平成20年3月

石岡市教育委員会
教育長 石橋 凱

例 言

1. 本書は、茨城県石岡市に所在する国分遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、複合文化施設建設に伴い、石岡市より委託を受けた株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、石岡市教育委員会の指導の下に行った。

所在地 石岡市若宮3丁目400番地4 ほか

調査面積 908 m²

調査期間 平成19年7月26日～平成19年9月13日

調査指導 箕輪健一（石岡市教育委員会）、小杉山大輔（石岡市教育委員会）、曾根俊雄（石岡市教育委員会）、西脇俊朗（東京航業研究所）

調査担当 林邦雄（東京航業研究所）、小野麻人（東京航業研究所）、市瀬俊一（東京航業研究所）

調査及び整理参加者 荒川康佑 飯野正子 市毛 博 岩崎功 海老原龍生 大橋生 岡本脩一

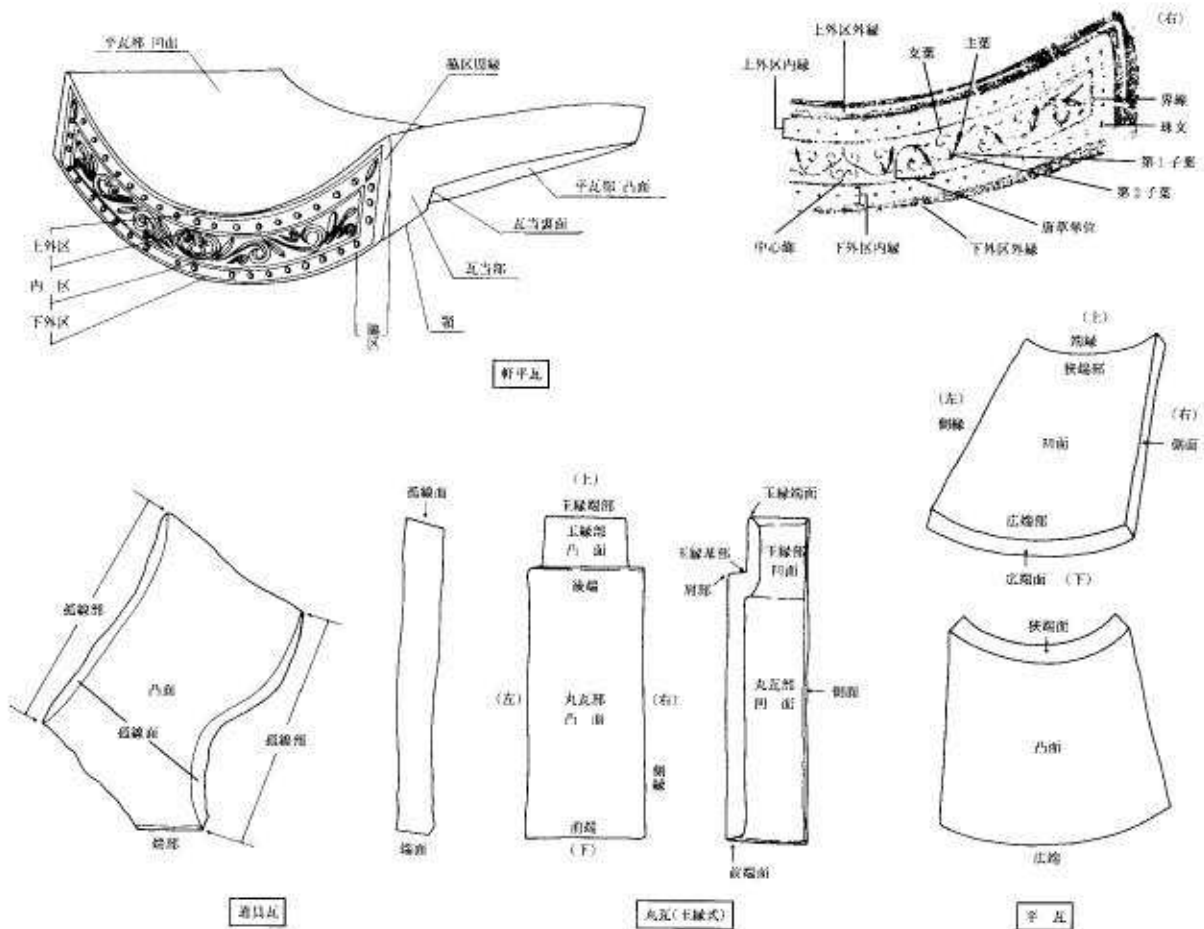
尾崎英明 金谷美草 川下由光 川村宣央 木村善幸 小井戸和代 小久頭治 斎藤雅子 佐久間紀子
嶋本慶子 鈴木一昭 鈴木真紀子 中島貞雄 中島トミ子 中島秀雄 長嶋史弘 永瀬敬子 中村薫
早川恵子 藤井和康 古川貴弘 本郷君子 本田美津子 峯岸未以留 宮下藍 村山彩子 柳文雄
山手芳朗 山本三男 渡辺喜代三 渡辺真吾 渡辺弘美

4. 本書の編集は、佐々木藤雄・小野・林が担当し、執筆は曾根・小野・林・市瀬が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
5. 発掘調査から本書の刊行まで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表する次第である（敬称略・順不同）。

今井千恵 小松崎博一 佐々木義則 長井光彦 比毛君男 平田博之 村山修 神栄株式会社

凡 例

- 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。
全体図 1 : 200 竪穴住居 1 : 20、1 : 30、1 : 40 方形竪穴遺構 1 : 40 溝 1 : 40、1 : 150
井戸 1 : 40、1 : 60 土坑 1 : 40
- 遺構実測図中の座標値は国家標準座標に基づく。方位は座標北を、レベルは海拔高を示す。
- 遺物番号は本文、実測図、写真図版と一致する。
- 遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色調 (2001 年度版)』を基準とした。
- 遺物観察表における法量の () 内数値は推定値、< > 内数値は残存値を示す。
- 遺構内における遺物出土状態を示すにあたり、次の記号を使用した。
● 土器 △ 石製品 □ 瓦 ○ 銭貨 × 金属製品
- 各種瓦の部分名称は下記の通りである。



各種瓦の部分名称

目次

序 例言 凡例 目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過	1
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 調査の経過	2
1-3 調査の方法	2
1-4 基本土層	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
2-1 地理的環境	4
2-2 歴史的環境	4
第3章 奈良・平安時代	9
3-1 住居跡	9
3-2 土坑	25
3-3 遺物	27
第4章 中世	40
4-1 方形竪穴遺構	40
4-2 溝	44
4-3 井戸	47
4-4 土坑	49
4-5 遺物	58
第5章 近・現代-神栄株式会社石岡工場の頃	60
第6章 総括	63
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	国分遺跡の位置 (1:5,000) ……………	1	第55図	1号井戸 (1:40) ……………	47
第2図	基本土層図 (1:30) ……………	3	第56図	2号井戸 (1:60) ……………	47
第3図	国分遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000) ……	6	第57図	3号井戸 (1:40) ……………	48
第4図	遺跡全体図 (1:200) ……………	8	第58図	4号井戸 (1:40) ……………	48
第5図	1号・12号住居跡 (1:40) ……………	9	第59図	5号井戸 (1:40) ……………	48
第6図	2号住居跡 (1:40) ……………	10	第60図	6号井戸 (1:40) ……………	49
第7図	3号・19号住居跡 (1:40) ……………	11	第61図	1号土坑 (1:40) ……………	49
第8図	4号住居跡 (1:40) ……………	12	第62図	2号土坑 (1:40) ……………	49
第9図	4号住居跡カマド (1:30) ……………	13	第63図	3号土坑 (1:40) ……………	50
第10図	5号住居跡 (1:40) ……………	14	第64図	4号土坑 (1:40) ……………	50
第11図	5号住居跡カマド (1:30) ……………	15	第65図	5号土坑 (1:40) ……………	50
第12図	6号住居跡カマド (1:20) ……………	16	第66図	6号土坑 (1:40) ……………	50
第13図	7号住居跡 (1:40) ……………	16	第67図	7号土坑 (1:40) ……………	50
第14図	8号住居跡 (1:40) ……………	17	第68図	8号土坑 (1:40) ……………	50
第15図	9号住居跡 (1:40) ……………	18	第69図	9号土坑 (1:40) ……………	51
第16図	10号住居跡カマド (1:20) ……………	18	第70図	10号土坑 (1:40) ……………	51
第17図	11号住居跡 (1:40) ……………	19	第71図	14号・17号・18号土坑 (1:40) ……	51
第18図	11号住居跡カマド (1:30) ……………	20	第72図	15号土坑 (1:40) ……………	51
第19図	13号住居跡カマド (1:30) ……………	20	第73図	16号土坑 (1:40) ……………	51
第20図	14号住居跡 (1:40) ……………	21	第74図	22号・23号土坑 (1:40) ……	52
第21図	15号住居跡 (1:40) ……………	22	第75図	25号土坑 (1:40) ……………	52
第22図	15号住居跡カマド (1:30) ……………	22	第76図	26号土坑 (1:40) ……………	52
第23図	16号住居跡 (1:40) ……………	23	第77図	27号土坑 (1:40) ……………	52
第24図	17号住居跡 (1:40) ……………	23	第78図	28号土坑 (1:40) ……………	52
第25図	18号住居跡 (1:40) ……………	24	第79図	29号土坑 (1:40) ……………	52
第26図	11号土坑 (1:40) ……………	25	第80図	30号土坑 (1:40) ……………	52
第27図	12号土坑 (1:40) ……………	25	第81図	31号土坑 (1:40) ……………	53
第28図	13号土坑 (1:40) ……………	25	第82図	32号土坑 (1:40) ……………	53
第29図	19号土坑 (1:40) ……………	25	第83図	34号・35号土坑 (1:40) ……	53
第30図	20号土坑 (1:40) ……………	26	第84図	36号土坑 (1:40) ……………	53
第31図	21号土坑 (1:40) ……………	26	第85図	37号土坑 (1:40) ……………	53
第32図	24号土坑 (1:40) ……………	26	第86図	39号土坑 (1:40) ……………	53
第33図	38号土坑 (1:40) ……………	26	第87図	40号土坑 (1:40) ……………	54
第34図	51号土坑 (1:40) ……………	26	第88図	41号土坑 (1:40) ……………	54
第35図	52号土坑 (1:40) ……………	26	第89図	42号土坑 (1:40) ……………	54
第36図	出土遺物 (1) ……………	29	第90図	43号土坑 (1:40) ……………	54
第37図	出土遺物 (2) ……………	30	第91図	44号土坑 (1:40) ……………	54
第38図	出土遺物 (3) ……………	31	第92図	45号土坑 (1:40) ……………	54
第39図	出土遺物 (4) ……………	32	第93図	46号土坑 (1:40) ……………	55
第40図	出土遺物 (5) ……………	33	第94図	47号土坑 (1:40) ……………	55
第41図	出土遺物 (6) ……………	34	第95図	48号・49号土坑 (1:40) ……	55
第42図	出土遺物 (7) ……………	35	第96図	50号土坑 (1:40) ……………	55
第43図	施釉陶器 ……………	38	第97図	53号土坑 (1:40) ……………	55
第44図	1号方形堅穴 (1:40) ……………	40	第98図	出土遺物 ……………	59
第45図	2号方形堅穴 (1:40) ……………	41	第99図	神栄石岡工場関係 近・現代基礎 (1:200) ……	61
第46図	3号方形堅穴 (1:40) ……………	41	第100図	神栄石岡工場建物配置図 (昭和60年当時 1/1,200) ……	62
第47図	4号方形堅穴 (1:40) ……………	41	第101図	遺構全体図 (1:200) ……………	64
第48図	5号方形堅穴 (1:40) ……………	42	第102図	石岡城跡見取図 ……………	67
第49図	6号方形堅穴 (1:40) ……………	43	第103図	平村・染谷村上絵図 寛文4年 (1664) ……………	67
第50図	7号方形堅穴 (1:40) ……………	43	第104図	府中町絵図 天保年間 (1830~1843) ……	67
第51図	8号方形堅穴 (1:40) ……………	43	第105図	石岡町市街図 大正2年 (1913) ……	68
第52図	1号溝 (平面図=1:150 断面図=1:40) ……	44	第106図	石岡町市街図 大正14年 (1925) ……	68
第53図	2号溝 (平面図=1:150 断面図=1:40) ……	45	第107図	石岡町市街図 昭和10年 (1935) ……	68
第54図	3号溝 (平面図=1:150 断面図=1:40) ……	46			

表 目 次

第1表	国分遺跡と周辺遺跡一覧……………7	第5表	出土軒丸瓦一覧……………39
第2表	奈良・平安土坑一覧……………27	第6表	中・近世土坑一覧……………56～57
第3表	出土遺物一覧……………35～37	第7表	出土遺物一覧……………58
第4表	出土施釉陶器一覧……………39		

図 版 目 次

図版1	調査区全景(東から)、調査区全景(南西から)		坑遺物出土状況(南から)、24号土坑遺物出土状況(東から)、51号土坑遺物出土状況(南から)、1号方形堅穴全景(南から)、2号方形堅穴全景(南から)、3号方形堅穴全景(北から)、4号方形堅穴全景(北から)
図版2	調査区と龍神山(南東から)、1・12号住居全景(西から)、2号住居全景(西から)、3・19号住居全景(南から)、調査風景		
図版3	4号住居全景(南から)、4号住居カマド検出状況(南東から)、4号住居墨書土器出土状況(南から)、4号住居遺物出土状況(南から)、4号住居遺物出土状況(南から)	図版8	5号方形堅穴全景(北から)、6号方形堅穴全景(南から)、7号方形堅穴全景(西から)、8号方形堅穴全景(東から)、8号方形堅穴全景(南西から)、1号溝全景(東から)、1号溝円面硯出土状況(南から)、2号溝全景(東から)
図版4	5・13号住居全景(南から)、5号住居遺物出土状況(南西から)、6号住居全景(南から)、7号住居全景(西から)、8号住居全景(西から)、9号住居全景(東から)、10号住居全景(西から)、調査風景	図版9	3号溝全景(東から)、1号井戸断面(東から)、2号井戸全景(南から)、調査風景
図版5	11号住居遺物出土状況(西から)、11号住居カマド遺物出土状況(西から)、11号住居カマド全景(西から)、11号住居全景(西から)、調査風景	図版10	3号井戸全景(北西から)、4号井戸断面(西から)、5号井戸全景(西から)、6号井戸全景(北東から)、34・35号土坑全景(西から)、40号土坑全景(東から)、煉瓦基礎群(北東から)、モルタル基礎(西から)
図版6	14号住居全景(西から)、15号住居全景(南から)、15号住居カマド遺物出土状況(南から)、15号住居カマド遺物出土状況2(南から)、16号住居全景(西から)、17号住居全景(南から)、18号住居全景(西から)、調査風景	図版11	出土遺物(1)
図版7	19号土坑遺物出土状況(西から)、21号土	図版12	出土遺物(2)
		図版13	出土遺物(3)
		図版14	出土遺物(4)
		図版15	出土遺物(5)
		図版16	出土遺物(6)
		図版17	出土遺物(7)、出土遺物(8)

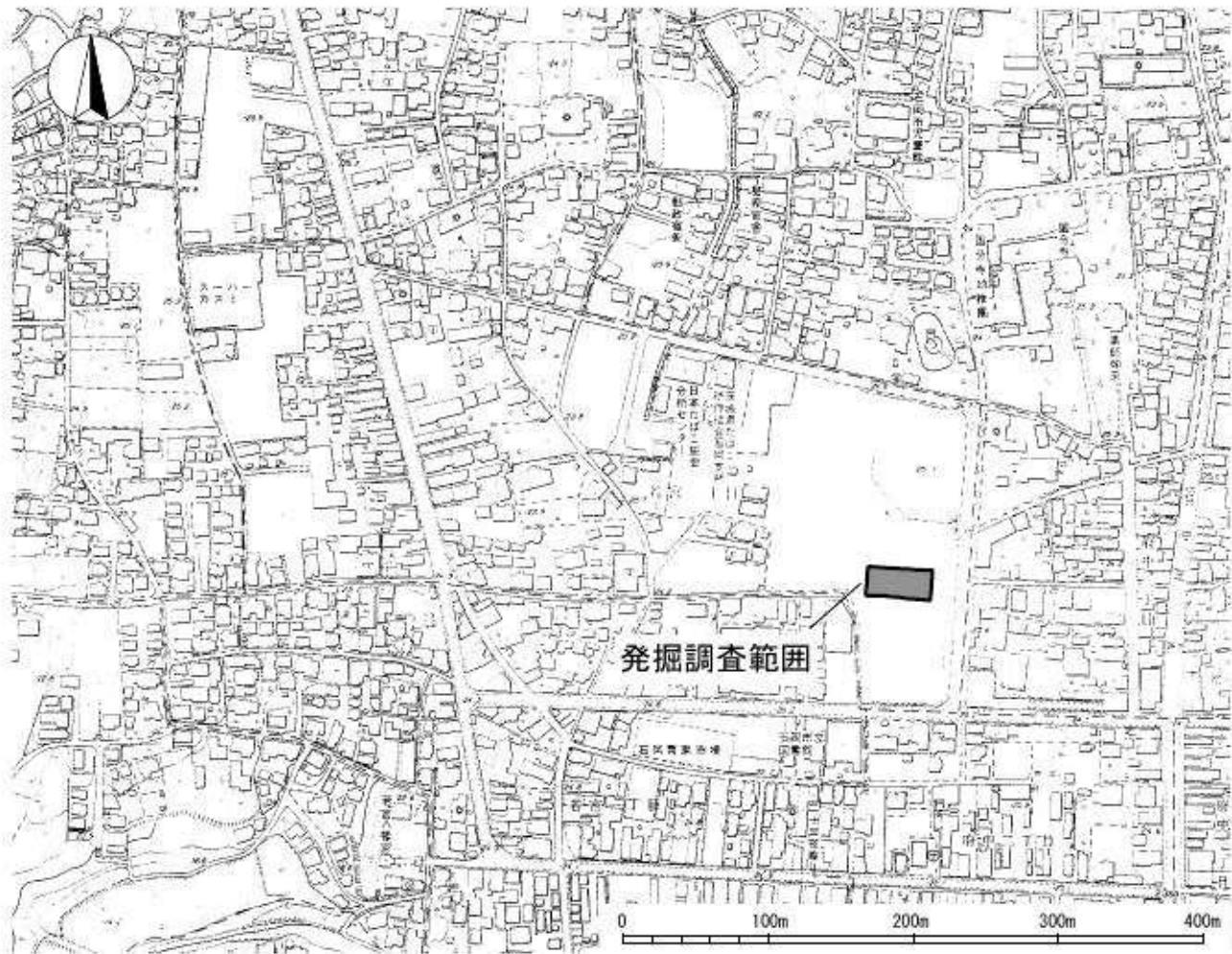
第1章 調査に至る経緯と調査経過

1-1 調査に至る経緯

当地はかつて神栄製糸工場が所在しており、工場の撤退後、平成9年度に石岡市により土地が購入された。公有化にあたり、その活用方法が石岡市中心市街地活性化プラン推進事業の中で検討された。その過程で、基礎資料を得る目的から、平成12年3月13日から7月28日まで確認調査を実施した。その結果、平安時代の竪穴住居跡173軒、掘立柱建物跡9棟、常陸国分寺の寺域に関連する可能性の高い溝等を検出し、また施釉陶器や近現代の遺物が多数出土した（小松崎2002）。

その後、当地はイベント広場として暫定利用されてきたが、平成19年3月に複合文化施設建設の基本設計が完成したことから、平成19年4月25日付で石岡市が茨城県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の通知」を行った。平成19年6月18日付で茨城県教育委員会より、埋蔵文化財の保存に影響がある範囲については発掘調査を実施する旨、通知があった。そのため、該当する4,500㎡のうち、今年度は確認調査が実施されている900㎡について、株式会社東京航業研究所に委託をし、発掘調査を実施するに至った。

(曾根)



第1図 国分遺跡の位置 (1:5,000)

1-2 調査の経過

発掘調査は平成19年7月26日から同年9月13日までの7週間にわたって実施した。先ず7月27日より表土掘削を開始し、地表より60cm程の深さで遺構を検出した。また、調査区周辺はイベント広場の駐車場として利用されていることから、表土掘削作業と並行して調査区の周囲を囲むフェンスの設置作業を行った。表土掘削作業は8月1日まで行い、奈良・平安時代を中心とする住居跡19軒、方形堅穴8基、土坑52基、井戸6基、溝3条のほか、近代の製糸工場に関連する建物基礎や配管などを確認することができた。以後、これら遺構の調査を適宜実施し、9月11日には発掘調査を終了した。また、9月8日より調査と並行して段階的に埋め戻しを行い、9月13日にはフェンスの撤去と駐車場の現状復帰を完了した。出土した遺物は、奈良・平安時代の土師器や須恵器、瓦を中心に、近代のガラス瓶などを含めて、収納箱43箱分に達した。

整理作業は平成19年10月1日より平成20年3月14日まで実施した。先ず10月には遺物の洗浄・注記・接合作業と写真整理作業を行った。また、それと並んで写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。

11月からは遺構図面の修正と編集、遺物の実測・トレース、遺物写真の撮影、図版作成、原稿執筆などの作業を順次行い、平成20年2月からは報告書編集作業に入った。

(小野)

1-3 調査の方法

調査区の座標は公共座標（世界測地系）を基準に設定した。調査対象地は東西約45m、南北約21mの東西に長い長方形を呈しており、総面積は908㎡を測る。対象地全域を網羅するように5m方眼のグリッドを設定し、遺構確認作業を行った。

調査にあたっては重機により表土の掘削を行い、その後、遺構確認面までは人力による掘り下げを行った。

包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては、35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。

(小野)

1-4 基本土層

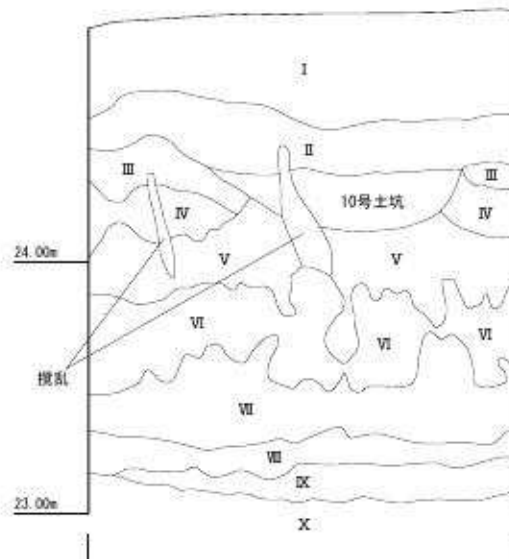
基本土層については、調査区東壁中央部に2m×2mの深掘り用のテストビットを設け、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。調査区の全域にわたって近代の製糸工場の建設を中心とする攪乱を受けており、地点によってはⅢ層に至るまで削平を蒙っていた。奈良・平安時代の遺構はⅢ層上面、近世と推定される1号溝はⅡ層上面より掘り込まれていた。

I層 表土層。

Ⅱ層 10YR3／3暗褐色土層 少量のロームブロック、微量のローム粒を含む。粘性をもち、しまる。

Ⅲ層 10YR6／4褐色土層 多量の黒色土粒を含む。粘性をもち、しまる。

- IV層 10YR8 / 5 黄褐色土層 多量のロームブロックを含む。粘性をもち、しまる。
- V層 10YR6 / 5 黄褐色土層 ソフトローム層。多量のロームブロックを含む。粘性をもち、しまる。
- VI層 10YR4 / 6 褐色土層 ハードローム層。粘性をもち、堅くしまる。
- VII層 10YR4 / 4 褐色土層 第2黒色帯に相当する。粘性をもち、ややしまる。
- VIII層 10YR6 / 5 黄褐色土層 黒色粒子を含む。粘性に欠けるが、堅くしまる。
- IX層 10YR6 / 6 明黄褐色土層 黒色粒子を含む。粘性に富み、しまる。
- X層 10YR7 / 3 淡黄褐色土層 黒色粒子、明黄褐色粒子を含む。粘性に富み、しまる。



第2図 基本土層図 (1:30)

第2章 遺跡の位置と環境

2-1 地理的環境

国分遺跡は JR 石岡駅の北西約 800m、茨城県石岡市若宮 3 丁目 400 番地 4 他に所在する。

石岡市は茨城県のほぼ中央、県内でも最も平坦な平野が広がる地域に立地する。南東側には国内第 2 位の湖沼である霞ヶ浦が豊かな水を湛え、西方には、古来よりの信仰の対象である筑波山を中心とした筑波山系の秀麗な峰々が連なる。

石岡市の中心市街地は、それぞれ南東に流れて霞ヶ浦に注ぐ、北の園部川と南の恋瀬川に挟まれた標高 25～30m、全長約 7km の狭長な「石岡台地」と呼ばれる洪積台地上に展開する。この台地は、さらに南東に流れる山王川によって南北に二分される。

この地は、官道東海道の敷設や恋瀬川河口の高浜入を中心とした霞ヶ浦の水上交通など、古代からの交通の要衝であり、現在も国道 6 号線、常磐高速道路、JR 常磐線が台地上を縦断している。本「石岡台地」には、現在の石岡市の中心市街部はもとより、国分遺跡を始めとする常陸国衙や国分寺、府中城などの主要な遺跡が集中分布しており、国政や地域の中心としての歴史が連続と刻まれてきたことが知られる。

(小野)

2-2 歴史的環境

石岡台地の周辺には多くの遺跡が存在するが、ここでは、今回の調査の主要な時期である奈良・平安時代以降を中心に、その概要を述べる。

石岡市では良好な旧石器時代の遺跡の調査例はないが、常陸風土記の丘の建設に先立って発掘された宮平遺跡 (2) では頁岩製や黒曜石製のナイフ形石器が出土し、本台地上における人類の生活の痕跡が約 2 万年前までさかのぼることが明らかになっている。

縄文時代の遺跡では、早期の新池台遺跡 (3) や高根貝塚 (4) などがあげられる。前期になると、諸磯・浮島式期の住居跡が 32 軒確認された外山遺跡 (5) や新池台遺跡などがある。中期になると遺跡数は増大し、中峠式期の宮平遺跡、阿玉台～加曾利 E 式期の東大橋原遺跡 (6)、大作台遺跡 (7) などがあり、後期では宮平遺跡から称名寺式や堀之内 1 式期の住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡数は少ないが、新池台遺跡や宮平遺跡で後期の集落が確認されている。また、外山遺跡では後期の上稲吉式土器が古墳時代前期の住居跡から検出され、この時期まで古い様相を残していた可能性が指摘されている。

古墳時代に入ると、石岡台地の先端部に近い北根本に東国第 2 位の規模を持つ全長 186m の舟塚山古墳 (8) を盟主とする舟塚山古墳群が形成される。本古墳群には 90～100m クラスと考えられる愛宕山古墳、平足塚古墳、大日塚古墳などの大型前方後円墳も含まれており、霞ヶ浦の水運を掌握した集団の首長たちを対象とした、「茨城国造」の奥津城の可能性が考えられている。

奈良・平安時代になると、茨城国造の膝元に茨城郡衙推定地 (9) や茨城郡の郡寺である茨城廃寺 (10) が形成される。また、この地域は古国府の所在地であるとの研究もある。

現在の石岡小学校の地には常陸国衙（11）が置かれていたが、近年継続的に行われた発掘調査によって長大な脇殿や楼閣などが確認され、徐々にその実像が明らかにされている。現在までのところ、8世紀後半頃から、さらに先行する初期官衙的な建物群の分布も確認されつつある。

国衙跡の北東800mの位置には常陸国分寺（12）、北西1.3kmには国分尼寺（13）が所在し、ともに国の特別史跡に指定されている。前者は、昭和52年以降の数次にわたる発掘調査で塔を除く伽藍の配置などが確認されている。後者では、昭和47年以降の発掘によって伽藍地のほぼ全容が明らかになっている。また、尼寺の東方に接し、同所の維持管理に関わった集落とされる若松遺跡（現尼寺ヶ原遺跡）（14）が所在する。集落跡としては、8世紀末から10世紀前半に及ぶ住居跡35軒に加えて近年の遺物再整理で多くの施釉陶器が確認され、国府域に関連する集落跡と推定される鹿の子A遺跡（15）が国衙跡の北西1.4kmの地点に分布する。また、国衙跡の北西600mには国分遺跡（1）がある。本遺跡では、平成12年の確認調査によって173軒の住居跡や、国分寺に関連する溝、多くの施釉陶器などが検出されており、国府域を形成する集落遺跡として重要な意義を有していたことが指摘される。この他、8～11世紀に継続して集落の営まれた泉台遺跡（現杉ノ井遺跡）（16）では、施釉陶器や石製腰帯、「曹司」墨書の土器が出土し、一般集落とは違う集団の生産・居住の場と推定される。

さらに国衙跡の北北西1.7kmの地点には、8世紀中葉から9世紀後半にかけての国府に付属する官営工房と監督曹司と確認された鹿の子C遺跡（17）が所在し、蝦夷征討に関係した武器製作などが行われた可能性が想定されている。特に大量に出土した漆紙文書からは、律令制下の地方の国衙、郡衙レベルでの行政や支配に関する実態の一端が明らかになりつつある。

ところで、9世紀末になると桓武天皇の曾孫高望王が平姓を賜って上総介に任命され、いわゆる桓武平氏の成立をみる。そして、常陸、上総、下総を中心に平高望一族が広範に展開し、鎮守府将軍や陸奥守、上総・下総の介など東国関係の長官職を歴任する。中でも高望の長男国香の得た常陸大掾はこの系統に世襲され、後に大掾氏を称するに至る。

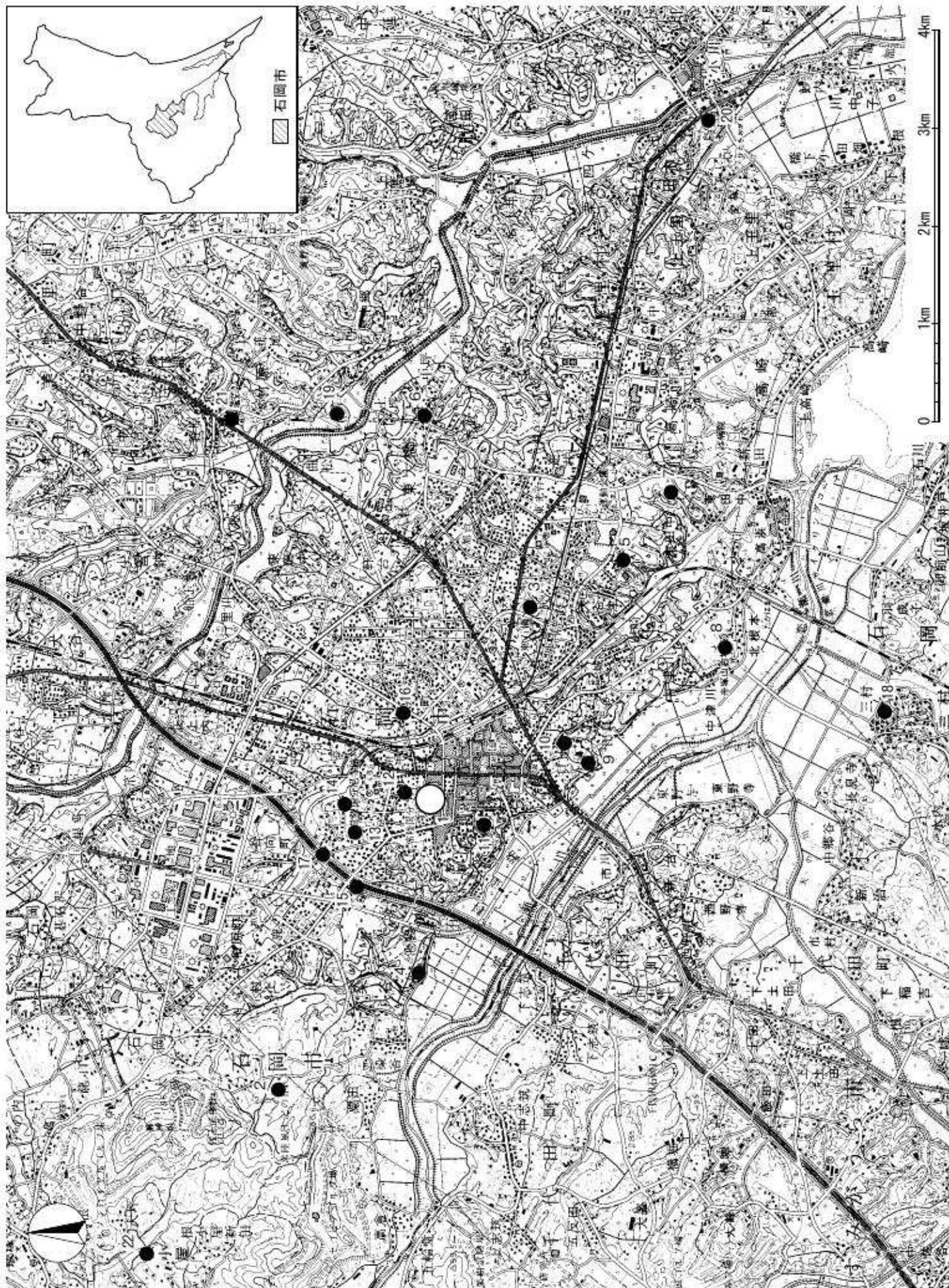
高望の孫将門と、伯父や甥たちとの同族間争いに端を発したのが「承平天慶の乱」である。天慶2年（939）11月、将門は常陸国府を襲撃し、国司以下を捕え、印鑑を奪い、略奪暴行を恣にしたとされる。この時、国衙や国分寺、宅畑三百余戸が焼失したという。

将門の乱鎮圧以降、国香の子孫は常陸南部全域に広がり、その権益は律令的行政単位を分断し、かつ急速に一族の武士団化が進んだと思われる。巨大化した大掾本宗家の多気義幹が源頼朝の寵臣八田知家の謀略により没落すると、建久4年（1193）、水戸地方を拠点とする庶流の馬場資幹が常陸大掾となり、以後同氏が本宗家となる。同氏は、水戸と府中を行き来して政務を執ったとされ、府中での居館は茨城郡衙推定地の位置にあった「石岡城」（9）であるといわれる。これが「石岡」の名の由来であり、また、この頃より国府から府中へと改称されるようになった。

南北朝期に入り戦乱が激しくなると、正平年中（1346～1351）ごろ、大掾詮国は「石岡城」から、旧国衙域を含むさらなる要害の地「府中城」（11）へと、その拠点を移した。

応永33（あるいは29）年（1426）6月、府中の青屋祭挙行のため、大掾満幹が一族をあげて水戸を離れていた隙に、江戸通房により水戸の居館が奪取されるという事件が発生する。大掾氏は水戸地方を失い、以後は府中周辺部のみを支配することとなった。

拡大・南下政策を採る水戸の江戸氏と、斜陽著しい大掾氏とは、以後も長らく宿敵の間柄であったが、殊に天正13年（1585）以降、抗争が激化する。江戸重通は、毎年のように大掾清幹の拠る府中と周辺部を攻撃し、



第3図 国分遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)

第1表 国分遺跡と周辺遺跡一覧

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	国分遺跡（熊岡製糸工場・神栄製糸工場）	奈良・平安～近代	12	常陸国分寺	奈良・平安
2	宮平遺跡	旧石器～奈良・平安	13	常陸国分尼寺	奈良・平安
3	新池台遺跡	縄文・弥生	14	尼寺ヶ原遺跡	奈良・平安
4	高根貝塚	縄文・古墳～中近世	15	鹿の子A遺跡	奈良・平安
5	外山遺跡	縄文～奈良・平安	16	杉ノ井遺跡	奈良・平安
6	東大橋原遺跡	縄文	17	鹿の子C遺跡	奈良・平安
7	大作台遺跡	縄文	18	三村城	中世
8	舟塚山古墳	古墳	19	竹原城	中世
9	茨城郡衙推定地（石岡城・外城）	縄文・弥生、奈良・平安～中世	20	取手山城	中世
10	茨城廃寺	奈良・平安	21	弓削砦	中世
11	常陸国衙（府中城・府中陣屋）	奈良・平安～中近世	22	片野城	中近世

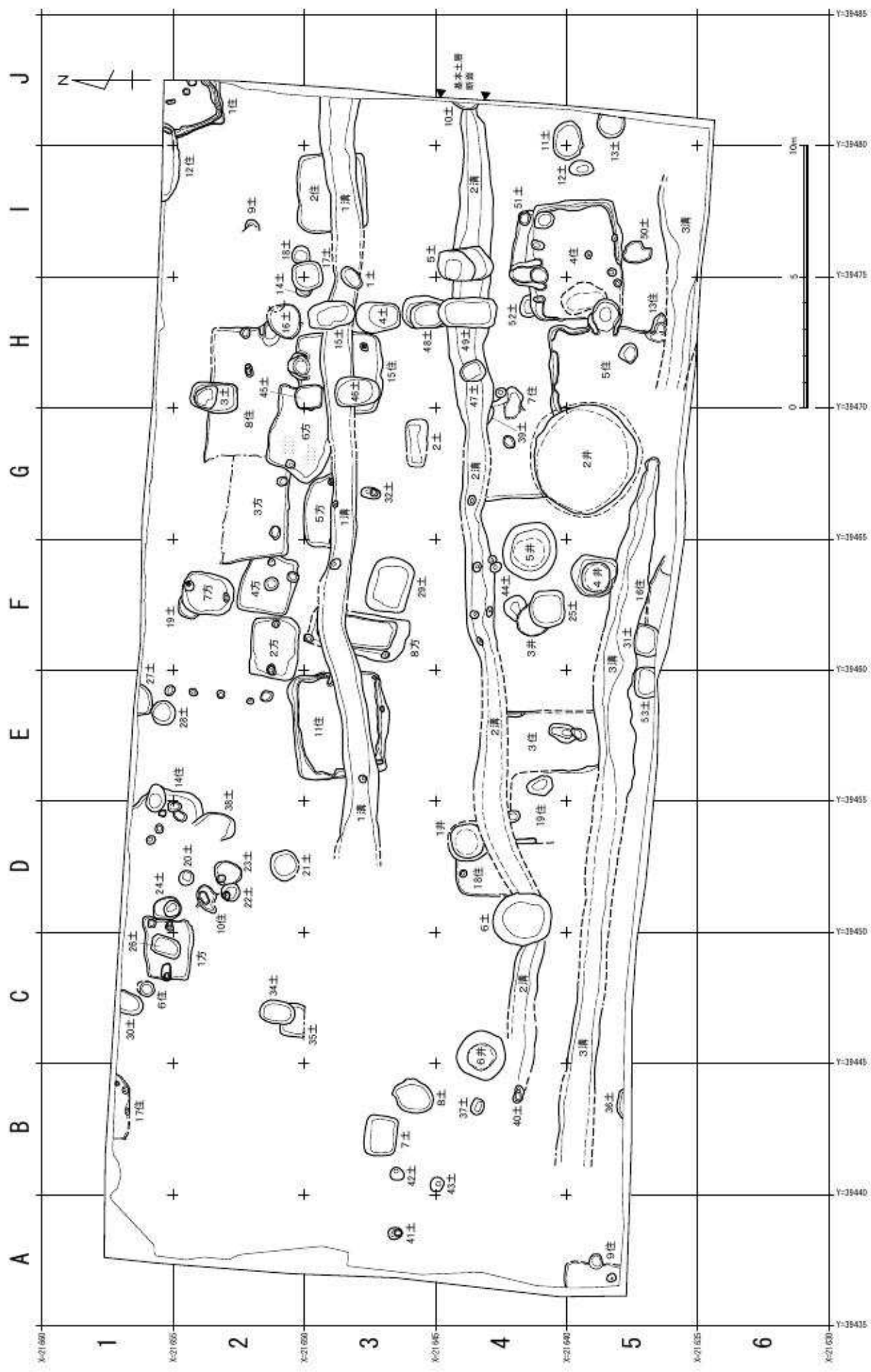
「郷村残す所無く打ち散し、府中宿町ばかりに押詰め」（「江戸重通書状」）たという。両者は佐竹義重の仲介により和睦するが、この時の兵火により大掾氏により維持されてきた中世の国分寺は焼失する。同16年、今度は佐竹・江戸連合軍が侵攻し、清幹は万策尽きて降伏する。石岡城の位置に該当する外城や三村城（18）、竹原城（19）、取手山城（20）、弓削砦（21）は、江戸氏や小田氏による脅威に日々晒されていた大掾氏が、府中防衛のため整備した防衛拠点である。片野城（22）は、佐竹氏が客将太田三楽斎資正を入れ、小田氏や大掾氏に備えた最前線基地であり、近年、外郭部で戦国末～近世初頭の墓地在り発掘された。

同18年12月、江戸重通を水戸城から駆逐した佐竹義宣は、余勢を駆って府中に進撃する。抗戦及ばず若干18才の当主大掾清幹は自刃し、ここに9世紀末の高望王の下向以来、700年にわたり当地に君臨した平姓大掾氏は滅亡した。府中の町や寺社の大半もこの時に焼失し、町は甚大な被害を受けたといわれる。

大掾氏は、府中6名家と称される、同じく在庁官人の系譜を引くとされる税所、健児所、金丸、香丸、弓削、中宮部らの家臣団を抱えていたが、多くは同氏滅亡と共に消え、税所、健児所のみは府中の有力者として近代まで残った。このうちの金丸、香丸、宮部は現在も中心地の地名として残っている。その後、佐竹氏は城郭と町の復興に取り組み、現在の中心市街地に繋がる新たな町立を行った。

慶長7年（1602）、佐竹氏が関ヶ原の後始末で出羽秋田に減封となると、府中は六郷氏、皆川氏、天領という支配を経て、元禄13年（1700）、水戸光圀の弟松平頼隆が2万石を与えられ入封する。同家は、水戸三連枝の一として国持に准じ、藩主は江戸小石川に常駐していた。府中領支配の政庁としての陣屋は、常陸国衙から府中城三の丸と続く、現在の石岡小学校から石岡市民会館にかけての地（11）に置かれた。松平氏は10代170年にわたりこの地を治め、明治維新を迎えた。現在、石岡小学校の敷地周辺には、土塁・空堀の一部と陣屋の表門が現存する。

石岡の地は、近世以来、清らかな湧水を利用した酒や醤油、味噌などの醸造業が盛んであったが、近代に入ると富国強兵・殖産興業の国策の一環として、新たに製糸業が大きな比重を占めるようになり、石岡製糸工場、熊岡製糸工場（1）などが建設されることになる。熊岡製糸工場は、小口組、神栄製糸と引き継がれて近年まで操業していたが、平成12年の同工場跡地の国分遺跡確認調査では、煉瓦やコンクリートの建物基礎のほか、ボイラーなどに用いた石炭の燃えカス層、女工の食器や化粧瓶、防衛食の食器や糸紡ぎの繰り糸鍋など、昭和前期を中心とする多くの資料が得られている。（小野）



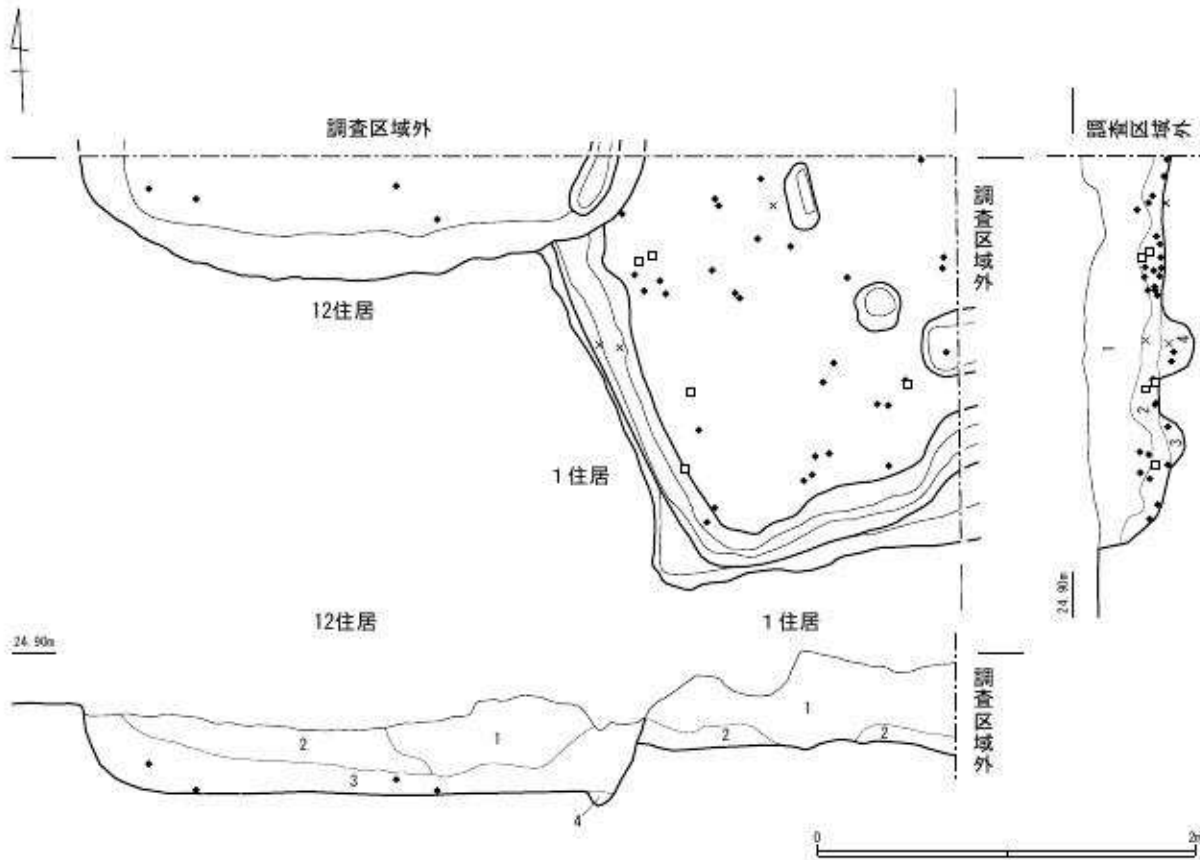
第4図 遺跡全体図 (1:200)

第3章 奈良・平安時代

今回の調査で検出された遺構は、住居跡 19 軒、方形竪穴 8 軒、溝 3 条、井戸 6 基、土坑 52 基を数える。このうち、奈良・平安時代に属するのは住居跡 19 軒、土坑 10 基であり、残る方形竪穴 8 軒、溝 3 条、井戸 6 基、土坑 42 基は中・近世に属する。いずれも製糸工場の建設や解体工事などによる攪乱や削平が著しく、遺存状態は良好とはいえない。この他、調査区の広い範囲から小ピットが検出されているが、溝に伴う一部のものを除くと、時期の不明な例が大部分である。

奈良・平安時代の住居跡は、重複例を含めて調査区のはほぼ全域にわたって分布している。カマドの位置は、北側が 3 軒、東側が 9 軒、不明 7 軒という構成を示しており、年代による偏りは特にみられない。10 基の土坑は調査区の南東側と中央部北側に集中する傾向を示している。

3-1 住居跡



1号住居跡

- | | | |
|---|--------------|-----------------------------|
| 1 | 7.5YR3/3褐色土 | ローム粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 2 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・炭化物粒少量混入、やや粘性欠き、ややしまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR4/4褐色土 | ロームブロック多量混入、やや粘性欠き、ややしまる。 |

12号住居跡

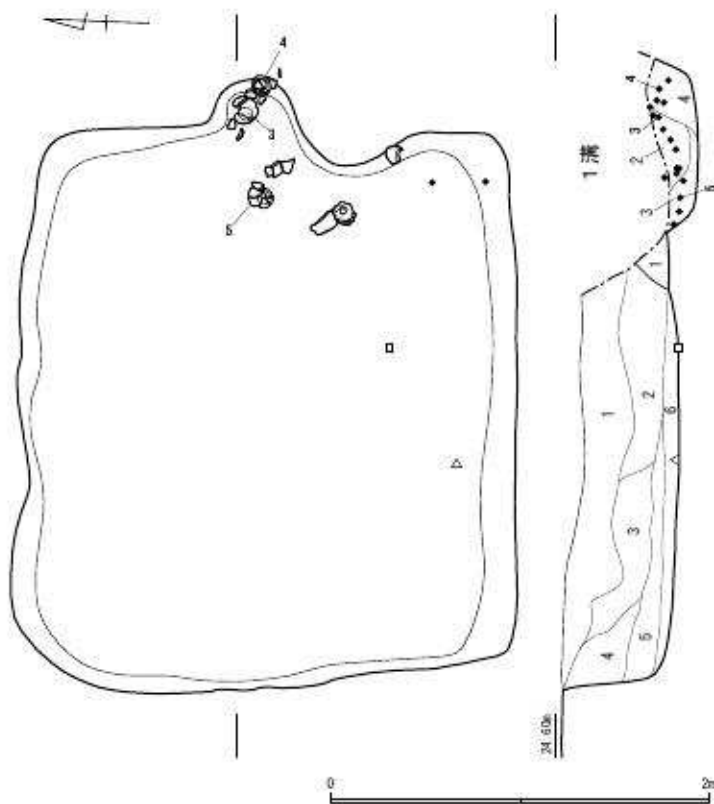
- | | | |
|---|---------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR3/4暗褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 2 | 10YR3/3暗褐色土 | ロームブロック・粘土ブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 10YR3/4暗褐色土 | ロームブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 4 | 7.5YR3/3暗赤褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまり欠く。 |

第5図 1号・12号住居跡 (1:40)

1号住居跡

調査区の北東端、J-1・2区に位置する。南西側に近接して2号住居跡が分布する。西側を12号住居

跡に切られる。北側と東側は調査区域外にかかるが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。確認部の東西方向 220 cm 以上、南北方向 231 cm 以上を測る。主軸方向、カマドの位置は不明である。壁は急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は 43 cm を測る。床面は V 層中に形成されており、全体に起伏をもつ。壁面にそって周溝が検出された。平均幅 23 cm、深さ 13 cm を測り、確認部を全周する。住居内から 3 個のピットが検出されたが、配列は不規則であり、本住居跡に伴う支柱穴かどうかは不明である。平均口径は 32 cm、深さ 21 cm を測る。覆土中からピット内にかけて須恵器 8 片、土師器 73 片、瓦 7 点、鉄製品 3 点、銅製品 1 点が出土した。伴出土器や住居の形状、切り合い関係などから判断して 10 世紀後葉以前の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると 12 号住居跡に先行する。



2号住居跡

- | | | |
|---|--------------|------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色土 | ローム粒多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒少量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR5/6明褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性欠き、しまる。 |
| 5 | 7.5YR4/4褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性・しまり欠。 |
| 6 | 7.5YR5/6明褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |

2号住居跡カマド

- | | | |
|---|---------------|-----------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色土 | ローム粒・焼土粒・粘土ブロック少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・焼土粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・焼土粒・粘土ブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR3/3暗赤褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第6図 2号住居跡 (1:40)

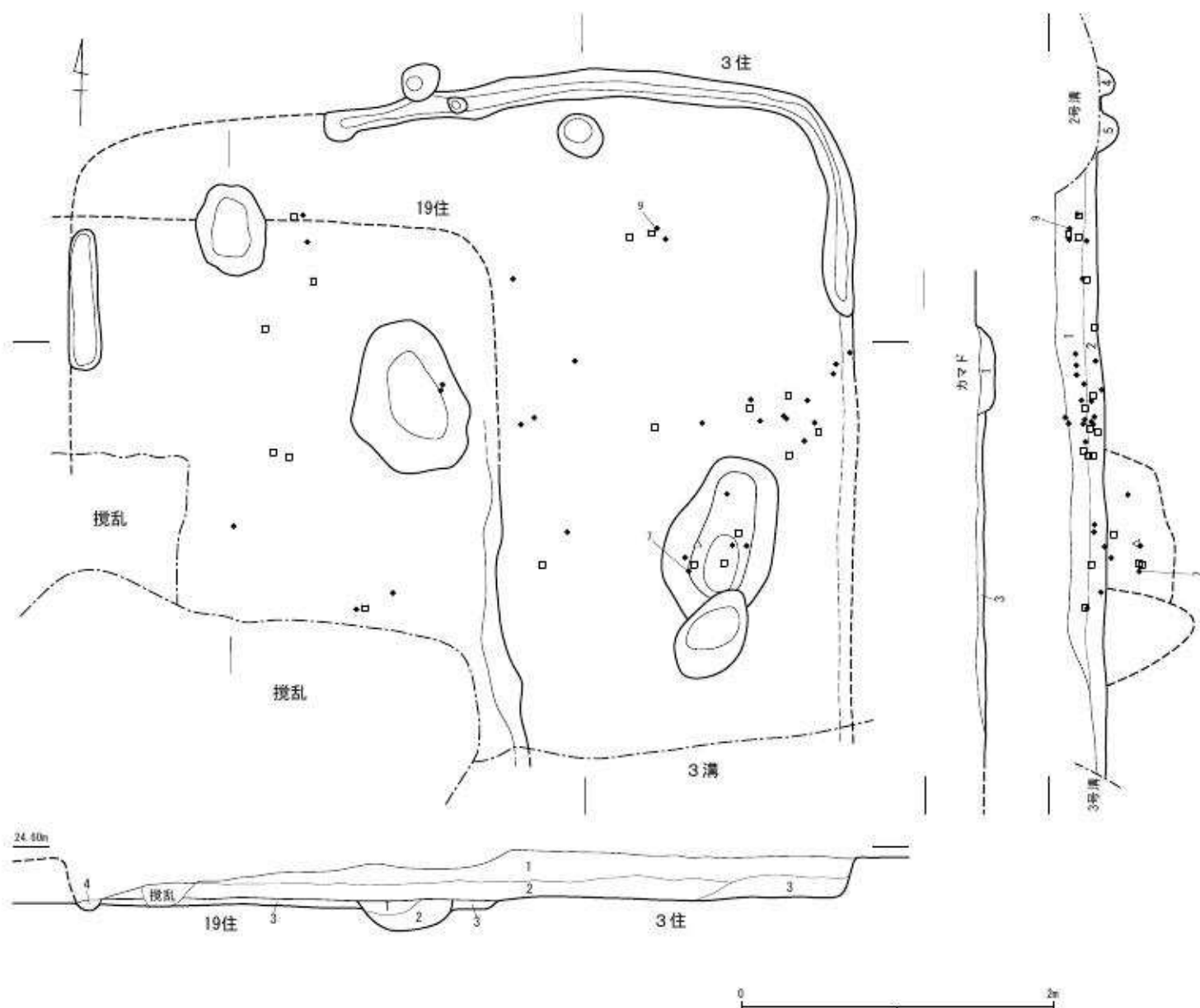
区に位置する。西側に 18 号住居跡が重複分布するが、攪乱が激しく、切り合い関係は不明である。西側で 19 号住居跡を切り、南側を 3 号溝に切られる。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。確認部の東西方向 506 cm、南北方向 440 cm 以上を測る。主軸方向、カマドの位置は不明である。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は 28 cm を測る。床面は V 層中に形成されていたが、西側については 19 号住居跡の覆土中に貼床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。北東側と西側の一部から周溝が検出された。平均幅 18 cm、深さ 10 cm を測る。住居内から 2 個のピットが検出されたが、配列は不規則であり、

2号住居跡

調査区の東端に近い I・J-2・3 区に位置する。西側に近接して 8・15 号住居跡が分布する。南側を 1 号溝に切られる。平面形は東西方向 302 cm、南北方向 270 cm の隅丸方形を呈する。主軸方向は N-86°-E を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は 51 cm を測る。床面は V 層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝やピットは認められなかった。カマドは長軸線に沿った東壁中央部に位置し、壁外に逆 U 字形に 30 cm ほど突出する。袖部は 1 号溝によって削平されていたが、燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積しており、火床面は強く赤化している。カマドを中心に須恵器 42 片、土師器 171 片、灰釉陶器 1 片、瓦 12 点、鉄製品 2 点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して 9 世紀前葉の所産であった可能性が強い。

3号住居跡

調査区の中央部南側、D・E-4・5



3号住居跡

- | | | |
|---|--------------|---------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色土 | ローム粒少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |
| 4 | 7.5YR5/6明褐色土 | ローム粒・暗褐色土多量混入、やや粘性欠き、しまる。 |
| 5 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性・しまり欠く。 |

19号住居跡

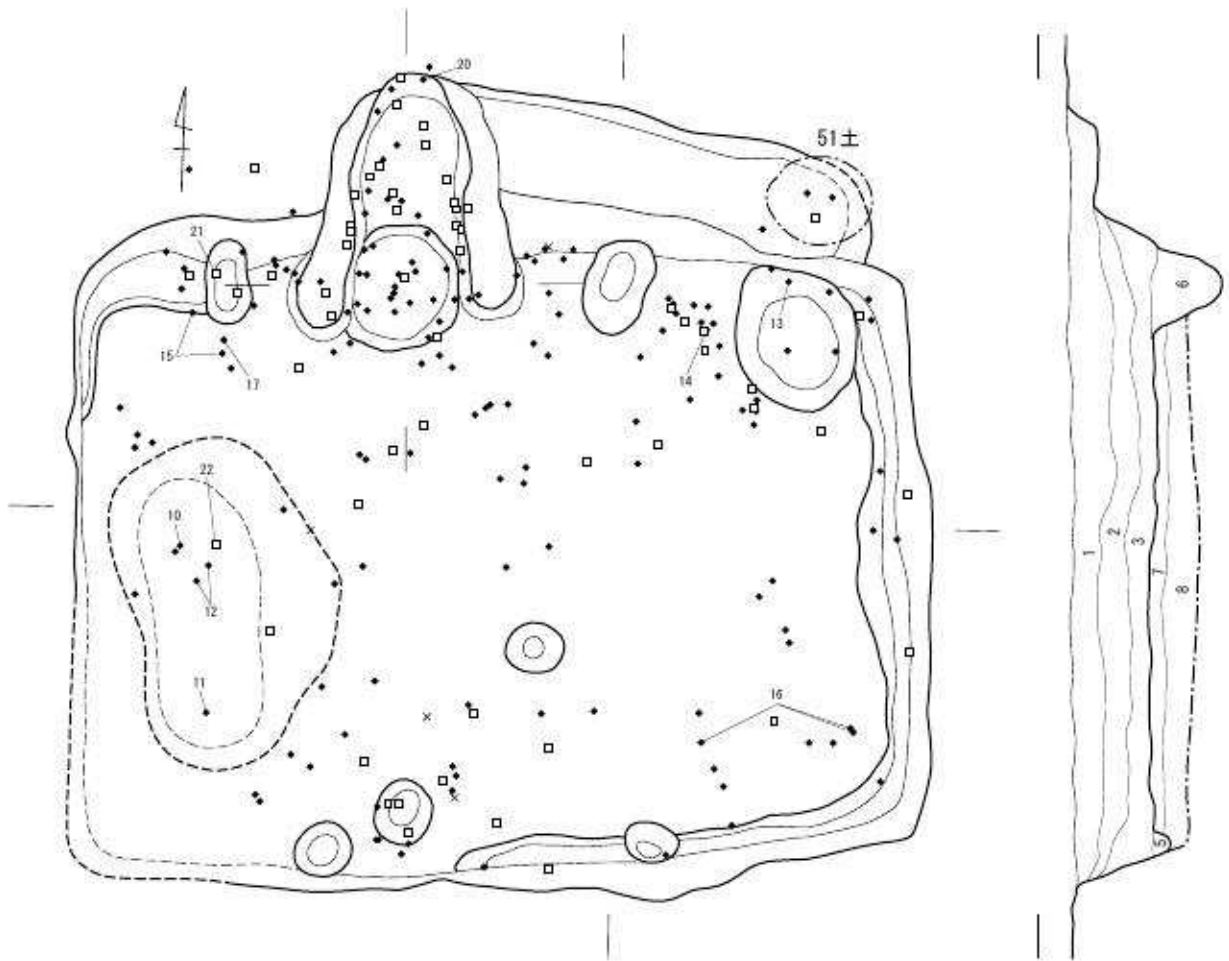
- | | | |
|---|-------------|-------------------------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色土 | ローム粒少量、粘土ブロック微量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 2 | 10YR3/4暗褐色土 | 焼土粒少量、ロームブロック微量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 3 | 10YR3/3暗褐色土 | (貼床面) ローム粒少量混入、粘性もち、しまる。 |

19号住居跡カマド

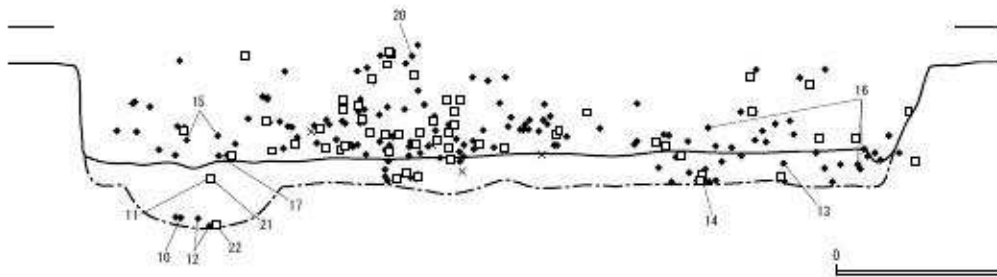
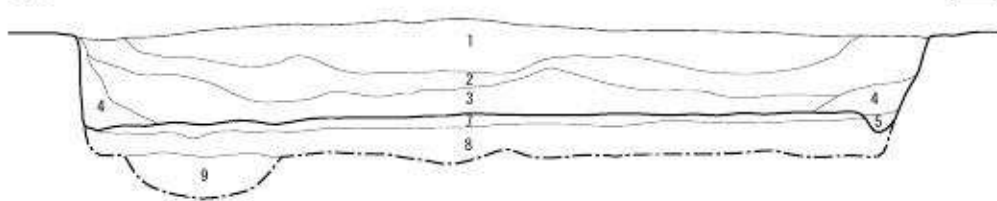
- | | | |
|---|--------------|-----------------------------------|
| 1 | 7.5YR3/3暗褐色土 | ローム粒・焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
|---|--------------|-----------------------------------|

第7図 3号・19号住居跡 (1:40)

本住居跡に伴う主柱穴かどうかは不明である。平均口径55cm、深さ35cmを測る。この他、住居東側より床下土坑が検出されている。長径110cm、短径72cmの不整な長楕円形を呈し、断面は筒状に近い。覆土中から床下土坑にかけて須恵器14片、土師器302片、灰釉陶器1片、陶磁器4片、瓦77片が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して9世紀後葉～10世紀後葉の所産であった可能性が強い。切り合い関係を見ると19号住居跡に後続する。



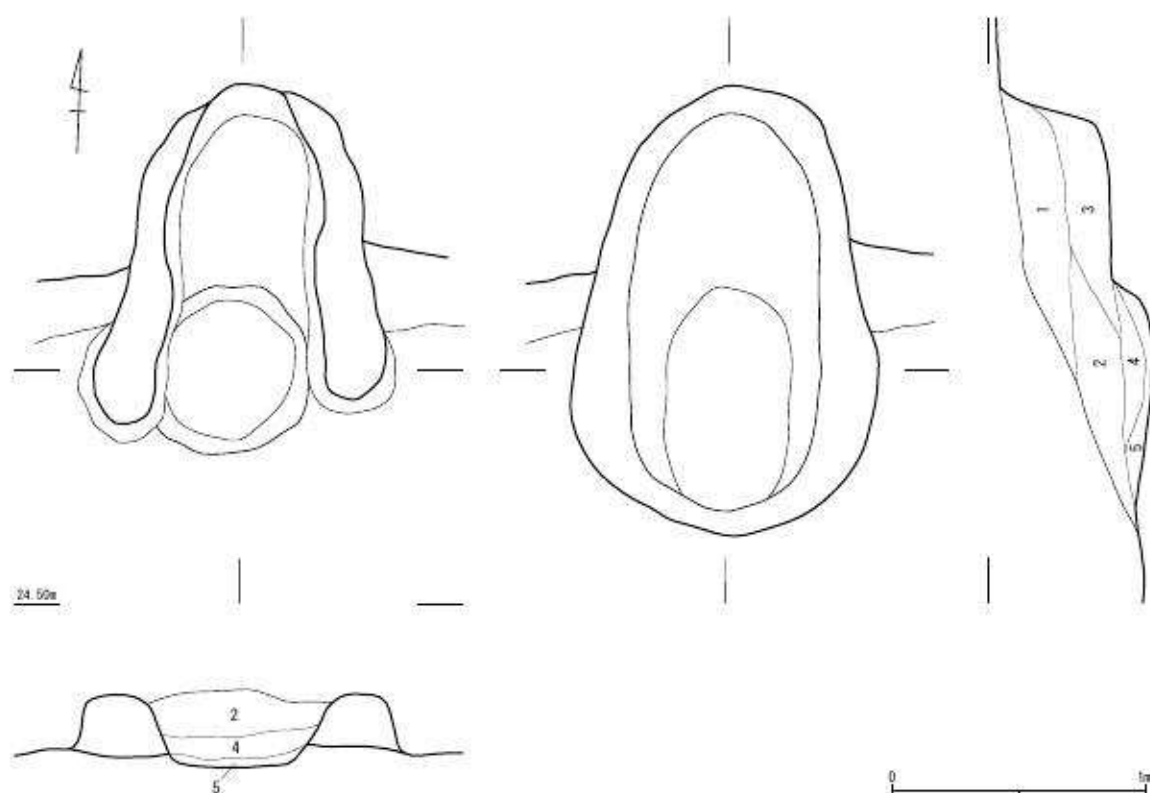
24.50m



4号住居跡

- | | | |
|---|--------------|------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒少量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR5/6明褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性欠き、しまる。 |
| 5 | 7.5YR4/4褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性・しまり欠く。 |
| 6 | 7.5YR5/6明褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 7 | 7.5YR3/4暗褐色土 | (貼床面) ローム粒多量混入、やや粘性・しまり欠く。 |
| 8 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 9 | 7.5YR5/6明褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第8図 4号住居跡 (1:40)



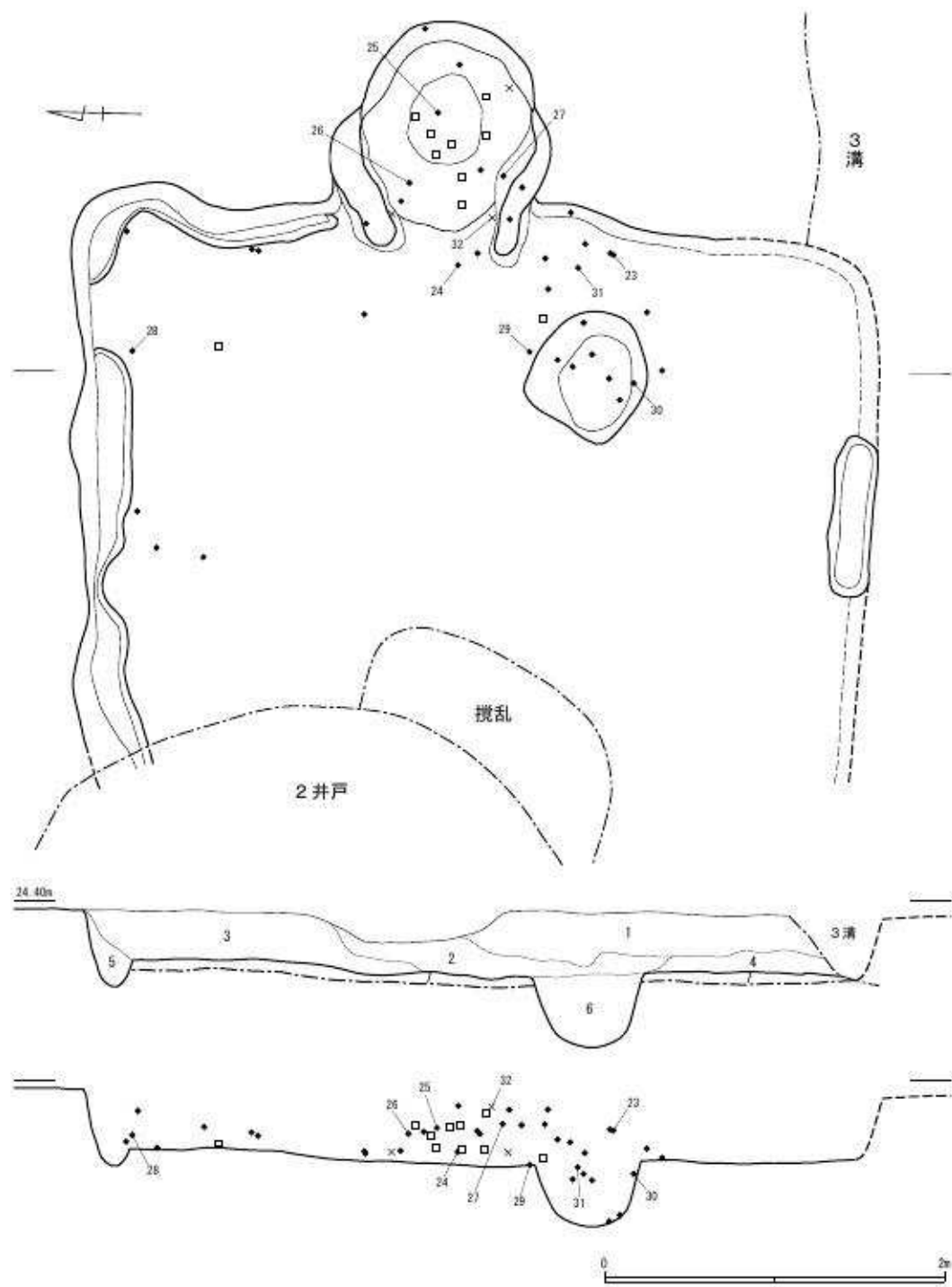
4号住居跡カマド

- | | |
|-----------------|---------------------------------|
| 1 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |
| 3 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・焼土粒・粘土ブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 7.5YR3/3暗赤褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 5 7.5YR6/8褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、粘性もち、しまる。 |

第9図 4号住居跡カマド (1:30)

4号住居跡

調査区の南東端に近いH・I-4・5区に位置する。西側を5号住居跡に切られる。平面形は東西方向450cm、南北方向362cmの隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-6°-Wを示す。壁は一部を除いてほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は52cmを測る。暗褐色土を用いて貼床面が形成されていた。床面は全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅14cm、深さ12cmを測り、残存部をほぼ全周する。住居内から6個のピットが検出された。このうち、北側の2個は比較的大きく、本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径45cm、深さ28cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁やや西寄りに位置し、壁外に逆U字形に80cmほど突出する。袖部は白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は71cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ8cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドの東側には奥行き50cmの棚状施設が北壁を掘り込むような形で造られており、北東隅には貯蔵穴状の土坑がみられる。長径73cm、深さ30cmの楕円形を呈し、断面は筒状に近い。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは6~12cmを測り、西側には床下土坑を伴う。覆土中から床下にかけて須恵器97片、土師器1125片、灰釉陶器6片、陶磁器2片、瓦133片、鉄製品1点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀前葉の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると5号住居跡に先行する。



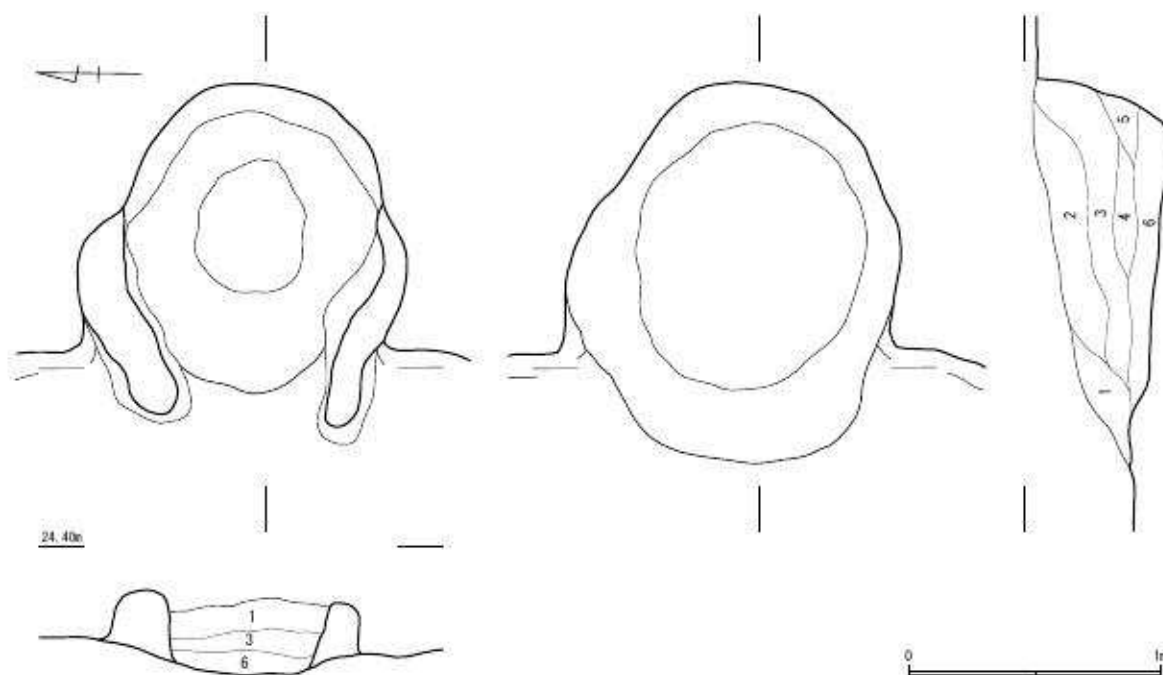
5号住居跡

- | | | |
|---|--------------|----------------------------------|
| 1 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・赤色粒、炭化物粒少量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5Y2/3暗褐色土 | ローム粒、赤色粒微量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR6/8褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 5 | 7.5YR4/6褐色土 | ローム粒多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 6 | 7.5YR4/4褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 7 | 7.5YR3/4暗褐色土 | (粘床面) ローム粒多量、炭土粒少量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第10図 5号住居跡 (1:40)

5号住居跡

調査区の南東端に近いG・H-4・5区に位置する。東側で4・13号住居跡を切り、西側を2号井戸に切られる。各所に攪乱を受けているが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。残存部の南北方向483cm、東西方向360cm以上を測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。壁は急傾斜で掘り込まれて



5号住居跡カマド

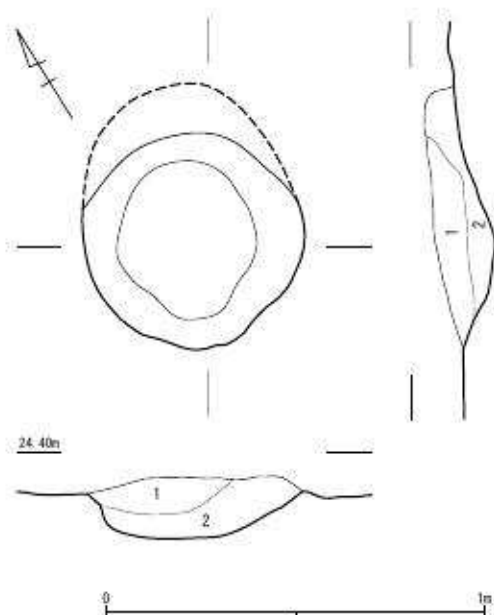
- | | | |
|---|---------------|-----------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・焼土粒少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 2.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・焼土粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR3/3暗赤褐色土 | ローム粒・焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 5 | 7.5YR5/8橙色土 | ローム粒・焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 6 | 7.5YR3/3暗赤褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性もち、ややしまる。 |

第11図 5号住居跡カマド (1:30)

おり、残存部の最大壁高は36cmを測る。暗褐色土を用いて貼床面が形成されていた。床面は全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅15cm、深さ10cmを測り、残存部をほぼ全周する。ピットは認められなかった。カマドは東壁中央部に位置し、壁外に中央部が膨らんだ逆U字形に90cmほど突出する。袖部は白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は53cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ10cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドの南東側には貯蔵穴状の土坑がみられる。長径78cm、深さ40cmの楕円形を呈し、断面は筒状に近い。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは4～6cmを測る。覆土中から貯蔵穴状の土坑、および床下にかけて須恵器31片、土師器318片、灰釉陶器3片、瓦28片、鉄製品5点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀末～11世紀初頭の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると4・13号住居跡に後続する。

6号住居跡

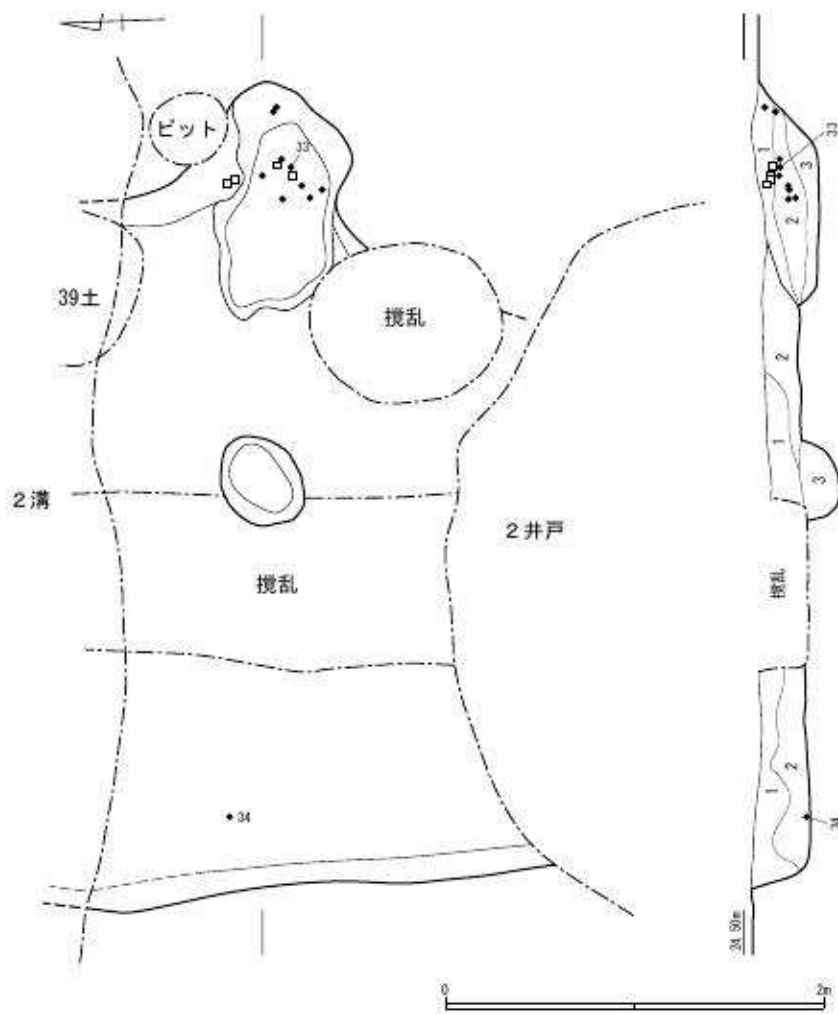
調査区の北西端に近いC-1区に位置する。東側に10号住居跡、北西側に17号住居跡が近接して分布する。各所に攪乱を受けており、カマドの燃焼部の一部が確認されただけである。平面形、規模、長軸方向などは不明である。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積しており、火床面は強く赤化している。基底部は深さ20cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマド内より土師器2片が出土したが、いずれも細片である。伴出土器やカマドのあり方などから判断して奈良・平安時代の所産であった可能性が強いが、正確な時期は不明である。



6号住居跡カマド

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・焼土粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、しまる。
- 2 7.5YR3/3暗赤褐色土 ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性もち、しまる。

第12図 6号住居跡カマド (1:20)



7号住居跡

- 1 7.5YR2/3暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入、粘性もち、しまる。
- 2 7.5YR2/3暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒多量混入、粘性もち、しまる。
- 3 7.5YR2/3暗褐色土 ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。

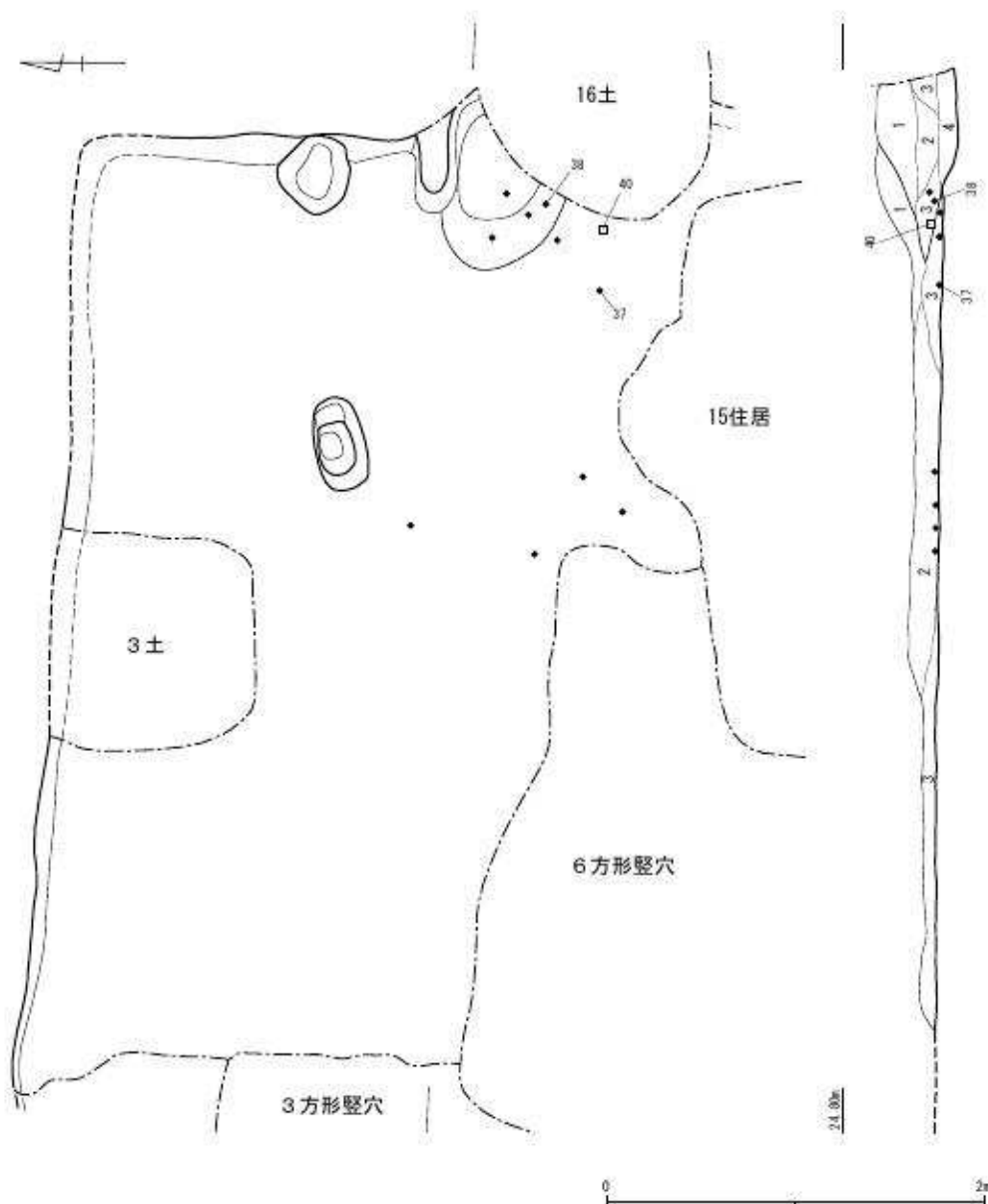
7号住居跡カマド

- 1 7.5YR4/3褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物少量混入、粘性もち、ややしまる。
- 2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・焼土粒・粘土ブロック少量混入、粘性もち、しまる。
- 3 7.5YR3/3暗赤褐色土 ローム粒・焼土粒多量混入、粘性もち、しまる。

第13図 7号住居跡 (1:40)

7号住居跡

調査区の南東側、G-4区に位置する。南東側に5号住居跡が重複分布するが、切り合い関係は不明である。各所に攪乱を受けているが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。残存部の東西方向は370 cm、主軸方向はN-87°-Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は30 cmを測る。床面はV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝やピットは認められなかった。カマドは東壁側に造られており、壁外に不整な逆U字形に60 cmほど突出する。袖部は認められなかったが、燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部分は深さ10 cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドの南側より土坑が検出されている。長径51 cm、深さ20 cmを測り、断面は筒状ないし鍋底状を呈する。カマドを中心に須恵器16片、土師器250片、瓦13片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀中葉～後葉の所産であった可能性が高い。



8号住居跡

- 1 7.5YR2/3暗褐色土 ローム粒少量混入、やや粘性もち、しまる。
- 2 7.5YR2/3暗褐色土 ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。
- 3 7.5YR3/3暗赤褐色土 ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性もち、しまる。

8号住居跡カマド

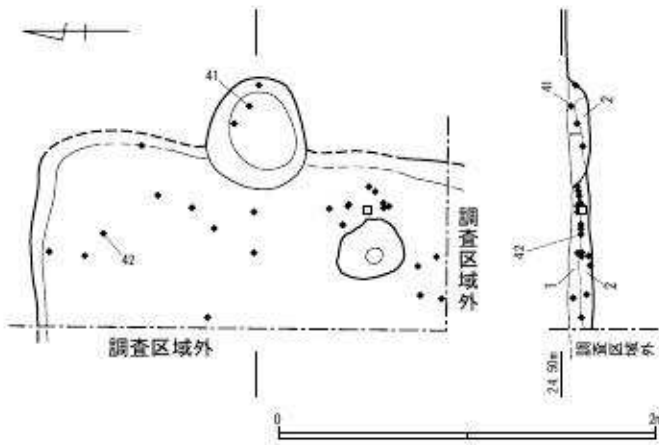
- 1 10YR3/3暗褐色土 焼土粒多量混入、粘性もち、しまる。
- 2 10YR3/4暗褐色土 焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
- 3 7.5YR6/8棕色土 ローム粒・焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、しまる。
- 4 10YR3/4暗褐色土 焼土粒多量・ロームブロック少量混入、やや粘性もち、しまる。

第14図 8号住居跡 (1:40)

8号住居跡

調査区の北東側、G・H-2・3区に位置する。南側を15号住居跡に切られる。各所に攪乱を受けているが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。残存部の南北方向は340cm以上、東西方向は510cm以上を測る。主軸方向はN-85°-Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は33cmを測る。床面はV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から2個のピットが検出された。北壁に沿うように整然と配列されており、本住居跡に伴う支柱穴であった可能性も考えられる。平均口径45cm、深さ28cmを測る。カマドは東壁ほぼ中央部に位置するが、南半分を16号土坑に切られている。左袖部は白色粘土を用いて造られている。燃焼部には広い範囲にわたって焼土

が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底は深さ9cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドから床面にかけて須恵器11片、土師器123片、灰釉陶器1片、瓦13片、軒平瓦1点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して9世紀前葉の所産であった可能性が高い。切り合い関係を見ると15号住居跡に先行する。



9号住居跡

- 1 7.5YR4/3褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入、粘性もち、ややしまる。
- 2 7.5YR4/3褐色土 ローム粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。

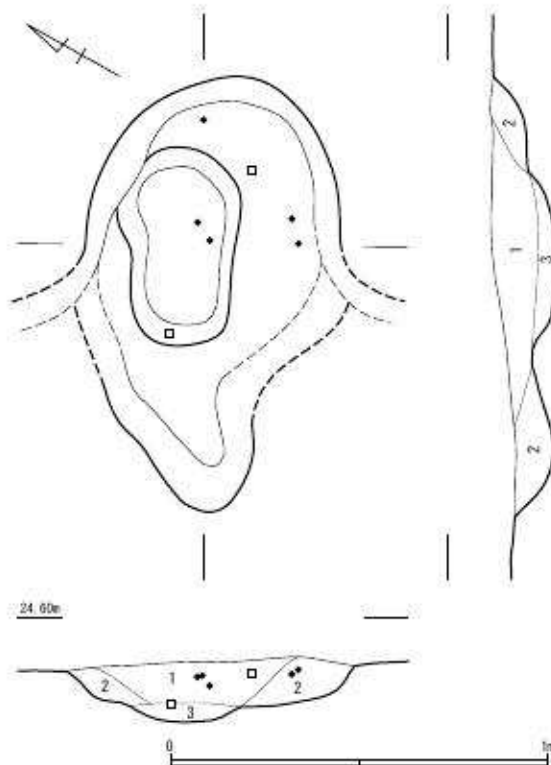
9号住居跡カマド

- 1 7.5YR3/3暗赤褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物多量混入、粘性もち、しまる。
- 2 7.5YR3/3暗赤褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒多量混入、粘性もち、しまる。

第15図 9号住居跡 (1:40)

9号住居跡

調査区の南西端、A-4・5区に位置する。東側に離れて18号住居跡が分布する。南側と西側は調査区域外にかかるが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。確認部の東西方向100cm以上、南北方向220cm以上を測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は14cmを測る。床面はV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝やピットは認められなかった。カマドは東壁ほぼ中央部に位置し、壁外に逆U字形に36cmほど突出する。袖部は認められなかったが、燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底は深さ5cmほどの楕円形に掘り込まれている。覆土中から床面にかけて須恵器1片、土師器62片、瓦1片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀中葉の所産であった可能性が高い。



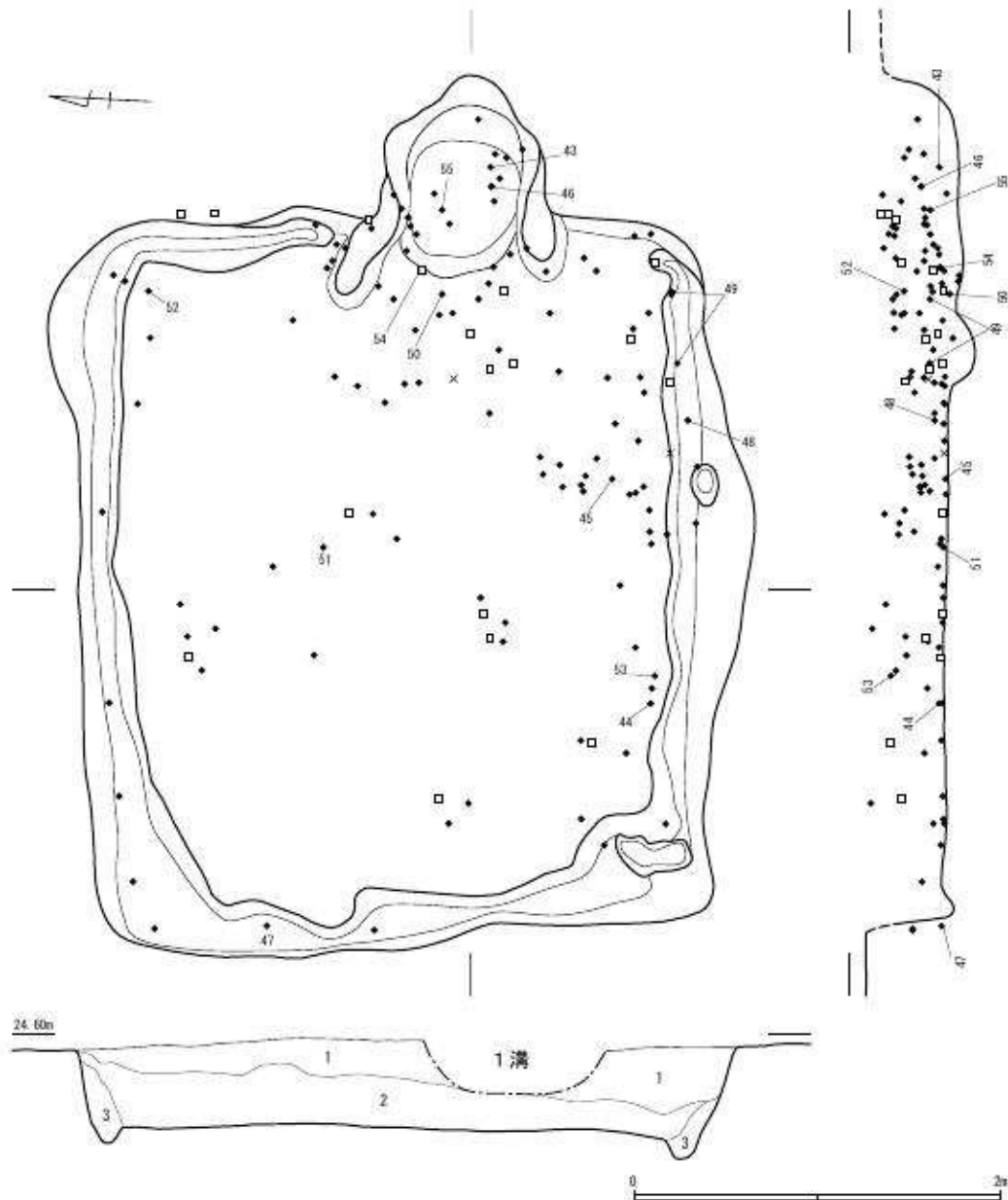
10号住居跡カマド

- 1 10YR4/4褐色土 ローム粒・焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、やや粘性欠き、しまる。
- 2 10YR3/3褐色土 ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性欠き、しまる。
- 3 7.5YR6/8褐色土 ローム粒・焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、しまる。

第16図 10号住居跡カマド (1:20)

10号住居跡

調査区の中央部北西側、D-2区に位置する。北東側に14号住居跡、北西側に8号住居跡が近接して分布する。各所に攪乱を受けており、カマドの燃焼部の一部が確認されただけである。平面形、規模、長軸方向などは不明である。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積しており、火床面は強く赤化している。基底は深さ20cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマド内より土師器28片、瓦3片が出土したが、いずれも細片である。伴出土器やカマドのあり方などから判断して10世紀後葉の所産であった可能性が高い。



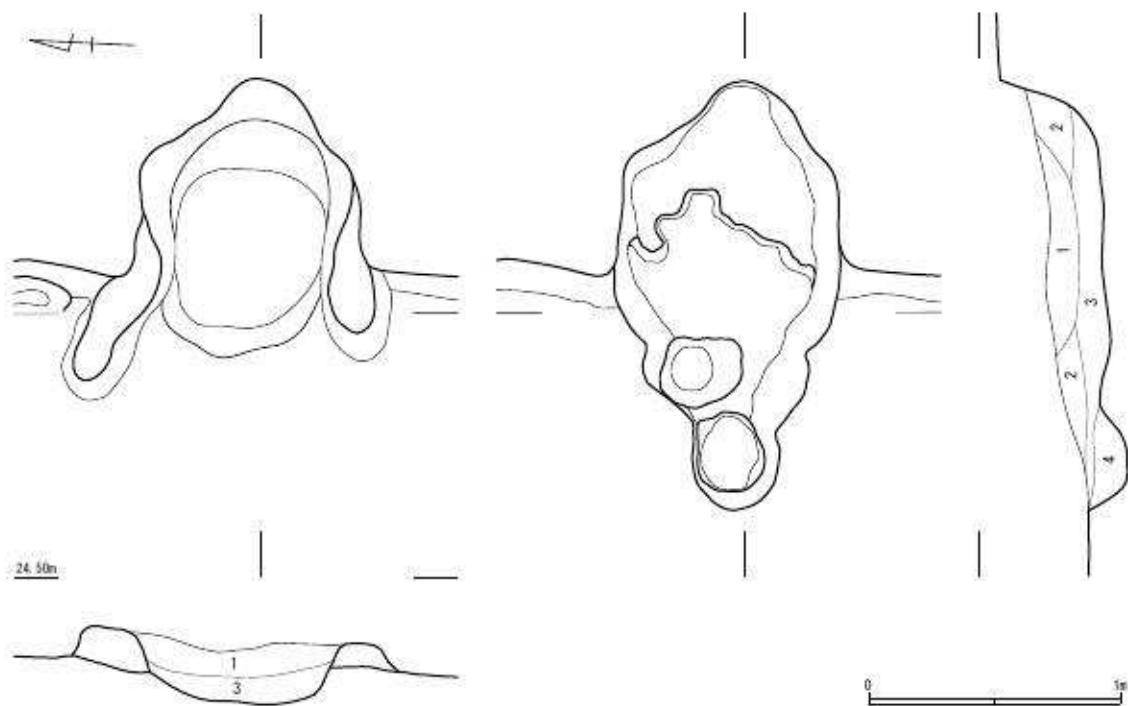
11号住居跡

- | | | |
|---|-------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR3/4暗褐色土 | ロームブロック・焼土粒・多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 2 | 10YR3/3暗褐色土 | ロームブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 10YR3/4暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。 |

第17図 11号住居跡 (1:40)

11号住居跡

調査区のほぼ中央部、E・F-2・3区に位置する。南側に近接して3・18・19号住居跡が分布する。上面を1号溝に切られるが、遺存状態は良好である。平面形は東西方向410cm、南北方向368cmの隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-88°-Eを示す。壁は一部を除いてほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は48cmを測る。床面はV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅18cm、深さ12cmを測り、南東側を除いてほぼ全周する。住居内から2個のピットが検出されたが、いずれも小さく、本住居跡に伴う主柱穴とみなすことはできない。カマドは長軸線に沿った東壁やや南寄りに位置し、壁外に中央部が膨らんだ逆U字形に70cmほど突出する。袖部は白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は68cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化



11号住居跡カマド

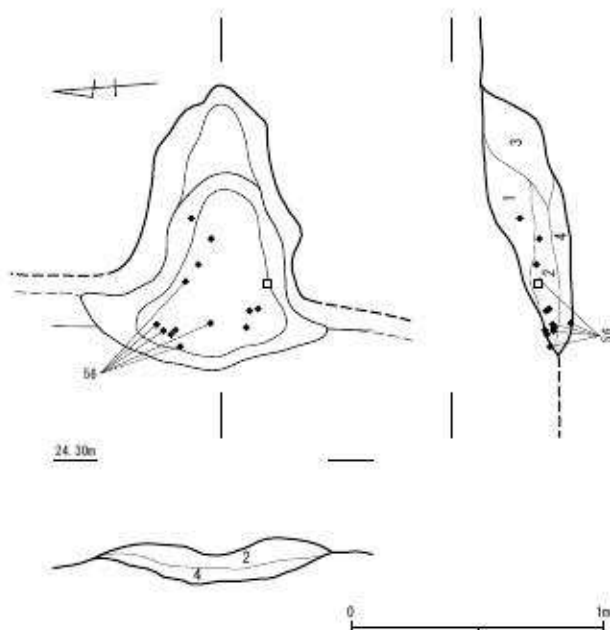
- | | | |
|---|--------------|-------------------------------|
| 1 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量、炭化物粒多量混入、粘性欠き、しまる。 |
| 2 | 7.5YR3/3暗褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量混入、粘性欠き、しまる。 |
| 3 | 7.5YR4/8赤褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、粘性欠き、しまる。 |
| 4 | 7.5YR6/8橙色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性欠き、ややしまる。 |

第18図 11号住居跡カマド (1:30)

しており、基底部は深さ7cmほどの楕円形に掘り込まれている。覆土中から床面にかけて須恵器257片、土師器895片、灰釉陶器2片、陶磁器5片、土製品1点、瓦87片、鉄製品5点という多量の遺物が出土した。

12号住居跡

調査区の北東端、I・J-1・2区に位置する。東側で1号住居跡を切る。南側を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。確認部の東西の径310cm、南北の径70cm以上を測る。主軸方向、カマドの位置などは不明である。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は42cmを測る。床面はV～VI層中に形成されていた。おおむね平坦である。東壁に沿って周溝が検出されたが、ピットは認められなかった。覆土中から床面にかけて須恵器1片、土師器11片、灰釉陶器1片が出土したが、いずれも細片である。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀後葉以降の所産であった可能性が強い。切り合い



13号住居跡カマド

- | | | |
|---|--------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色土 | 焼土粒多量、炭化物少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 2 | 10YR3/4暗褐色土 | 焼土粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 3 | 10YR3/4暗赤褐色土 | 焼土粒多量、炭化物少量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR6/8橙色土 | ローム粒・焼土粒多量、炭化物少量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第19図 13号住居跡カマド (1:30)

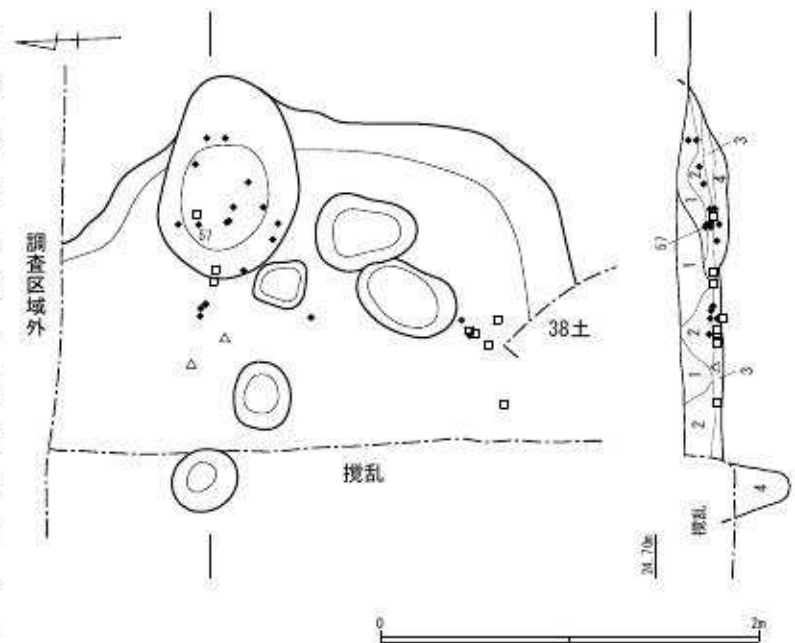
関係を見ると1号住居跡に後続する。

13号住居跡

調査区の南東端に近いH-5区に位置する。大部分を5号住居跡に切られており、カマドの一部が確認されただけである。平面形、規模、長軸方向などは不明である。カマドは東壁側に造られており、壁外に逆U字形に70cmほど突出する。袖部は認められなかったが、燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底は深さ5cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマド内から須恵器18片、土師器77片、陶磁器1片、瓦9片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して9世紀中葉の所産であった可能性が高い。

14号住居跡

調査区の中央部北側、D・E-1・2区に位置する。南西側に近接して10号住居跡が分布する。北側は調査区域外にかかり、西側の大部分が工場の基礎で削平されているが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。残存部の東西方向190cm以上、南北方向270cm以上を測る。主軸方向はN-87°-Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は30cmを測る。床面はV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から5個のピットが検出されたが、配列は不規則であり、本住居跡に伴う支柱穴とみなすことはできない。平均口径48cm、深さ18cmを測る。カマドは長軸線に沿った東壁北寄りに位置し、壁外に中央部が膨らんだ逆U字形に20cmほど



14号住居跡

- 1 7.5133/4暗褐色土
- 2 7.5132/3暗褐色土
- 3 7.5133/4暗褐色土
- 4 7.5134/6褐色土

- ローム粒・炭化物粒少量混入、やや粘性もち、しまる。
- ローム粒、赤色粒少量混入、やや粘性もち、しまる。
- ローム粒多量、ロームブロック混入、やや粘性もち、しまる。
- ローム粒多量、焼土粒少量混入、粘性もち、ややしまる。

14号住居跡カマド

- 1 7.5134/3褐色土
- 2 7.5133/4暗褐色土
- 3 7.5136/8暗褐色土
- 4 7.5133/3暗赤褐色土

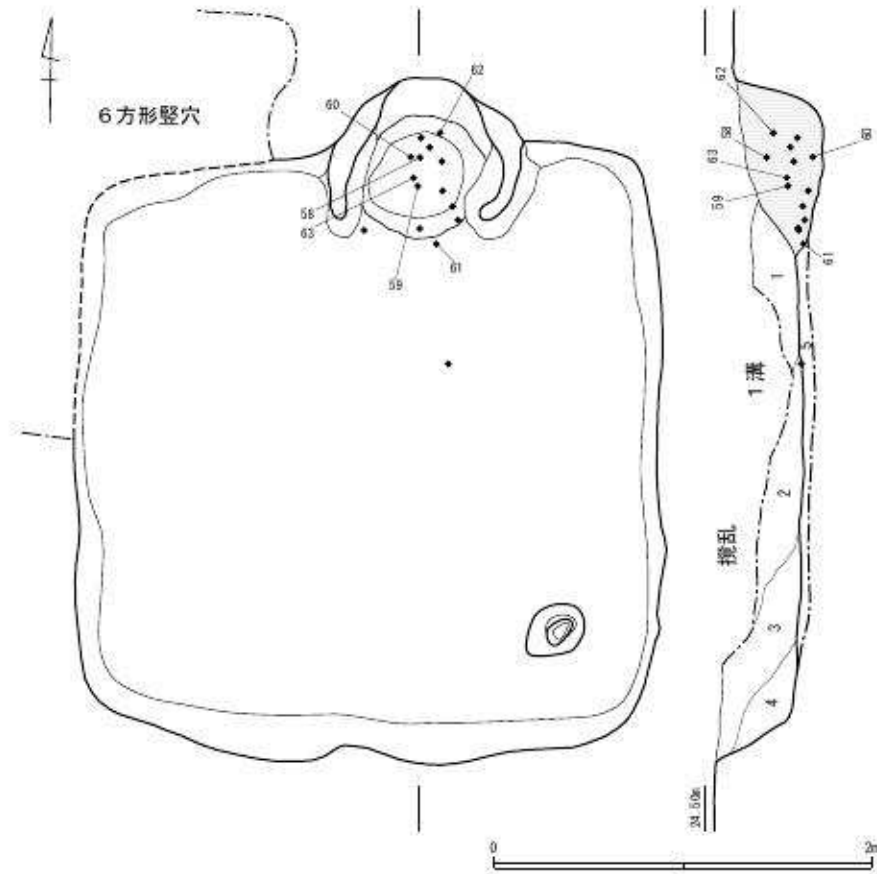
- ローム粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。
- ローム粒・焼土粒・粘土ブロック少量混入、やや粘性もち、しまる。
- ローム粒・焼土粒・炭化物多量混入、粘性もち、しまる。
- ローム粒・焼土粒多量、炭化物少量混入、粘性もち、ややしまる。

第20図 14号住居跡 (1:40)

突出する。袖部は認められなかったが、燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底は深さ5cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマド内および床面から須恵器7片、土師器73片、瓦14片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀後葉の所産であった可能性が高い。

15号住居跡

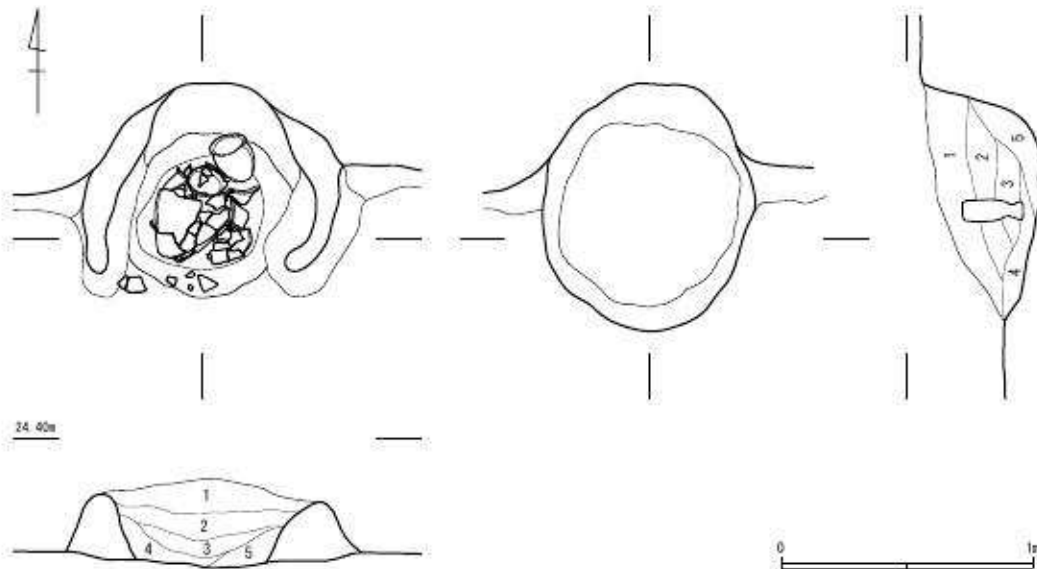
調査区の北東側、G・H-2・3区に位置する。北側で8号住居跡を切る。北西側を6号方形竪穴に切られるが、遺存状態は比較的良好である。平面形は南北方向320cm、東西方向310cmの隅丸方形を呈する。主



15号住居跡

- | | | |
|---|--------------------|------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量、炭化物少量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR4/4褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性・しまり欠く。 |
| 5 | 7.5YR3/4暗褐色土 (貼床面) | ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第21図 15号住居跡 (1:40)



15号住居跡カマド

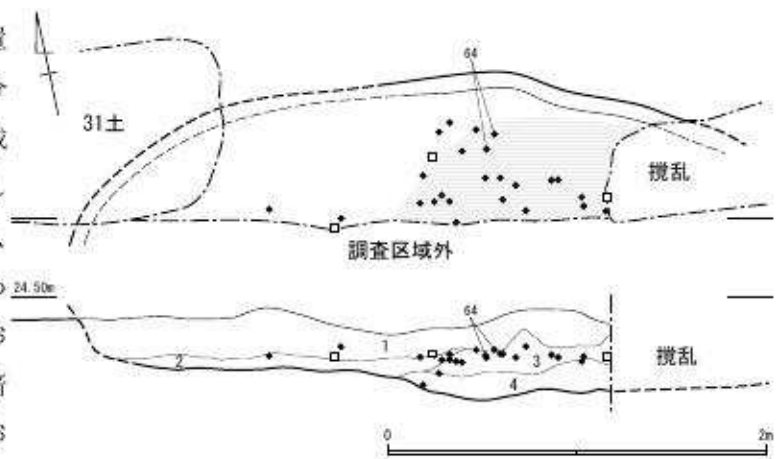
- | | | |
|---|---------------|---------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・焼土粒少量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・焼土ブロック少量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・焼土粒・焼土ブロック多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 7.5YR5/8暗褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性もち、しまり欠く。 |
| 5 | 7.5YR3/3暗赤褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性もち、ややしまる。 |

第22図 15号住居跡カマド (1:30)

軸方向はN-1°-Eを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は57cmを測る。暗褐色土を用いて貼床面が形成されていた。床面は全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から1個のピットが検出された。南東隅近くに分布しており、本住居跡に伴う支柱穴と思われる。口径34cm、深さ25cmを測る。カマドは長軸線に沿った北壁やや東寄りに位置し、壁外に中央部が膨らんだ逆U字形に40cmほど突出する。袖部は白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は53cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積しており、カマド支脚に利用されたと考えられる長頸壺が逆位の状態で出土した。火床面は強く赤化しており、基底部分は深さ10cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドを中心に須恵器62片、土師器192片、瓦2片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して8世紀末から9世紀前葉の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると8号住居跡に後続する。

16号住居跡

調査区の中央部南側、F-5区に位置する。北西側に近接して3号住居跡が分布する。北側を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。規模、主軸方向、カマドの位置などは不明である。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は22cmを測る。暗褐色土を用いて貼床面が形成されており、全体に起伏をもつ。周溝やピットは認められなかったが、東側を中心に焼土が広く堆積していた。掘り方は部分的で



16号住居跡

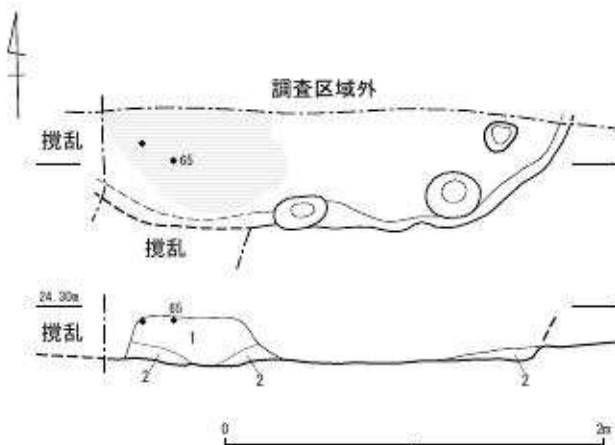
- | | | |
|---|-------------|-------------------------------------|
| 1 | 10VR3/3暗褐色土 | ローム粒多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 10VR3/4暗褐色土 | ローム粒多量、粘土ブロック少量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 3 | 7.5VR4/4褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 4 | 10VR3/4暗褐色土 | (貼床面) 焼土粒多量、ロームブロック微量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第23図 16号住居跡 (1:40)

あるが、床面からの深さは8~17cmを測り、起伏に富む。覆土中から床下にかけて須恵器8片、土師器73片、瓦13片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して10世紀後葉の所産であった可能性が強い。

17号住居跡

調査区の北西端、B-1区に位置する。東側に近接して6号住居跡が分布する。南側を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。規模、主軸方向、カマドの位置などは不明である。壁は比較的緩傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は11cmを測る。床面はV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかったが、西側を中心に焼土が広く堆積していた。住居内から3個のピットが検出されたが、配列は不規則であり、本住居跡に伴

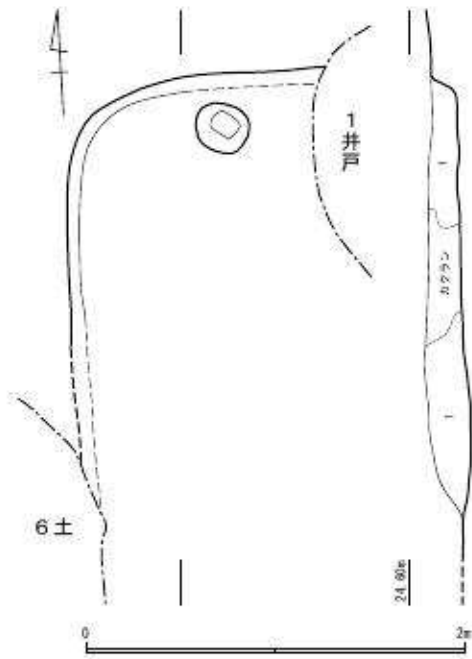


17号住居跡

- | | | |
|---|--------------|--------------------------------|
| 1 | 10VR3/4暗褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック少量混入、粘性欠き、ややしまる。 |
| 2 | 7.5VR3/4暗褐色土 | ローム粒・焼土粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第24図 17号住居跡 (1:40)

う支柱穴とみなすことはできない。平均口径 25 cm、深さ 10 cm を測る。覆土中から須恵器 3 片、土師器 59 片、瓦 1 片、鉄製品 3 点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して 10 世紀中葉の所産であった可能性が高い。



18号住居跡

1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・炭化物粒少量混入、粘性欠き、しまる。

第 25 図 18 号住居跡 (1 : 40)

18 号住居跡

調査区の中央部南西側、D-4 区に位置する。東側に 3・19 号住居跡が重複分布するが、攪乱が激しく、切り合い関係は不明である。北壁と西壁の一部が確認されただけであるが、平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われる。規模、長軸方向、カマドの位置などは不明である。壁は比較的緩傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は 14 cm を測る。床面は V 層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から 1 個のピットが検出された。口径 32 cm、深さ 19 cm を測る。覆土中から須恵器 2 片、土師器 15 片、瓦 6 片が出土したが、いずれも細片である。伴出土器や覆土のあり方などから判断して奈良・平安時代の所産であった可能性が高いが、正確な時期は不明である。

19 号住居跡

調査区の中央部南西側、D・E-4・5 区に位置する。西側に 18 号住居跡が重複分布するが、攪乱が激しく、切り合い関係は不明である。東側を 3 号住居跡に切られる。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、東壁の一部とカマドの燃焼部が検出されただけであり、規模、長軸方向などは不明である。暗褐色土を用いて貼床面が形成されていたと思われるが、上部を削平されており、床面から掘り方までの深さは不明である。周溝やピットは認められなかったが、北東側より本住居跡のものと思われる土坑が検出されている。長径 101 cm、深さ 26 cm の長楕円形を呈し、断面は鍋底状に近い。カマド燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ 8 cm ほどの楕円形に掘り込まれている。遺物の出土は認められなかった。カマドのあり方や切り合い関係などから判断して 9 世紀後葉以前の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると 3 号住居跡に先行する。

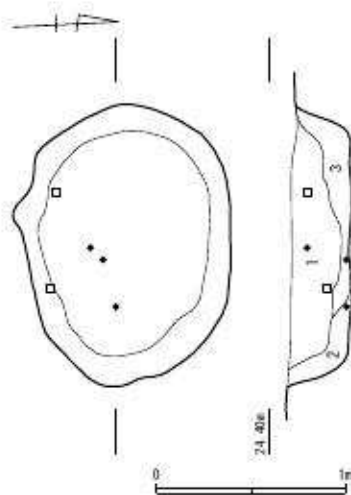
3-2 土坑

奈良・平安時代の土坑は合計10基検出されている。調査区の中央部北側と南東部に集中分布する傾向をみせている。

このうち、11号、12号、13号、19号、20号、21号、24号、52号の8基の土坑は、形状や規模、人為的な堆積状態などから墓塚であった可能性が高いものであり、20号からは10世紀後葉の赤彩された坏、21号土坑からは10世紀後葉の高台付坏、24号からは10世紀後葉の内面黒色処理された高台付坏、小玉状の瓦転用砥石、51号からは人頭大の石などが出土している。

19号では、底面より9世紀中葉～後葉の須恵器大甕口縁部、10世紀中葉以降の土師器高台付坏、埴、軒平瓦などが一括して出土しており、一種の廃棄用土坑であった可能性も考えられる。

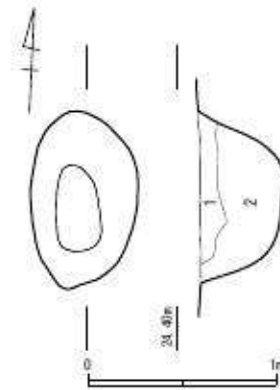
(小野)



11号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・白色粒少量混入、粘性もち、ややしまる。
- 2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒多量、炭化物粒少量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
- 3 7.5YR2/3極暗褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり欠く。

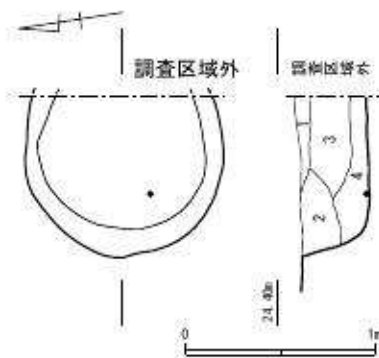
第26図 11号土坑 (1:40)



12号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・白色粒・炭化物粒微量混入、粘性もち、ややしまる。
- 2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混入、やや粘性もち、ややしまり欠く。

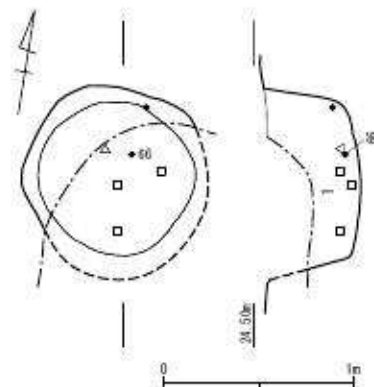
第27図 12号土坑 (1:40)



13号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒少量、赤色粒微量混入、粘性もち、しまる。
- 2 7.5YR2/2黒褐色土 ローム粒・炭化物粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
- 3 7.5YR4/6褐色土 ローム粒・炭化物微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
- 4 7.5YR3/3暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混入、粘性もち、しまる。

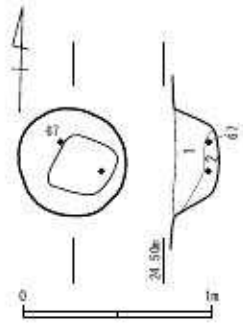
第28図 13号土坑 (1:40)



19号土坑土層

- 1 10YR4/3C5.5黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、しまる。

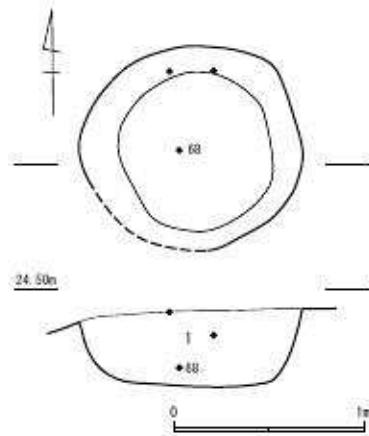
第29図 19号土坑 (1:40)



20号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒多量、炭化物粒微量混入、粘性もち、しまる。
 2 7.5YR4/6褐色土 ローム主体、炭化物粒微量混入、粘性もち、しまる。

第30図 20号土坑 (1:40)



21号土坑土層

- 1 7.5YR4/6褐色土 ローム粒多量、炭化物粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

第31図 21号土坑 (1:40)



24号土坑土層

- 1 7.5YR3/3褐色土 ローム粒・赤色粒、炭化物粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
 2 7.5YR5/8明褐色土 ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

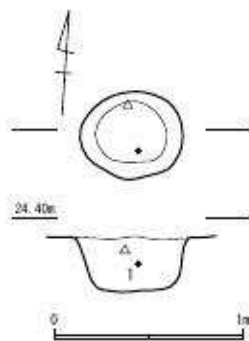
第32図 24号土坑 (1:40)



38号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・炭化物粒少量混入、やや粘性欠き、しまる。

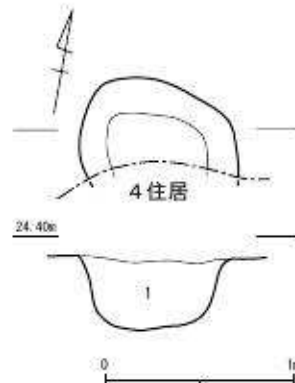
第33図 38号土坑 (1:40)



51号土坑土層

- 1 7.5YR3/3褐色土 ローム粒・赤色粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

第34図 51号土坑 (1:40)



52号土坑土層

- 1 7.5YR4/6褐色土 ローム粒多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

第35図 52号土坑 (1:40)

第2表 奈良・平安土坑一覧

No.	位置	平面形	残存度	規模(長径×短径) cm	深さ cm	長軸方向	断面形	出土遺物	時期	備考
11	I-J-4・5	長楕円形	完存	149 × 114	31	N-87°-W	筒状	土師器 26片 瓦 3片	10世紀末～ 11世紀初頭か	墓墳?
12	I-5	長楕円形	完存	95 × 57	45	N-2°-W	筒状	土師器 2片 瓦 2片	古代	墓墳?
13	J-5	楕円形	一部欠	105 × (86)	(38)	不明	筒状	土師器 19片 瓦 3片	10世紀～ 11世紀か	墓墳? 東側調査区域外。
19	F-2	略円形	一部	(102) × (99)	46	N-9°-W	筒状	須恵器 7片 土師器 10片 瓦 6片 石製品 1点	10世紀中葉以降	墓墳? 7 堅穴に切られる。 第41図66
20	D-2	略円形	完存	57 × 55	23	N-3°-W	筒状ないし 鍋底状	須恵器 2片 土師器 2片	10世紀後葉	墓墳? 第41図67
21	D-2	略円形	一部欠	118 × 109	40	N-89°-W	筒状ないし 鍋底状	土師器 14片 鉄製品 1点	10世紀後葉	墓墳? 第41図68
24	D-1・2	不整 長楕円形	完存	111 × 69	32	N-11°-W	鍋底状	須恵器 3片 土師器 19片 瓦 1片	10世紀後葉	墓墳? 第41図69・70
38	D-2	不整 長楕円形	一部欠	(161) × (100)	31	N-7°-E	皿状	土師器 2片 石製品 1点	10世紀中葉以降	14住を切る。
51	I-4	不整 楕円形	一部欠	(59) × 52	33	N-75°-E	筒状	土師器 10片 瓦 1片 石製品 1点	古代	
52	H-4	楕円形	一部	(48) × (44)	35	不明	筒状	土師器 1片	古代	墓墳?

3-3 遺物

奈良・平安時代の遺構の内外からは、須恵器の坏・坏蓋・高台付坏・盤・長頸壺、土師器の坏・坏蓋・高台付坏・甕・甌・置き竈、灰釉陶器の皿・碗・平瓶・浄瓶（ないしは水瓶）、緑釉陶器の皿、瓦、金属製品など、多種多様の遺物が出土している。これらの遺物は、住居跡の時空的な分布状況などをふまえると、おおよそ4期に区分することができる。1期は8世紀後葉から9世紀前葉、2期は9世紀中葉、3期は9世紀後葉から10世紀前葉、4期は10世紀中葉から10世紀後葉になる。

1期の遺物が出土する住居跡は、2・8・11・15号住居跡がある。主な遺物の種類としては、土師器の坏、須恵器の坏、高台付坏、坏蓋、盤、甕、長頸壺、灰釉陶器の浄瓶（ないしは水瓶）などがある。この時期は土師器よりも須恵器の使用した割合が高い。今回、この時期で特質するものは、灰釉陶器の浄瓶、須恵器の長頸壺がある。これらの遺物は、一般的な集落での住居跡からの出土はほとんどみられず、国府や国分寺などの役所や寺院、その周辺の集落からの出土があり、今回の出土も国分寺域ならではのものといえる。また11号住居跡から出土した高台付盤には「上家」や「官」の墨書が認められる。これらの文字から考えると、高台付盤を使用していた人が、国府に勤務していた役人か国分寺の僧侶かは不明ではあるが、この人の所属を表していたものと思われる。以上のことから1期の住居は、国府や国分寺に関連する人々が生活していたものと推定することができる。なお、「官」の墨書をもつ盤の高台内には赤色の顔料のようなものが残されている。本例が硯に転用された可能性も考えられるが、断定できない。

2期の遺物が出土する住居跡は13号住居跡のみで、他の住居跡の検出状況に比べると少ない。これは、

調査範囲が狭かったものと考えられるかもしれない。

3期の遺物が出土する住居跡は3・4号住居跡がある。この時期の住居跡の検出数も2期と同様、少ない。調査面積の狭さは否めないが、平将門による常陸国府襲撃や国分寺炎上といった騒乱の影響が少なからずあった可能性も考えられる。今回の遺物の須恵器と土師器の割合は、1期とは異なり、須恵器よりも土師器の方が高い。しかし、住居跡の出土が少ないものの灰釉陶器の出土も見られることから、調査対象地の須恵器の供給が、何らかの理由により、減ったものと思われる。

1期で出土した宗教的な遺物は今回見られなかったが、4号住居跡より出土した土師器の高台付坏の体部に「六万」という墨書がみられる。この「六万」という文字は、「六万遍」や後世の「六十六聖」など宗教的要素の見られるものとして指摘できる。今回特質する遺物としては4号住居跡から出土した置き竈がある。近年、置き竈の使用法として、製品の制作時に火を使用するために用いられたという指摘がある（岡田2004）。置き竈とは別に、この住居跡からは煤が付着した坏が複数出土しており、この住居は何らかの製品の工房であったことも考えられる。以上のことから、調査地は平将門による乱以降も国分寺に関連する集落として機能していたものと思われる。

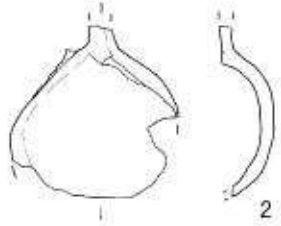
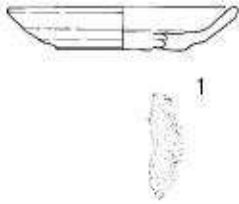
4期の遺物が出土する住居跡は7・9・10・12・14・16・17号住居跡がある。この時期の遺物は土師器の坏や高台付坏、鉄製品の鎌などで、当時期の一般的な集落と大差がない。また、住居跡以外の21号土坑で出土した高台付坏には「中野」という墨書が残されている。これまでにみられた「上家」や「官」、「六万」など国府や宗教的要素を含んだものではなく、個人名と思われる文字の表記は、当該期の調査地が国府や国分寺からの影響が少なからず弱まったという事情を推測することができる。

今回の調査で出土した瓦類は大半が平瓦や丸瓦の細片であり、軒丸瓦や軒平瓦、埴の類は少ない。平瓦や丸瓦は調査区の全体から万遍なく多量に出土している。国分寺近接地という本遺跡の立地上の特徴を示すものあり、住居跡のカマド付近から出土したものはカマドの構築材に転用された可能性も考えられる。大半が縄叩き調整で、わずかにヘラケズリ調整が存在する。丸瓦は全てヘラケズリ調整が施されている。上端の分かるものはすべてが玉縁付のものである。軒丸瓦や軒平瓦には、8世紀中葉～後葉の国分寺第Ⅰ期のものとされる7104d型式と、第Ⅱ期のものとされる8世紀後葉の7108B型式の軒丸瓦、国分寺第Ⅱ期とされる9世紀第一四半～前半の7260Ⅲ型式の軒平瓦などがある。軒丸瓦の7104d型式は国分寺創建期の瓦であり、出土例はあまり多くない。埴は形状の差異は少なく、平均して長さ約20cm、幅約10cm、高さ約6cmに集約される。軒丸瓦や軒平瓦に比べると出土数は約20点と多いが、完形のもの存在しない。

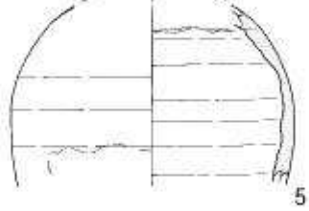
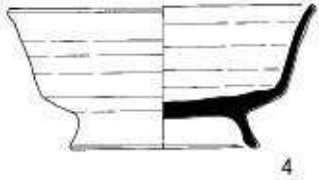
この他、匙状の銅製品、鉄製の鎌、土玉、瓦の転用砥石などがある。鎌は形状からみて右手用であろう。転用砥石はよく使われており、円形に近い形状を持つ。使用前は縄叩きの瓦であろう。

(林)

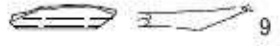
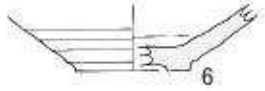
1号住居



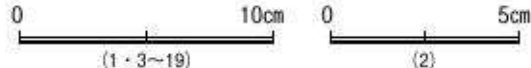
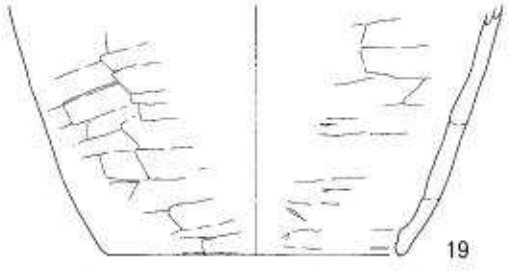
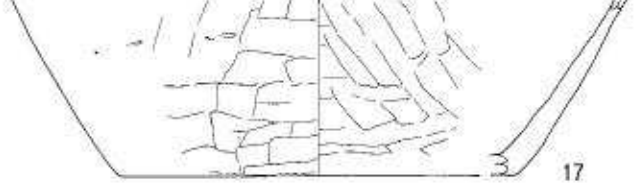
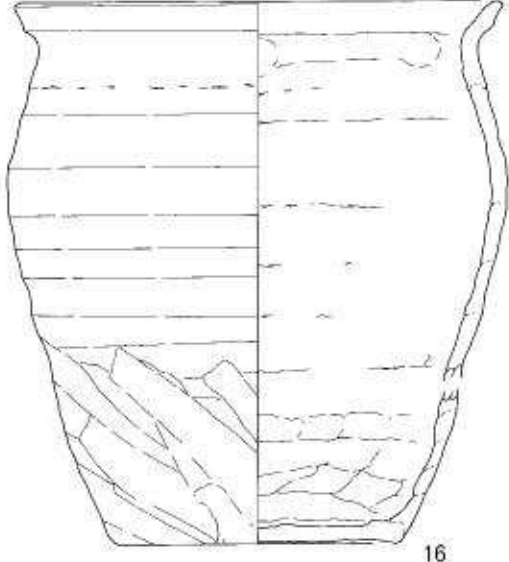
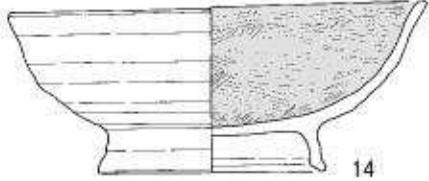
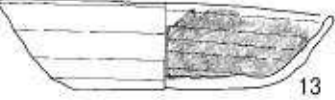
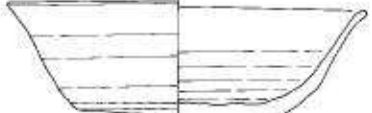
2号住居



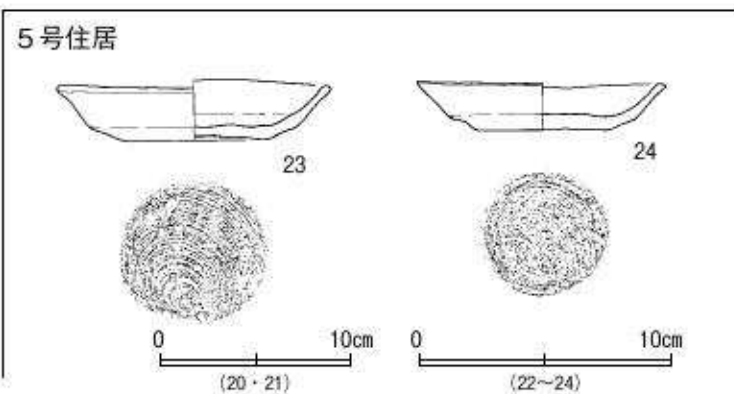
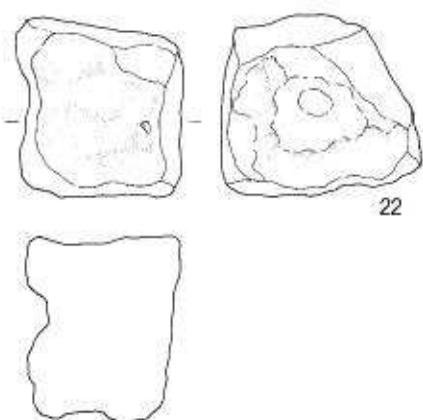
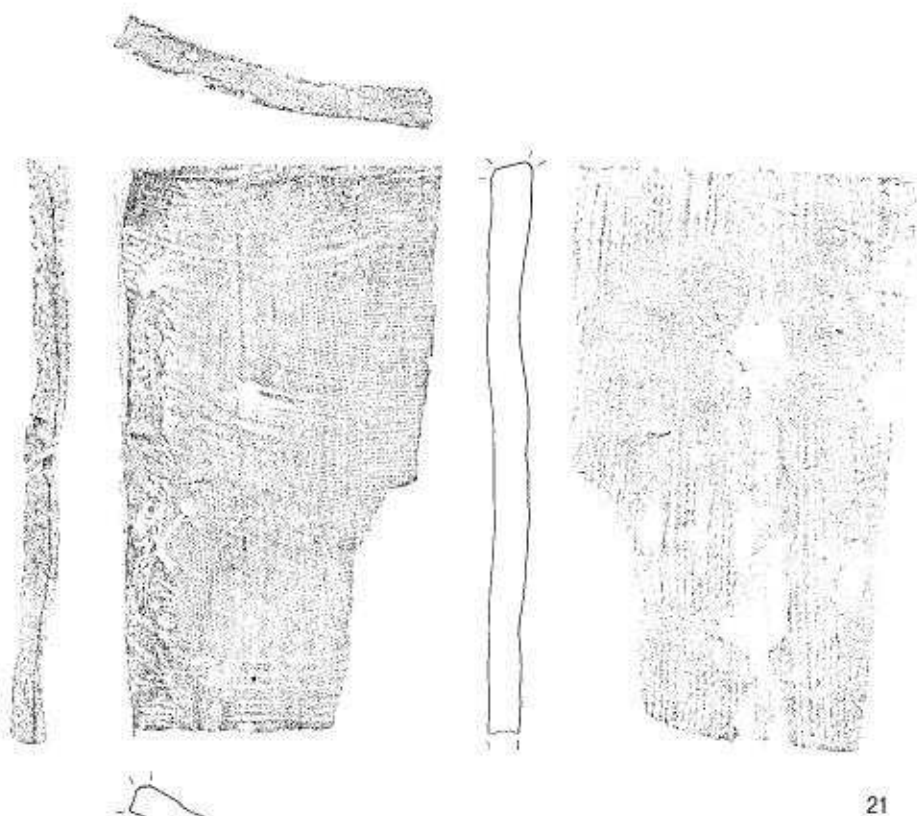
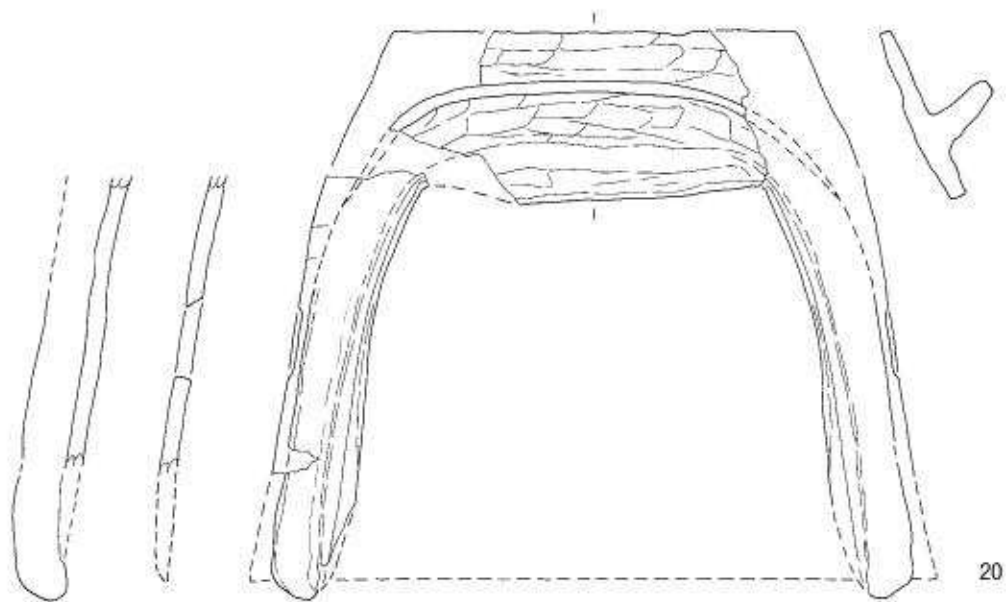
3号住居



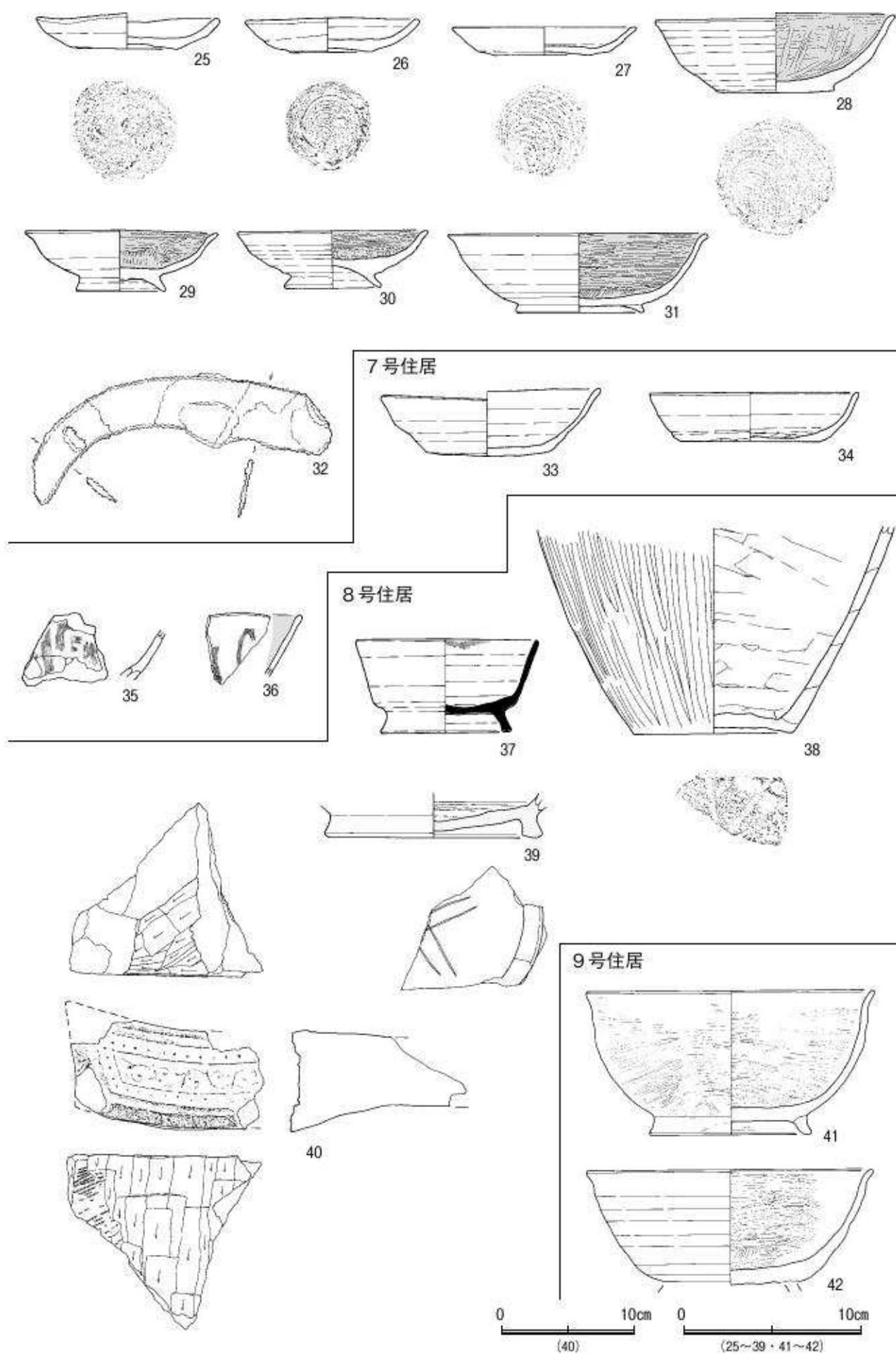
4号住居



第36图 出土遺物(1)

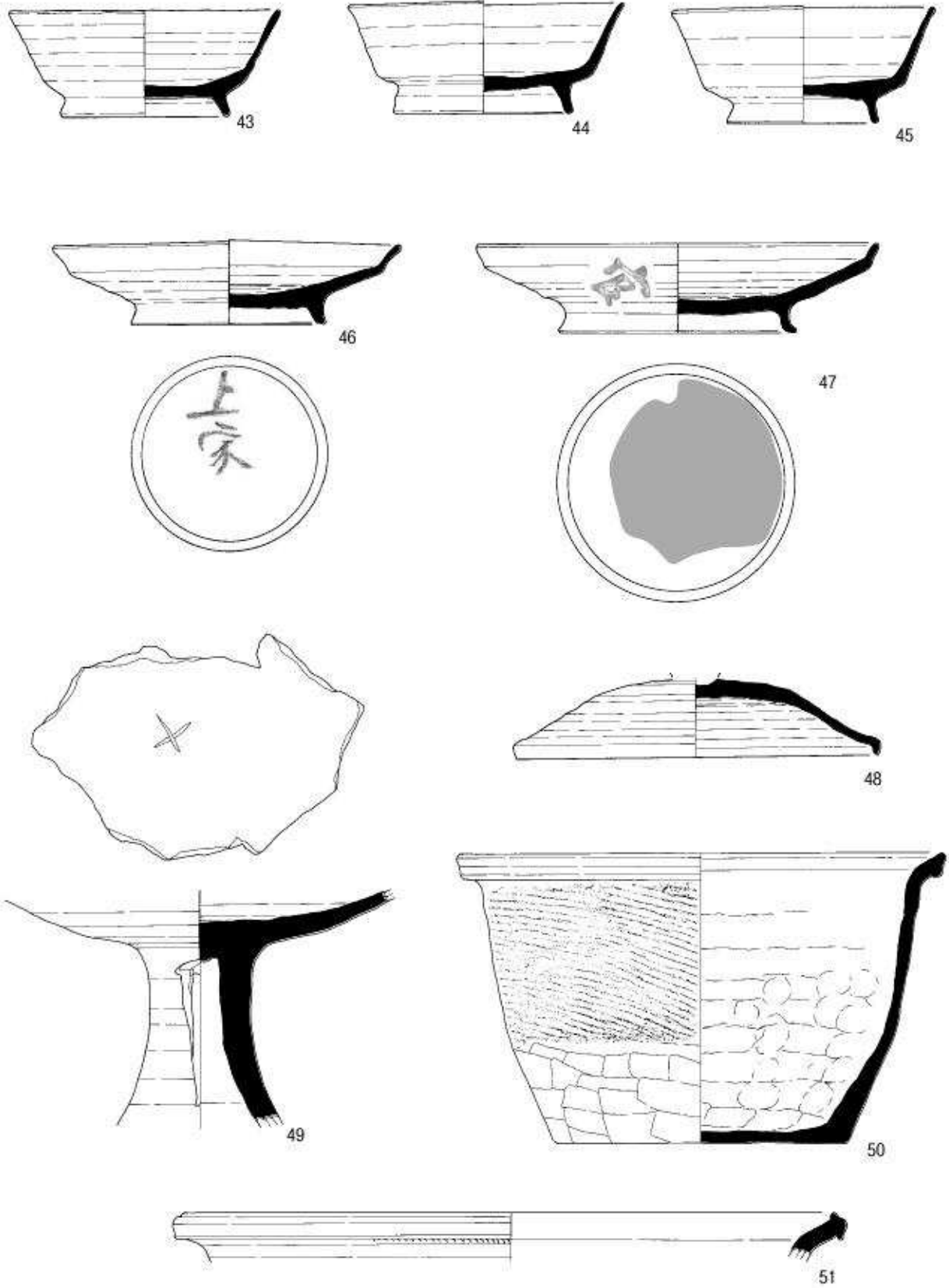


第37图 出土遺物(2)



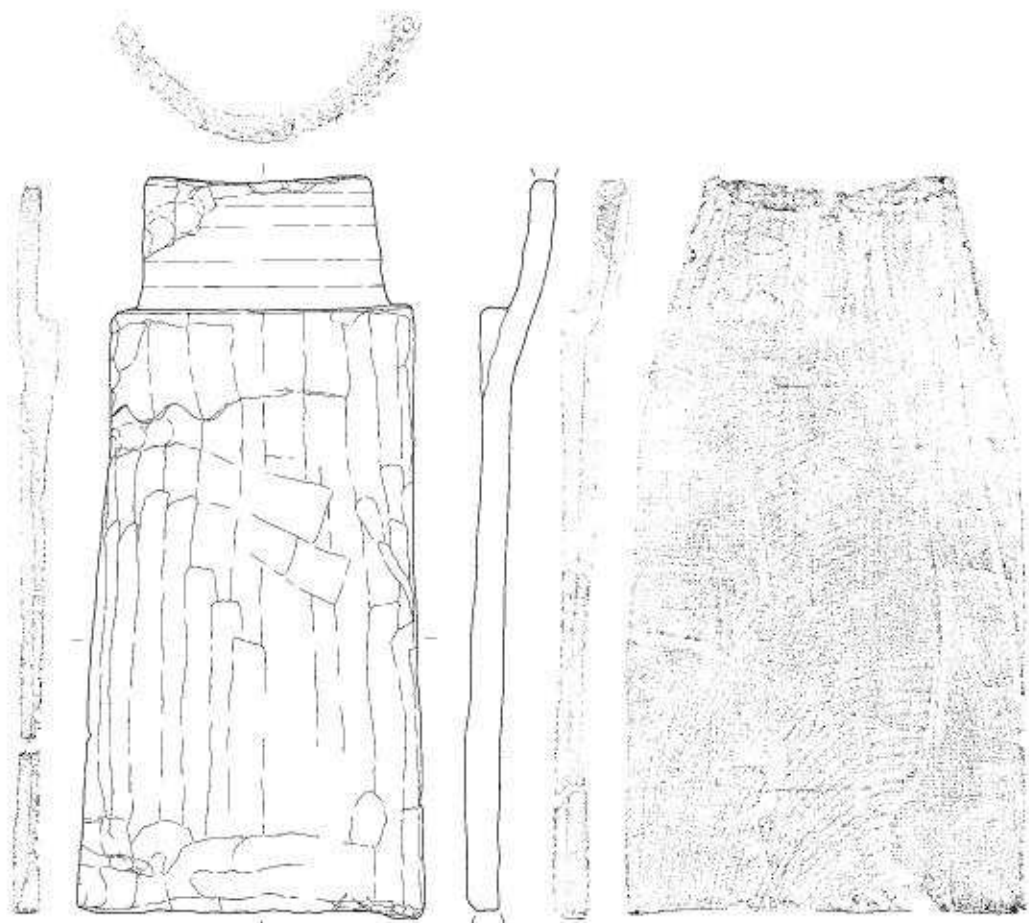
第38図 出土遺物(3)

11号住居

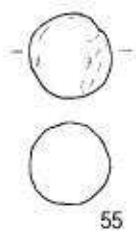
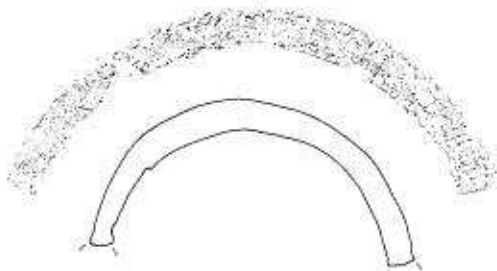


第39图 出土遺物(4)

0 10cm

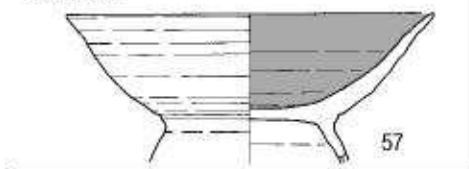


54



55

14号住居

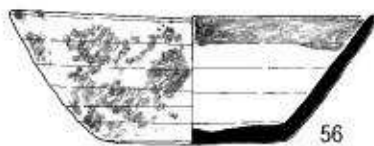


57

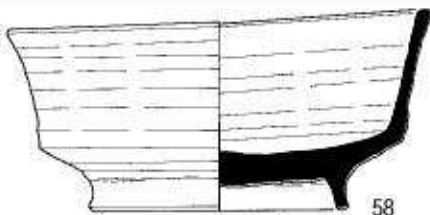


59

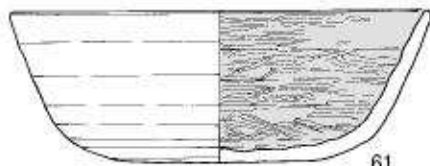
13号住居



56

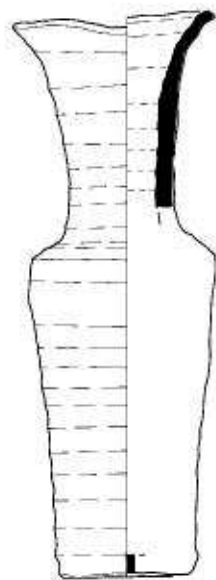


58



61

15号住居



60



(55)

0 10cm

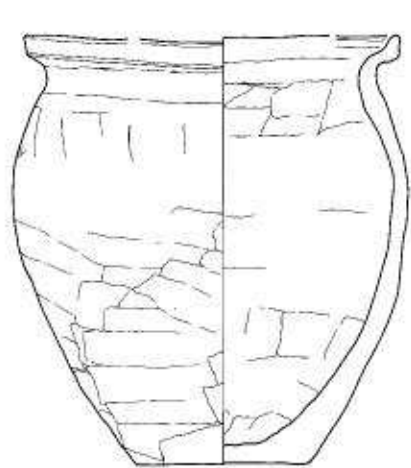
(54)

0 10cm

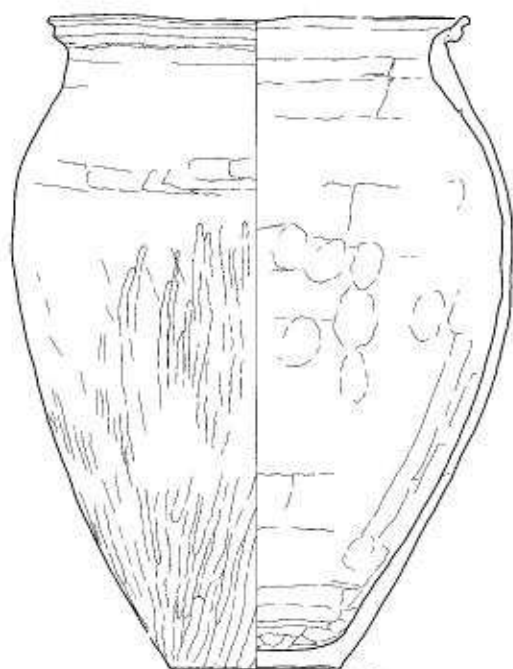
(56~61)

0 5cm

第40图 出土遺物(5)



62



63

16号住居



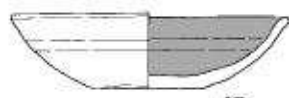
64

17号住居



65

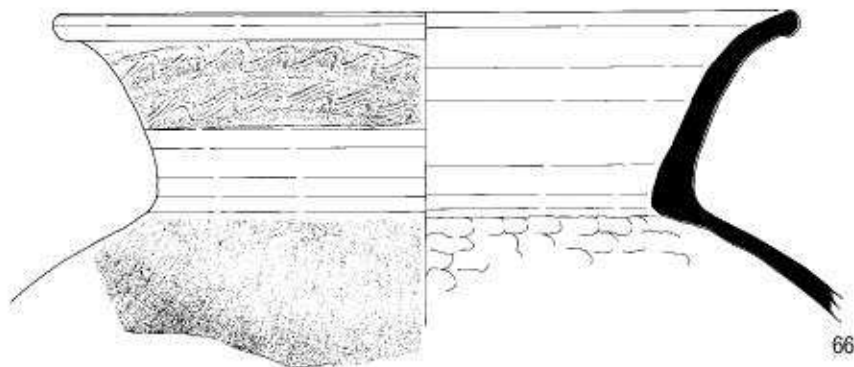
20号土坑



67

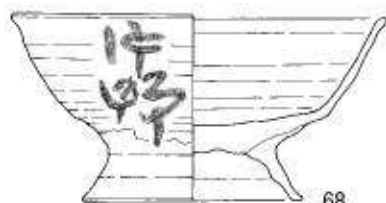


19号土坑



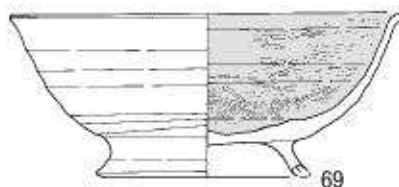
66

21号土坑



68

24号土坑



69



70



0 10cm

(63 - 66)

0 10cm

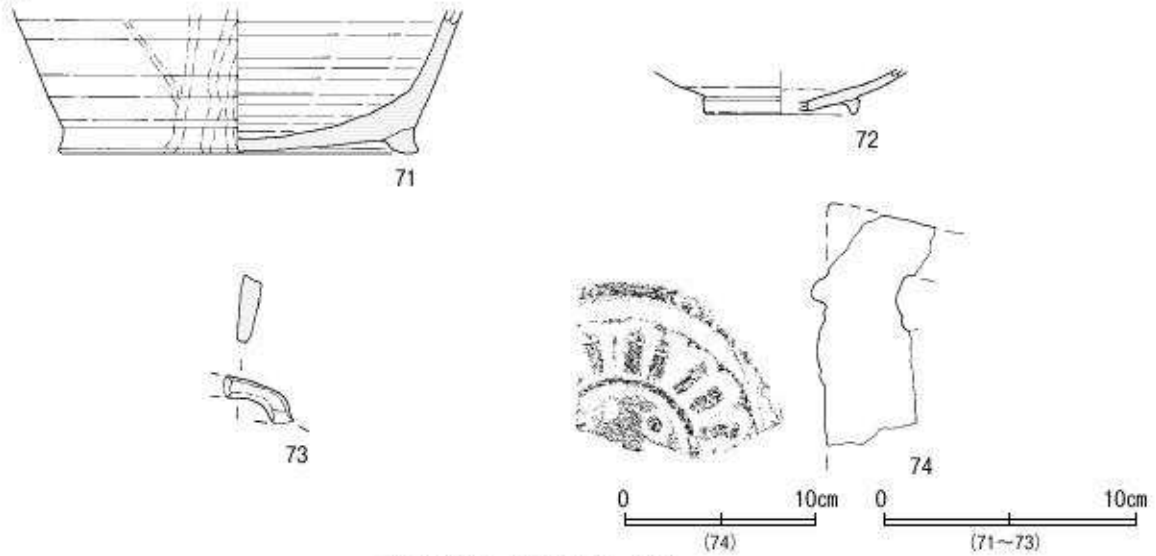
(62 - 64~69)

0 5cm

(70)

第41图 出土遺物(6)

遺構外



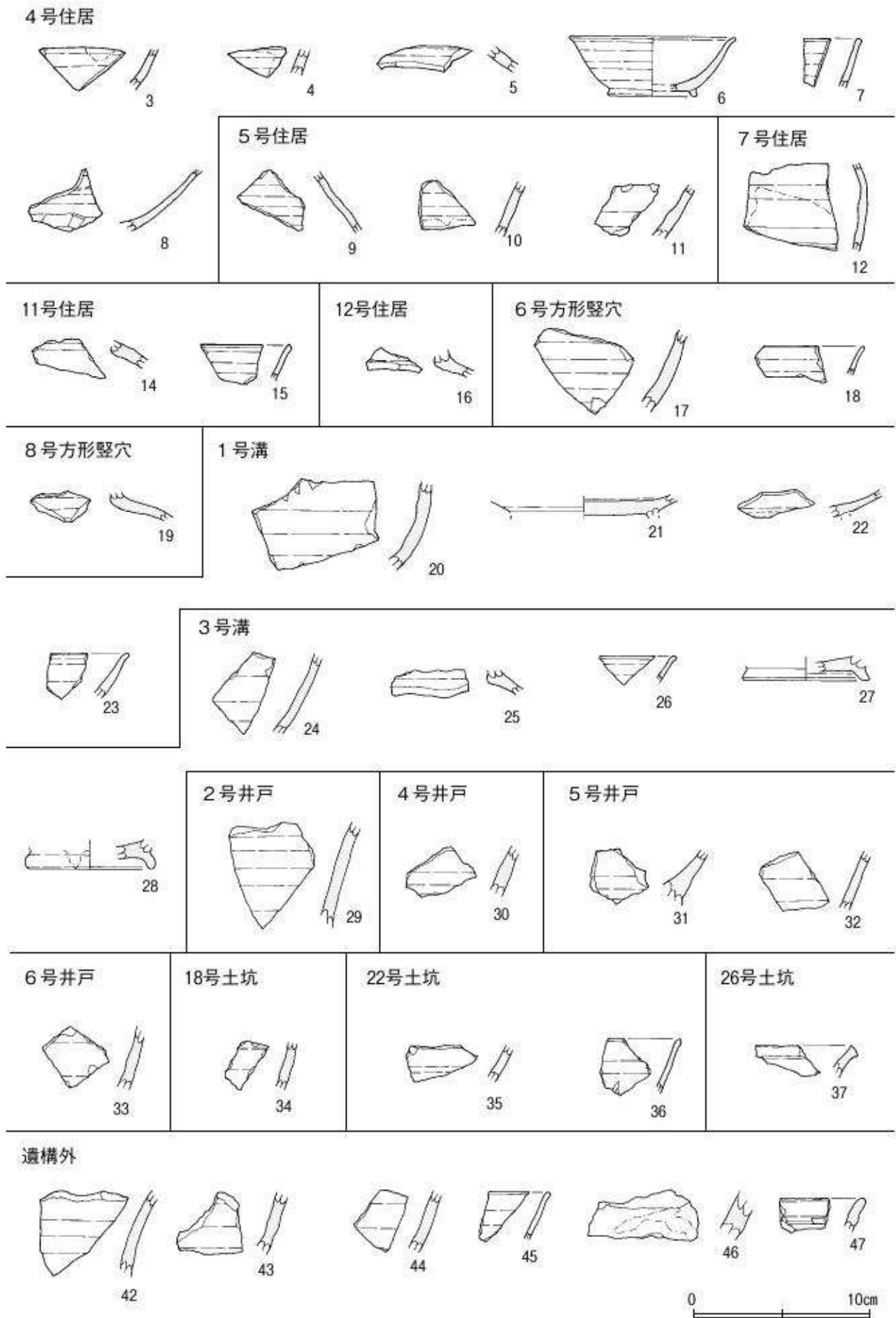
第42図 出土遺物(7)

第3表 出土遺物一覧

番号	出土位置	器種	種別	法量			胎土	色調		焼成	時期	備考
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		外面	内面			
1	1号住居	皿	土師質土器	(8.8)	(5.0)	1.6	雲母・少量の石英	明褐色	明褐色	良好	中世	ロクロ調整、底部：回転糸切り
2	1号住居	不明	銅製品									匙状、焼け歪み有り
3	2号住居	杯	須恵器	13	7.1	5.0	石英・白色粒	明灰青色	明灰青色	良好	9世紀前葉	ロクロ調整、体部下ヘラケズリ、底部：ヘラ切り
4	2号住居	高台付杯	須恵器	11.7	7.6	5.6	石英・白色粒	明灰色	明赤灰色	良好	9世紀前葉	ロクロ調整、底部：ヘラケズリ後高台貼り付け
5	2号住居	浄瓶ないし水瓶	灰釉陶器	—	—	—	少量の白色粒・黒色粒	緑色	灰青色	良好	9世紀前葉	ロクロ調整、外面：自然釉
6	3号住居	平碗	灰釉陶器	—	4.4	—	黒色粒、少量の白色粒	明灰色	明緑色	良好	9世紀後葉	ロクロ調整、内面：自然釉、底部：ケズリだし高台
7	3号住居	杯	土師器	9.8	6.0	2.5	微量の石英	明褐色	明褐色	良好	10世紀中～後葉	ロクロ調整、底部ヘラ切り
8	3号住居	杯	土師器	—	—	<3.0>	石英	灰黒色	黒色	良好	10世紀前葉	内面：黒色処理、ミガキ、外面：ミガキ状の模様を描かれる
9	3号住居	皿	磁器	—	—	<2.1>					近世?	内外面に白磁釉が施される。見込に除刻による文様。文様は不明。
10	4号住居	杯	土師器	12.5	7.3	3.7	赤色粒	明褐色	明褐色	良好	10世紀前葉	ロクロ調整、内面：スス付着、底部：ヘラ切り
11	4号住居	杯	土師器	12.8	8.5	3.4	石英・白色粒	明褐色	明褐色	良好	10世紀前葉	ロクロ調整、内外面：スス付着、底部：ヘラ切り
12	4号住居	杯	土師器	13.9	8.0	4.6	雲母・白色粒	明褐色	明褐色	良好	10世紀前葉	ロクロ調整、底部：ヘラ切り
13	4号住居	杯	土師器	13.0	7.0	3.6	石英・少量の雲母	褐色	黒色	良好	10世紀前葉	ロクロ調整、内面：スス付着、底部：ヘラ切り
14	4号住居	高台付杯	土師器	16.2	8.7	6.7	石英・小礫・白色粒	明褐色	黒色	良好	10世紀前葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、底部：ヘラケズリ後高台貼り付け、貼り付け部はヨコナデ
15	4号住居	高台付杯	土師器	14.4	<6.8>	4.4	石英	明褐色	黒色	良好	10世紀前葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、外面に横書きで「六万口」の墨書。底部：ヘラ切り後高台貼り付け
16	4号住居	甕	土師器	(18.8)	11.0	21.4	雲母・少量の白色粒	暗褐色	暗褐色	良好	9世紀後～10世紀前葉	内面：ヘラナデ、外面：胴部下：ヘラケズリ、底部：ヘラ切り
17	4号住居	瓶	土師器	—	(15.4)	—	雲母・少量の白色粒	暗褐色	暗褐色	良好	9世紀後～10世紀前葉	内面：ヘラナデ、外面：ヘラケズリ

番号	出土位置	器種	種別	法量			胎土	色調		焼成	時期	備考
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		外面	内面			
18	4号住居	甌	土師器	—	—	—	石英・少量の小礫・白色粒	暗褐色	暗褐色	良好	9世紀後～10世紀前葉	内面：ナデ、外面：ヘラケズリ、取っ手貼り付け、3個の穿孔
19	4号住居	甌	土師器	—	(11.6)	—	石英・少量の小礫・白色粒	暗褐色	暗褐色	良好	9世紀後～10世紀前葉	内面：ヘラナデ、外面：ヘラケズリ
20	4号住居	置き甌	土師器	—	—	—	石英・雲母・小礫	暗褐色	暗褐色	良好	9世紀後～10世紀前葉	内外面：ヘラケズリ、羽は貼り付け後ナデ、胴部脇に穿孔
21	4号住居	平瓦	瓦	長さ 30.3	幅 11.3	厚さ 1.9	石英・白色粒	明褐色	灰色	良好		内面：布目、外面：縄目
22	4号住居	不明	瓦	長さ <7.4>	幅 <6.7>	厚さ 6.4	石英・雲母・白色粒・少量の小礫	灰色		良好		裏面側面：ナデ
23	5号住居	坏	土師器	10.4	5.5	2.4	石英	明褐色	明褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、底部：回転糸切り
24	5号住居	坏	土師器	9.3	4.8	2.0	石英・小礫	褐色	褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、底部：回転糸切り
25	5号住居	坏	土師器	9.8	5.4	2.0	石英・小礫・少量の赤色粒	明褐色	明褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、底部：回転糸切り
26	5号住居	坏	土師器	9.7	4.7	1.9	雲母・石英・小礫	明褐色	明褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、底部：回転糸切り
27	5号住居	坏	土師器	(10.0)	5.2	1.6	石英・白色粒	暗褐色	暗褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、底部：回転糸切り
28	5号住居	坏	土師器	13.1	6.0	4.5	少量の白色粒	明灰褐色	黒色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、底部：回転糸切り
29	5号住居	高台付坏	土師器	10.6	4.9	3.4	石英・白色粒	褐色	黒色	良好	10世紀後～11世紀前葉?	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、底部：ヘラケズリ後高台貼り付け、接合部はヨコナデ
30	5号住居	高台付坏	土師器	10.4	5.2	3.2	少量の石英・黒色粒	明褐色	黒色	良好	10世紀中～後葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、底部：高台貼り付け、接合部はヨコナデ
31	5号住居	高台付坏	土師器	14.2	6.8	4.4	石英	明褐色	黒色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、外面：体部下葉はヘラケズリ、底部：ヘラ切り後高台貼り付け
32	5号住居	鎌	鉄製品	長さ 15.8	幅 3.2	厚さ 0.2						右手用
33	7号住居	坏	土師器	12.1	7.0	3.7	石英・雲母・白色粒	明赤褐色	明赤褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、底部：ヘラ切り
34	7号住居	坏	土師器	11.4	7.5	2.8	少量の石英・白色粒	明褐色	明褐色	良好	10世紀後葉	ロクロ調整、内面：見込み部に同心円状のナデ
35	7号住居	坏	土師器	—	—	—	—	明赤褐色	明赤褐色	良好		ロクロ調整、内外面：赤彩、外面：体部下葉：ヘラケズリ、墨書
36	7号住居	坏	土師器	—	—	—	石英・少量の小礫・白色粒	明褐色	黒色	良好		ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ、外面：墨書
37	8号住居	高台付坏	須恵器	10.0	7.7	5.2	石英・少量の小礫	暗灰青色	暗灰青色	良好	9世紀前葉	ロクロ調整、底部：ヘラケズリ後高台貼り付け、高台ヨコナデ、内面ターレット状付着物
38	8号住居	甌	土師器	—	(8.3)	<11.5>	石英	褐色	黒色	良好	9世紀前葉	内面：ヘラナデ、外面：ミガキ、底部：木葉痕
39	8号住居	長頸壺	灰釉陶器	—	(11.5)	—	少量の石英	灰青色	灰青色	良好	9世紀前葉	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け
40	8号住居	軒平瓦	瓦	長さ <13.0>	幅 <14.2>	厚さ 7.5	石英・白色粒	灰青色	灰青色	良好		7260 III型式
41	9号住居	高台付坏	土師器	15.9	8.9	8.0	石英・雲母	明黒褐色	明黒褐色	良好	10世紀中葉	全面ミガキ、高台貼り付け
42	9号住居	高台付坏	土師器	15.6	5.3	<6.4>	雲母	褐色	明黒褐色	良好	10世紀中葉	ロクロ調整、内面：ミガキ、底部：ヘラケズリ、高台貼り付け
43	11号住居	高台付坏	須恵器	(13.4)	8.5	5.3	石英	灰色	灰色	良好	9世紀前葉	ロクロ調整、底部ヘラケズリ後高台貼り付け
44	11号住居	高台付坏	須恵器	13.6	9.0	5.7	石英・少量の小礫	灰色	明灰色	良好	9世紀前葉	ロクロ調整、底部：ヘラケズリ後高台貼り付け、高台ヨコナデ

番号	出土位置	器種	種別	法量			胎土	色調		焼成	時期	備考
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		外面	内面			
45	11号住居	高台付坏	須恵器	13.0	7.6	6.0	石英・白色 粒	暗灰青 色	暗灰青 色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、底部ヘラケズリ 後高台貼り付け、高台ヨコナ デ
46	11号住居	盤	須恵器	17.3	9.7	4.3	石英・小礫	灰青色	灰青色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、底部ヘラケズリ 後高台貼り付け、高台ヨコナ デ、「上家」の墨書
47	11号住居	盤	須恵器	19.8	11.6	4.4	石英・白色 粒	灰青色	灰青色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、底部ヘラケズリ 後高台貼り付け、高台ヨコナ デ、高台内に赤色の付着物、 内面に墨が付着、一部すり跡、 外面に「官」の墨書
48	11号住居	蓋	須恵器	18.3	—	<4.3>	石英・小礫	明灰青 色	明灰青 色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、天井部：ヘラケ ズリ
49	11号住居	高盤	須恵器	—	—	—	石英・白色 粒	灰青色	灰青色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、外面体部下 部：ヘラケズリ、高台内面：ナ デ、見込み部にヘラによる「× 」印
50	11号住居	甕	須恵器	(24.2)	14.7	14.6	石英・白色 粒	褐色	褐色	良好	9世紀前 葉	内面：ナデ、外面：平行タタキ、 胴部下 部ヘラケズリ
51	11号住居	甕	須恵器	(32.8)	—	—	白色粒・少 量の石英	明灰色	明灰色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、外面一部に平行 タタキ目の痕
52	11号住居	蓋	土師器	—	—	—	小礫・白色 粒	褐色	黒色	良好	9世紀前 葉	外面：ヘラケズリ、内面：黒 色処理、ミガキ、つまみ貼り 付け
53	11号住居	蓋	土師器	—	—	—	石英・白色 粒	明赤褐 色	黒色	良好	9世紀前 葉	内面：黒色処理、ミガキ、つ まみ貼り付け
54	11号住居	丸瓦	瓦	長さ39.3	幅18.3	厚さ2.7	石英	灰色	灰色	良好		内面：布目、外面ヘラケズリ
55	11号住居	土玉	土製品	径21	—	—	砂粒	明褐色	—	良好		
56	13号住居	坏	須恵器	14.2	7.3	5.3	石英・小礫・ 白色粒	灰色	明灰色	良好	9世紀中 葉	ロクロ調整、底部：ヘラ切り、 内外面にスス付着
57	14号住居	高台付坏	土師器	(14.3)	—	<5.9>	石英	明赤褐 色	明赤褐 色	良好	10世紀 後葉	ロクロ調整、高台貼り付け、 内面赤彩
58	15号住居	高台付坏	須恵器	16.6	9.9	7.8	石英・白色 粒	明灰青 色	明灰青 色	良好	8世紀後 葉	ロクロ調整、体部下 部：ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ後 高台貼り付け
59	15号住居	蓋	須恵器	15.3	—	3.9	石英・白色 粒	灰青色	灰青色	良好	9世紀前 葉	ロクロ調整、天井部：ヘラケ ズリ、つまみ貼り付け
60	15号住居	長頸壺	須恵器	7.8	4.8	22.3	白色粒・少 量の石英・ 小礫	明灰青 色	明褐色	やや 不良	8世紀後 葉	ロクロ調整、底部：回転糸切り、 東海系
61	15号住居	碗	土師器	16.3	8.4	5.9	少量の石英・ 小礫・白色 粒	明褐色	黒色	良好	8世紀後 葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、 ミガキ、底部：ヘラケズリ
62	15号住居	甕	土師器	14.5	6.6	17	石英・少量 の赤色粒	暗褐色	暗褐色	良好	8世紀後 ～9世紀 前葉	口縁部：ヨコナデ、内面：ヘ ラナデ、外面：ヘラケズリ、 底部：木葉痕、外面にススや コゲが付着
63	15号住居	甕	土師器	21.9	8.3	34.6	雲母・石英	暗褐色	褐色	良好	8世紀後 ～9世紀 前葉	口縁部：ヨコナデ、内面ヘラ ナデ、外面：ヘラケズリ後ミ ガキ
64	16号住居	坏	土師器	11.4	5.4	3.6	少量の石英・ 白色粒	暗褐色	暗褐色	良好	10世紀 後葉	ロクロ調整、外面：体部下 部はヘラケズリ、底部：ヘラ切り、 内面にタール状の付着物
65	17号住居	坏	土師器	11.2	7.4	3.4	石英	明褐色	明褐色	良好	10世紀 中葉	ロクロ調整、底部：ヘラ切り
66	19号土坑	甕	須恵器	(28.0)	—	—	白色粒・少 量の石英	赤褐色	明赤褐 色	良好	9世紀中 から後葉	口縁部：ヨコナデ、外面に波 状文、内面：ナデ、外面：平 行タタキ
67	20号土坑	坏	土師器	10.7	4.4	3	少量の小礫・ 白色粒	褐色	赤褐色	良好	10世紀 後葉	ロクロ調整、内面：赤彩、底部： 回転糸切り
68	21号土坑	高台付坏	土師器	14.5	8.7	7.4	雲母・少量 の石英	明褐色	明褐色	良好	10世紀 後葉	ロクロ調整、高台貼り付け、 外面に「中野」の墨書
69	24号土坑	高台付坏	土師器	15.1	7.5	6.4	少量の石英	明褐色	黒色	良好	10世紀 後葉?	ロクロ調整、内面：黒色処理、 ミガキ、底部：ヘラケズリ後 高台貼り付け
70	24号土坑	転用砥石	瓦	長さ3	幅26	厚さ24	少量の石英	明灰白 色	—	良好		外面：純目
71	遺構外	長頸瓶	灰釉陶器	—	(13.7)	—	少量の黒色 粒	灰白色	明オ リーブ 色	良好	黒笹90 号窯式期	内外面に灰釉が掛かる
72	遺構外	皿または 碗	灰釉陶器	—	(5.8)	—	少量の黒色 粒	灰白色	オリ ーブ色	良好	黒笹90 号窯式期	内面に灰釉が掛かる。底部高 台貼り付け
73	遺構外	平瓶	灰釉陶器	—	—	—	少量の石英	オリ ーブ灰 色	—	良好	折戸10 号窯式期	灰釉が掛かる



第43図 施釉陶器 (Noは第4表にもとづく)

第4表 出土施釉陶器一覧

	番号	出土遺構	器種	種別	部位	窯式など
1	第36図5	2号住居	浄瓶ないし水瓶	灰釉	胴部	O-10 丁寧な調整の優品
2	第36図6	3号住居	平鉢	灰釉	底部	K-14
3		4号住居	瓶	灰釉	胴部	IG-78 9C初頭
4		4号住居	瓶	灰釉	胴部	H-72
5		4号住居	広口平鉢	灰釉	胴部	K-90
6		4号住居	皿	灰釉	口縁部	K-14
7		4号住居	碗	灰釉	口縁部	H-72
8		4号住居	皿ないしは碗	灰釉	胴部	東濃系 大原2~虎御山1
9		5号住居	瓶	灰釉	胴部	O-53
10		5号住居	瓶	灰釉	胴部	O-53
11		5号住居	瓶	灰釉	胴部	産地不明
12		7号住居	瓶	灰釉	胴部	H-72
13	第38図39	8号住居	長頸瓶	灰釉	底部	IG-78 9C初頭
14		11号住居	瓶	灰釉	胴部	O-10 8C
15		11号住居	碗	灰釉	口縁部	H-72 28と同一個体か
16		12号住居	瓶	灰釉	胴部	東濃系
17		6号方形堅穴	瓶	灰釉	胴部	産地不明
18		6号方形堅穴	碗	灰釉	口縁部	K-90
19		8号方形堅穴	瓶	灰釉	胴部	H-72
20		1号溝	瓶	灰釉	胴部	O-53
21		1号溝	皿ないしは碗	灰釉	底部	K-14~K-90の諸技法
22		1号溝	皿	緑釉	胴部	K-14以降 質悪い
23		1号溝	碗	緑釉	口縁部	産地不明
24		3号溝	瓶	灰釉	胴部	K-14
25		3号溝	瓶	灰釉	胴部	H-72
26		3号溝	碗	灰釉	口縁部	K-90 9C中~後葉
27		3号溝	皿ないしは碗	灰釉	底部	O-53
28		3号溝	皿ないしは碗	灰釉	底部	O-53
29		2号井戸	長頸瓶	灰釉	頸部	H-72
30		4号井戸	瓶	灰釉	胴部	O-53
31		5号井戸	瓶	灰釉	胴部	O-53
32		5号井戸	瓶	灰釉	胴部	O-53
33		6号井戸	瓶	灰釉	胴部	H-72
34		18号土坑	瓶	灰釉	胴部	H-72
35		22号土坑	瓶	灰釉	胴部	東濃系
36		22号土坑	碗	灰釉	口縁部	H-72 29と同一個体か
37		28号土坑	長頸瓶	灰釉	口縁部	O-10以前
38	第98図18	48号土坑	皿	緑釉	底部	産地不明
39	第42図71	遺構外	長頸瓶	灰釉	底部	K-90
40	第42図72	遺構外	皿ないしは碗	灰釉	底部	K-90
41	第42図73	遺構外	平瓶	灰釉	把手	K-14
42		遺構外	広口平鉢	灰釉	頸部	K-90~O-53
43		遺構外	瓶	灰釉	胴部	H-72
44		遺構外	瓶	灰釉	胴部	H-72
45		遺構外	碗	灰釉	口縁部	H-72
46		遺構外	大形製品	緑釉	胴部	猿投より西の製品か
47		遺構外	不明	灰釉	口縁部	東濃系

第5表 出土軒丸瓦一覧

番号	遺構名	瓦当直径	瓦当厚	全長	内区						外区						焼成	胎土	色調	備考
					中房径	蓮子数	蓮子間距離A	蓮子間距離B	内区径	子葉長	子葉幅	外区幅	外区外縁幅	外区外縁高	珠文間距離	珠文数				
第42図74	遺構外	<96>	5.1	<69>	<40>	<30>	-	23	<8.3>	26	10	-	-	11	-	-	良好	石英・白色粒・少量の小礫	明黄褐色	7108B 型式
第98図14	25号土坑	<141>	5.0	<69>	4.5	7.0 +	1.2	1.2	<9.4>	18	10	4.2	2.4	0.9	1.6	<9.0>	良好	石英・白色粒	明褐色	7104d 型式

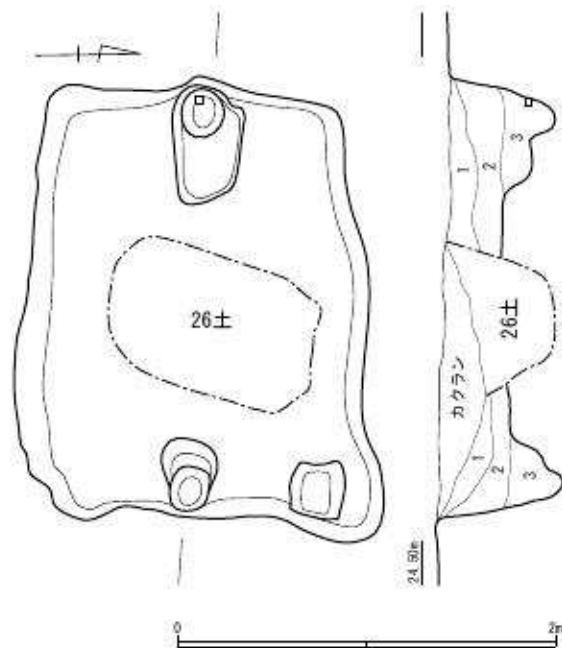
第4章 中世

方形竪穴8軒、溝3条、井戸6基、土坑42基が検出されている。このうち、方形竪穴、溝、井戸はいずれも中世の所産であった可能性が強いのに対し、土坑には中世の所産と考えられるものと近世の所産と考えられるものが含まれる。方形竪穴は調査区北半部に遍在しており、特に中央部に近いF・G-2・3区には7軒が集中する。3条の溝は調査区を東西に横断するように南北に並走する。6基の井戸は方形竪穴とは対照的に調査区南半部に遍在しており、特に中央部南東側のF・G-4・5区には大型の2号を含めて4基の井戸が集中分布する。42基と多数の土坑は調査区の広い範囲にわたって散在するが、中世の墓壇と考えられる例は調査区の北西側から西側に集中分布する傾向をみせている。また、調査区の東側には隅丸長方形プランを主体とする土坑が重複あるいは近接しながら集中分布していることが注意される。

4-1 方形竪穴遺構

1号方形竪穴

調査区の北西部、C・D-1・2区に位置する。6・10号住居跡、24号土坑を切り、中央を26号土坑に切られる。平面形は東西方向230cm、南北方向170cmの長方形を呈する。主軸方向はN-76°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は24cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、明確な硬化面は認められない。ピットは長軸上の東西両端と北東隅より1個ずつ確認された。平面形は方形ないし不整楕円形を呈し、口径30~37cm、深さ21~46cmを測る。東側のピットには建替えの痕跡がみられる。遺物としては11世紀後半から13世紀初頭の土師質小皿が出土した。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世初頭の所産であった可能性が高い。



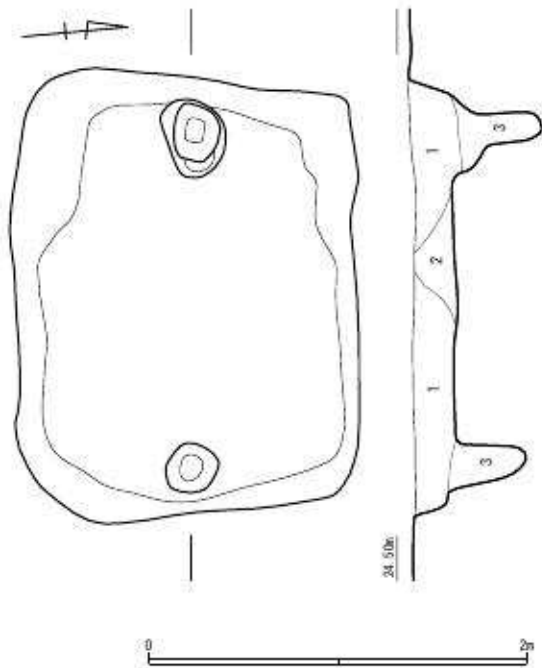
1号方形竪穴土層

- | | | |
|---|--------------|----------------------------|
| 1 | 7.5VK5/8明褐色土 | ロームブロック主体、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5VK3/2黒褐色土 | ローム粒多量、赤色粒微量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 3 | 7.5VR4/6褐色土 | ローム粒多量、炭化物粒微量混入、粘性・しまり欠く。 |

第44図 1号方形竪穴 (1:40)

2号方形竪穴

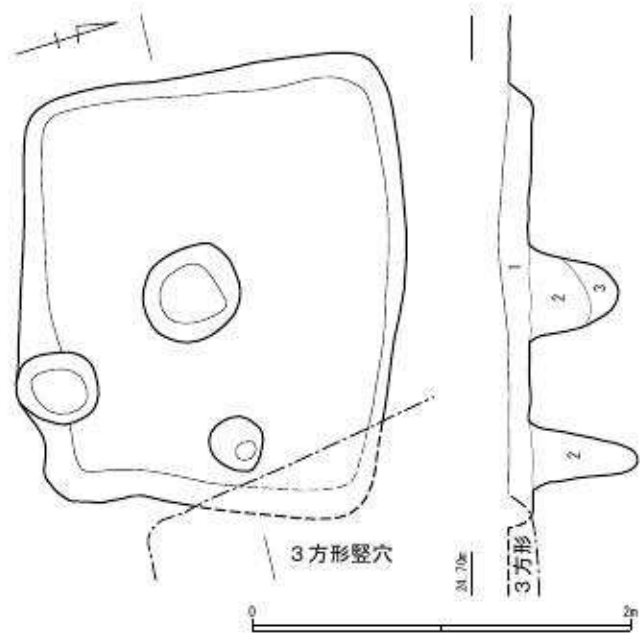
調査区の中央部北側、E・F-2区に位置する。平面形は東西方向240cm、南北方向180cmの近い長方形を呈する。主軸方向はN-82°-Wである。壁はやや傾斜して掘り込まれており、最大壁高は39cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、明確な硬化面は認められない。ピットは長軸上の東西両端より1個ずつ確認された。平面形は不整楕円形を呈し、口径27~29cm、深さ43~46cmを測る。遺物としては流れ込みと思われる古代瓦が出土した。形状や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。



2号方形堅穴土層

- | | | |
|---|--------------|-------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色土 | ローム粒多量、黒褐色土・炭化物微量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性もち、しまる。 |
| 3 | 7.5YR5/8明褐色土 | ローム主体、やや粘性もち、ややしまり欠く。 |

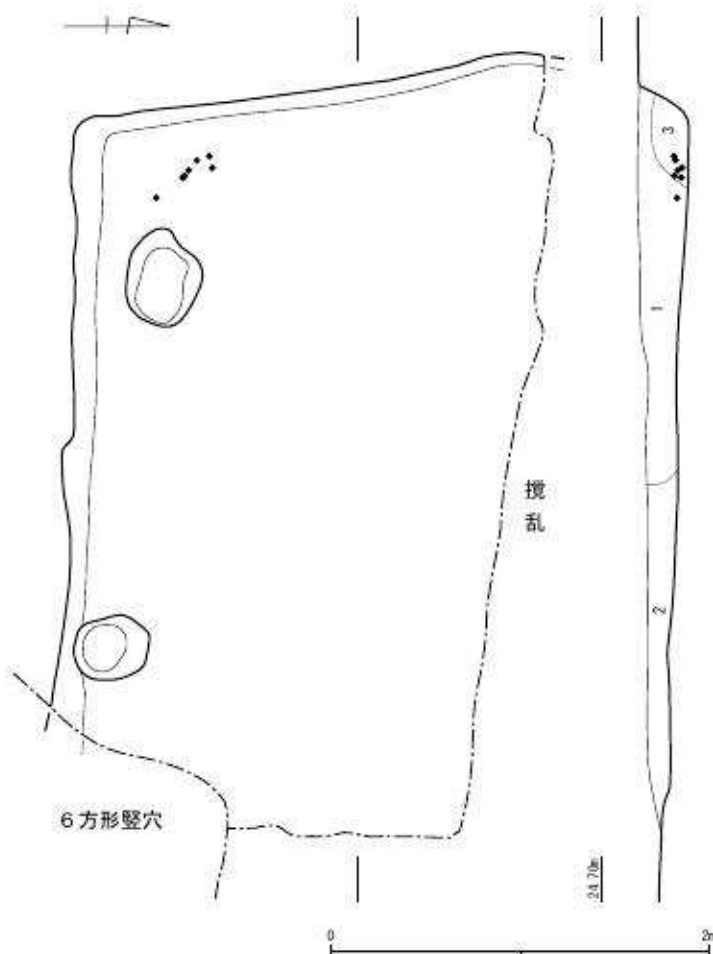
第45図 2号方形堅穴 (1:40)



4号方形堅穴土層

- | | | |
|---|-------------|------------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色土 | ローム粒少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 10YR3/4暗褐色土 | ローム粒・黒褐色土少量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 3 | 10YR3/4暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック混入、やや粘性もち、しまり欠く。 |

第47図 4号方形堅穴 (1:40)



3号方形堅穴土層

- | | | |
|---|--------------|--------------------------|
| 1 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒、赤色粒少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR3/2黒褐色土 | ローム粒少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 3 | 7.5YR4/6褐色土 | ローム粒・ロームブロック混入、粘性もち、しまる。 |

第46図 3号方形堅穴 (1:40)

3号方形堅穴

調査区の中央部北側、F・G-2区に位置する。8号住居、4号方形堅穴を切る。東壁を6号方形堅穴、北壁を近代の基礎に切られるため、全容は不明であるが、平面形は東西410cm以上、南北245cm以上の長方形を呈するものと推定される。主軸方向は、N-83°-Wである。壁は急傾斜でに掘り込まれており、最大壁高は18cmを測る。床面はおおむね平坦であるが、明確な硬化面は認められなかった。ピットは南壁際と南西隅近くより1個ずつ確認された。平面形は不整形円形を呈し、口径38~50cm、深さ15cmを測る。遺物としては流れ込みと思われる9世紀の須恵器甕底部や土師器坏、古代瓦などが出土した。形状や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

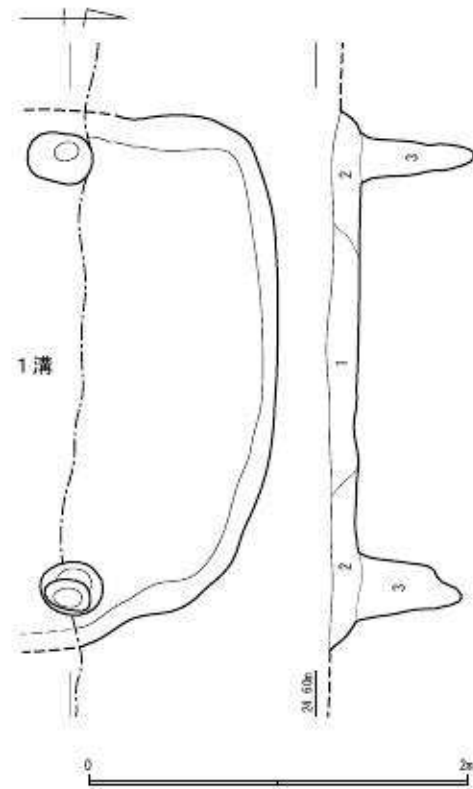
4号方形堅穴

調査区の中央部北側、F-2区に位置する。東壁を3号方形堅穴に切られる。平面形は東西方向238cm、南北方向210cmの長方形を呈する。主軸方向は、N-82°-Wである。壁はやや傾斜して掘り込まれており、最大壁高は11cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、明確な硬化面は認められなかった。覆土はほとんど削

平されていた。ピットは東壁と南壁際、中央部より1個ずつ確認された。南側のピットは南壁を半円形に掘り込んで構築されている。平面形はいずれも不整楕円形を呈し、口径30～51cm、深さ16～42cmを測る。遺物としては流れ込みと思われる土師器坏が出土した。形状や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

5号方形堅穴

調査区の中央部東側、F・G - 3区に位置する。南半分を1号溝に切られる。平面形は東西方向280cm、残存部の南北方向102cmを測る隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方向は、N - 89° - Wである。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は27cmを測る。床面はほぼ平坦であり、全面が硬化していた。ピットは長軸上の東西両端より1個ずつ確認された。平面形は楕円形を呈し、口径35cm、深さ32～41cmを測る。遺物としては流れ込みと思われる土師器坏や甕が出土した。形状や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。



5号方形堅穴土層
 1. 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・炭化物微量混入、粘性欠き、しまる。
 2. 7.5YR3/3暗褐色土 ローム粒混入、粘性欠き、しまる。
 3. 7.5YR3/3暗褐色土 ローム粒・炭化物少量混入、粘性欠き、しまる。

第48図 5号方形堅穴 (1:40)

6号方形堅穴

調査区の中央部東側、G・H - 2・3区に位置する。8・15号住居、3号方形堅穴を切り、北東コーナー部を45号土坑に切られる。平面形は東西方向312cm、南北方向243cmの不整長方形を呈する。主軸方向は、N - 70° - Wである。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は32cmを測る。床面はほぼ平坦である。明確な硬化面は検出されていないが、中央付近から南西コーナー部にかけて灰が薄く散布して

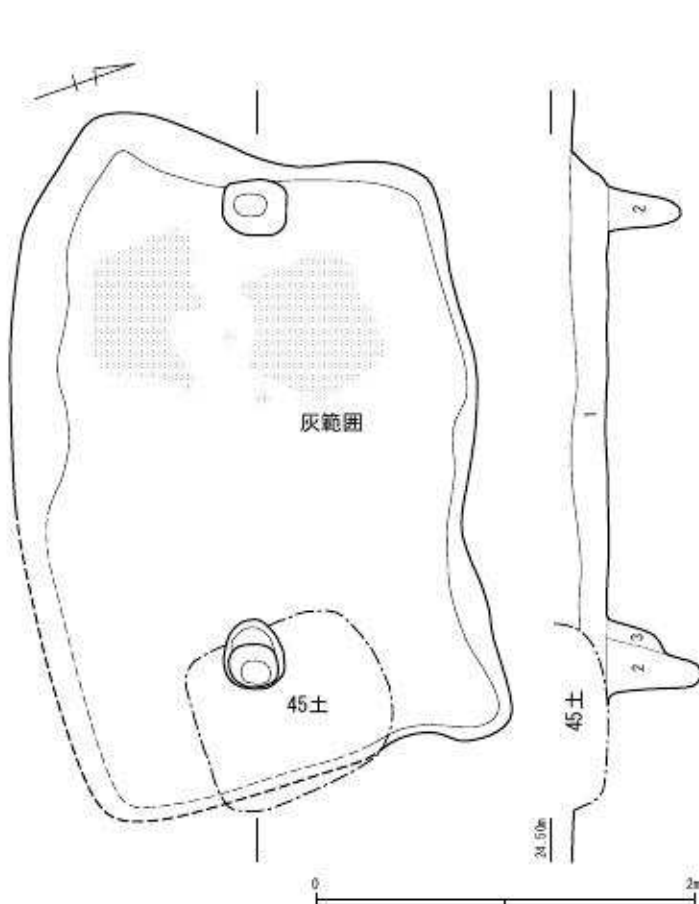
いた。ピットは長軸上の東西両端より1個ずつ確認された。平面形は楕円形ないし不整楕円形を呈し、口径33～37cm、深さ32～42cmを測る。遺物としては流れ込みと思われる土師器坏・甕、灰釉陶器、古代瓦などが出土した。形状や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

7号方形堅穴

調査区の中央部北側、F - 2区に位置する。19号土坑を切る。平面形は南北方向195cm、東西方向160cmの隅丸長方形を呈する。主軸方向はN - 17° - Eである。壁はやや傾斜して掘り込まれており、最大壁高は25cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、明確な硬化面は認められなかった。ピットは長軸上の南北両端より1個ずつ確認された。平面形は楕円ないし不整楕円形を呈し、口径34～38cm、深さ25～33cmを測る。遺物の出土は認められなかった。形状や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

8号方形堅穴

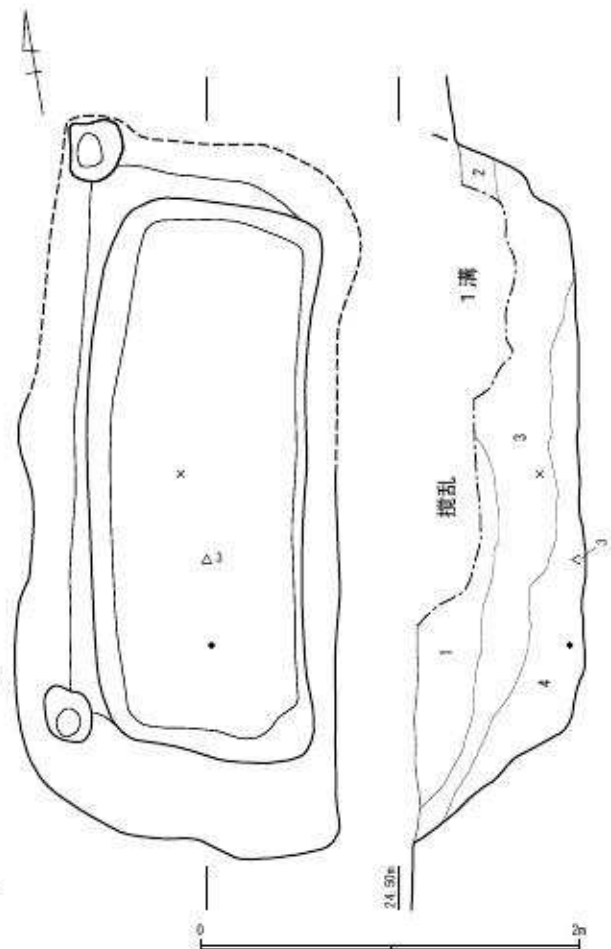
調査区の中央部、F - 3区に位置する。上部を1号溝に切られる。平面形は、上面が南北方向367cm、東



6号方形竪穴土層

- 1 10YR4/4褐色土 ローム粒微量混入、粘性もち、ややしめる。
- 2 10YR3/2黒褐色土 ローム粒微量混入、やや粘性・しまり欠く。
- 3 10YR4/6褐色土 ローム粒微量混入、粘性もち、しまり欠く。

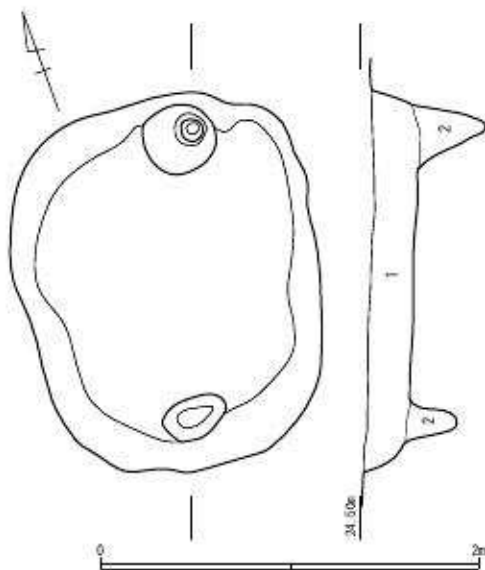
第49図 6号方形竪穴 (1:40)



8号方形竪穴土層

- 1 10YR3/2黒褐色土 ローム粒微量混入、やや粘性・しまり欠く。
- 2 10YR4/6褐色土 ローム粒微量混入、粘性もち、しまり欠く。
- 3 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・炭化物微量混入、粘性欠き、しめる。
- 4 7.5YR3/3暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量混入、粘性欠き、しめる。

第51図 8号方形竪穴 (1:40)



7号方形竪穴土層

- 1 10YR3/3暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒褐色土少量混入、粘性もち、しめる。
- 2 10YR6/6明黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体、やや粘性・しまり欠く。

第50図 7号方形竪穴 (1:40)

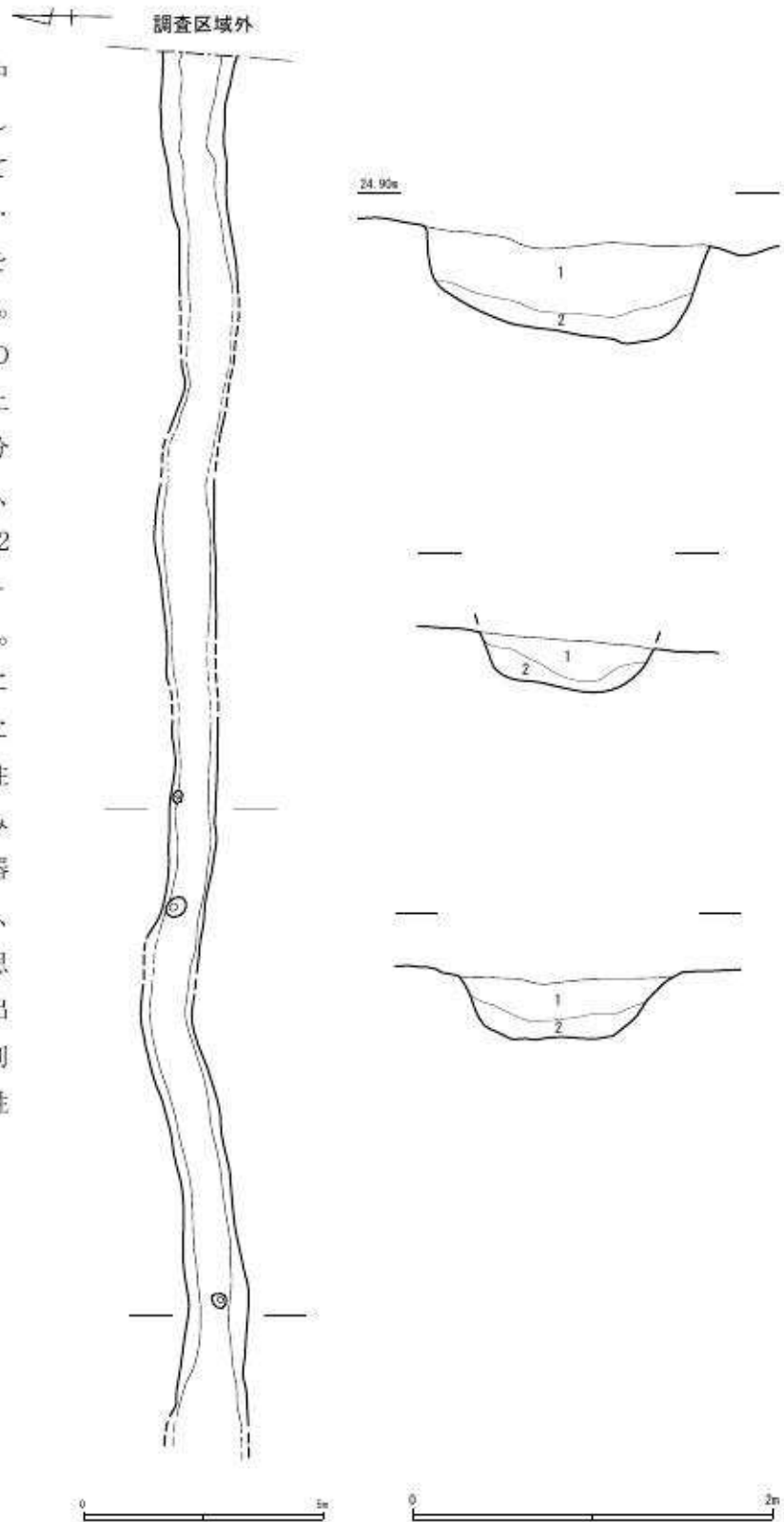
西方向175cm、床面が南北方向295cm、東西方向116cmを測る長方形を呈する。主軸方向はN-9°-Eである。壁はやや傾斜して掘り込まれており、西と北の壁面中位にはテラス状の平坦面を伴う。最大壁高は99cm、床面よりテラスまでの高さは29~31cm、テラス上面から確認面までの高さは68~70cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、明確な硬化面は認められなかった。ピットは西壁テラスの南北両端より1個ずつ確認された。平面形は不整形ないし楕円形を呈し、口径27~30cm、確認面からの深さ89~91cm、テラス上面からの深さ21~22cmを測る。遺物としては凝灰岩製の仕上げ砥石などが出土した。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

(小野)

4-2 溝

1号溝

調査区の北東部、J-3区から中央部北側、D-3区まではほぼ直進しているが、西側は大きく攪乱されており、全容は不明である。途中で2・15・11号住居、5・8号方形堅穴を切り、1・15・46号土坑に切られる。東端は調査区外に延び、西端はD-3区付近で終わっている。II層上面より掘り込まれている。確認部分の全長は30.3m、上幅約0.9~1.6m、底幅約0.6~1.4m、深さ約31~52cmを測る。主軸方向はN-87°-Eである。断面はU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、西から東に向けてゆるやかに傾斜する。東端に近い2号住居や西端に近い11号住居との重複部分を中心に、流れ込みと思われる多量の古代瓦や須恵器甕・長頸壺、土師器坏・甕、円面硯、緑釉陶器、灰釉陶器、龍泉窯系と思われる青磁などが出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

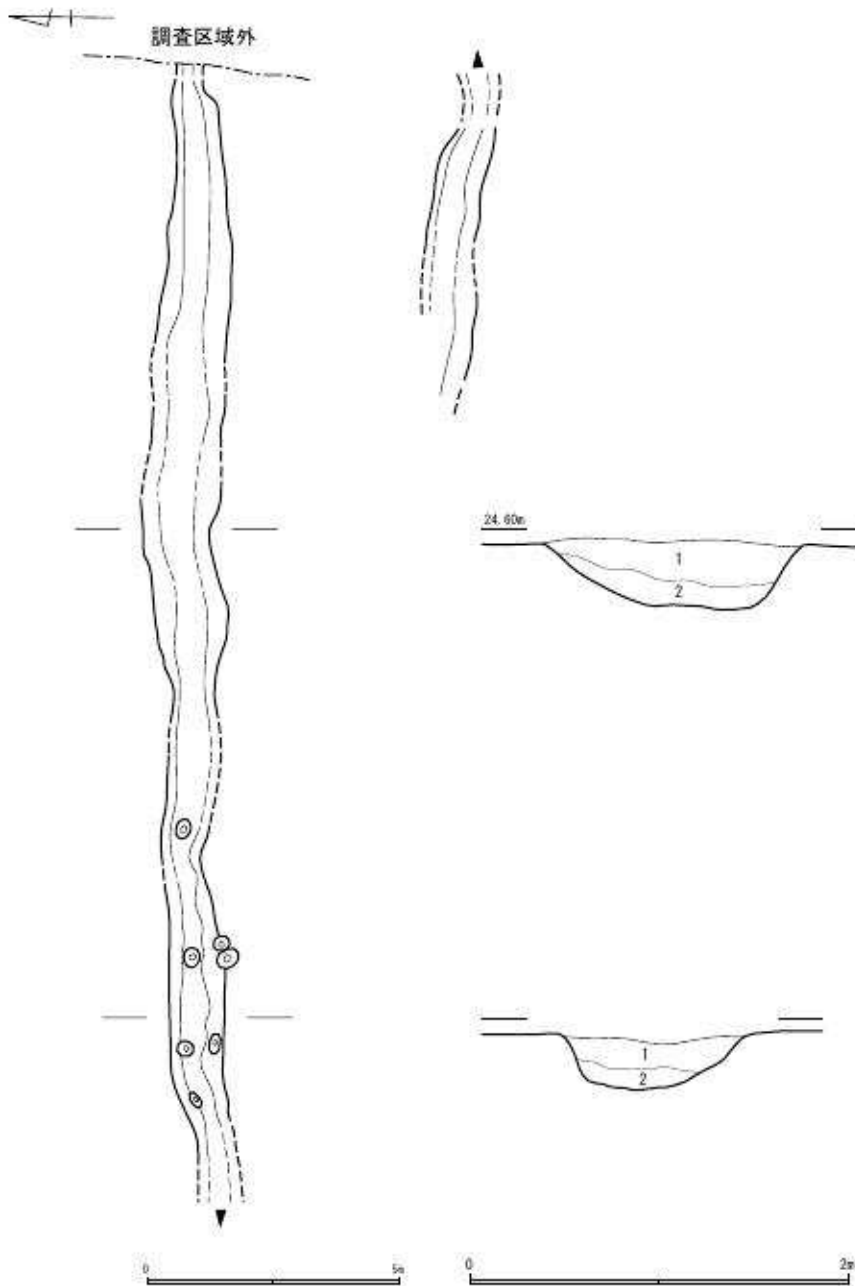


1号溝土層

1 7.5YR2/3暗褐色土 ローム粒・赤色微量混入、やや粘性もち、しる。

2 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性欠き、しる。

第52図 1号溝 (平面図=1:150 断面図=1:40)



2号溝土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・白色粘土粒・黒褐色土少量混入。粘性もち、しまる。
- 2 7.5YR4/6褐色土 ローム粒、白色粘土粒微量混入。粘性もち、しまる。

第53図 2号溝 (平面図=1:150 断面図=1:40)

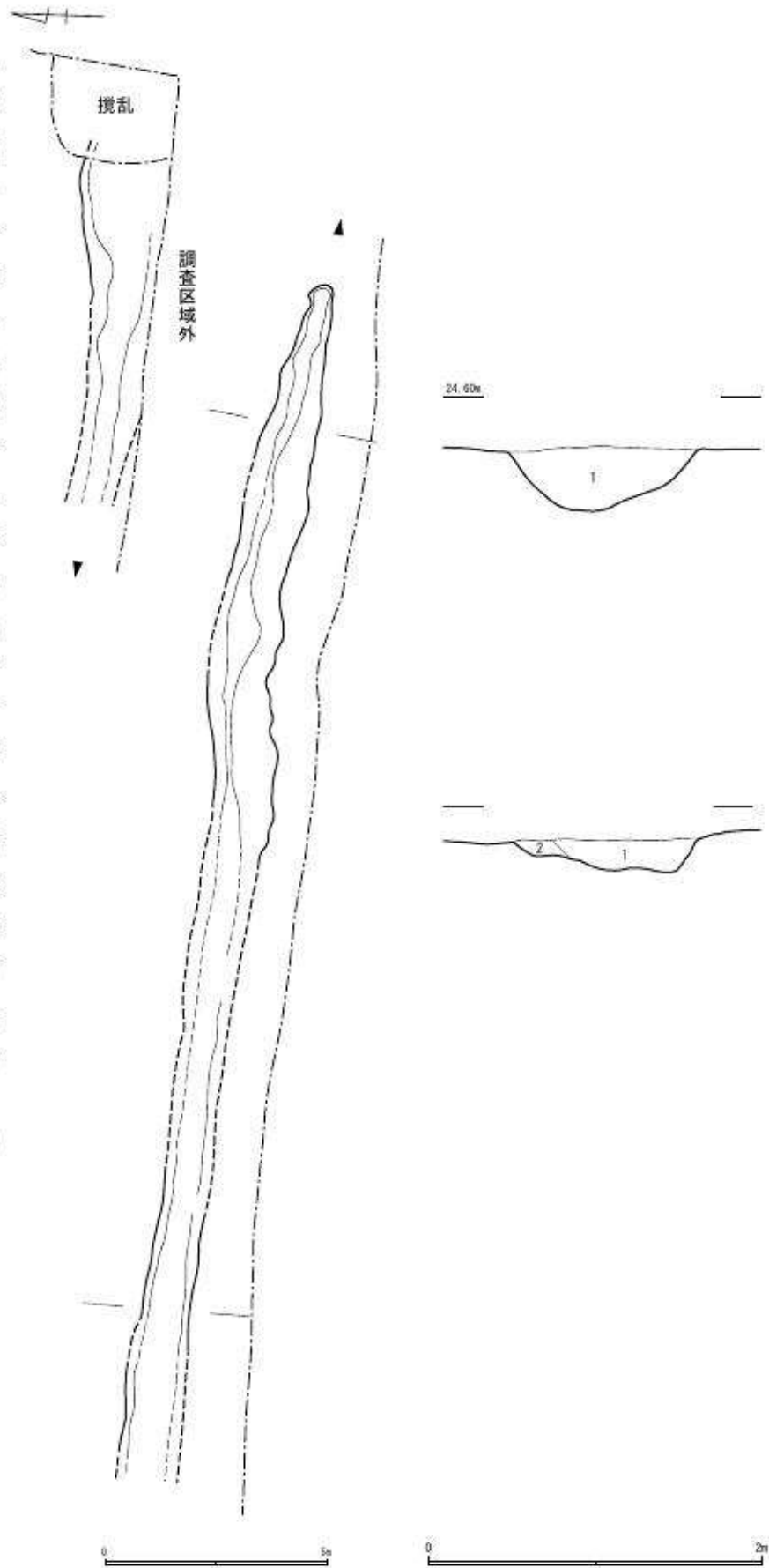
2号溝

調査区の東部、J-4区から南西部、B-4区までゆるやかに蛇行しながら走る。各所に攪乱を受けている。特に西側は大きく攪乱されており、全容は不明である。途中で7・19・3・18号住居、39号土坑を切り、10・5・47・49・6号土坑に切られる。1号溝同様、II層上面より掘り込まれていた可能性が高い。確認部分の全長は45.2m、上幅約0.9～1.6m、底幅約0.4～0.7m、深さ約10～35cmを測る。主軸方向はN-86°-Eである。断面はU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、西から東に向けてゆるやかに傾斜する。流れ込みと思われる多量の古代瓦や須恵器坏・甕、土師器坏・甕、常滑系陶器甕などが出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

3号溝

調査区の南東端、I-5区から南西部、B-4・5区までゆるやかに蛇行しながら走る。各所に攪乱を受けている。特に西側は大きく攪乱されており、全容は不明である。また、溝の南側は調査区外にかかる。途中で5・13・16・19・3号住居を切り、4号井戸に切られる。1号溝同様、II層上面から掘り込まれていた可能性が高い。確認部分の全長は39.3m、上幅約1.1~2.4m、底幅約0.5~2.3m、深さ約17~37cmを測る。主軸方向はN-86°-Wである。断面はU字状を呈する。底面はやや起伏をもち、西から東に向けてゆるやかに傾斜する。16号住居との重複部分を中心に、流れ込みと思われる多量の古代瓦や須恵器甕、土師器杯・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、常滑系陶器甕、12~13世紀前半の渥美系陶器壺・甕などが出土している。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

(小野)

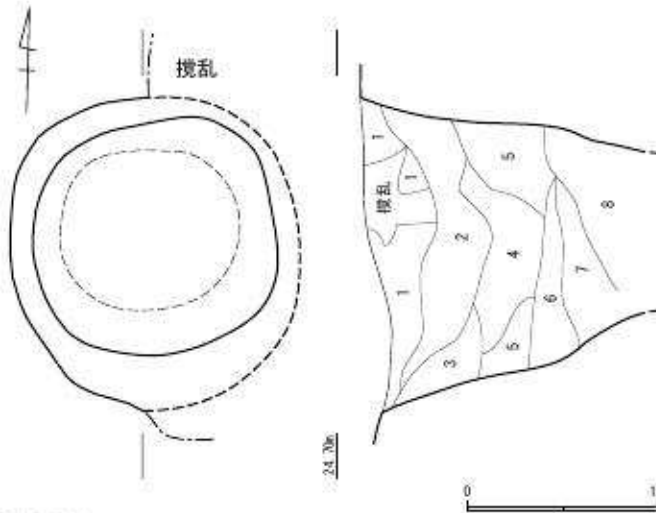


3号溝土層

- 1 10YR4/4褐色土 粘土粒・黒褐色土少量混入、粘性もち、しまる。
 2 10YR6/8明黄褐色土 ローム粒多量混入、粘性もち、ややしまる。

第54図 3号溝 (平面図=1:150 断面図=1:40)

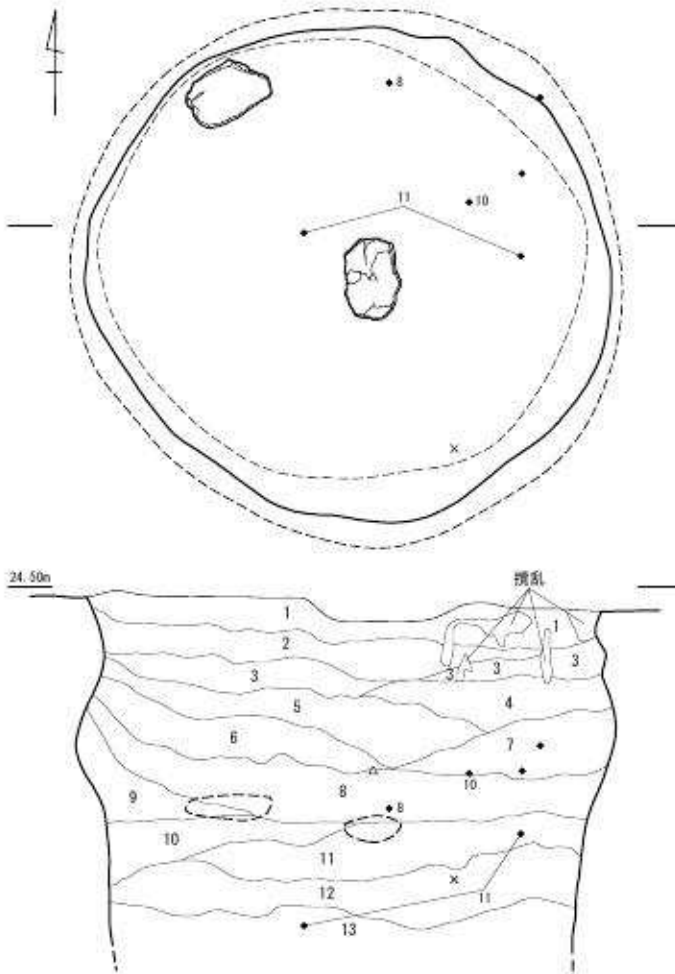
4-3 井戸



1号井戸土層

- 1 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・赤色粒・白色粒微量混入、やや粘性もち、しまる。
- 2 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、やや粘性もち、しまる。
- 3 10YR4/6褐色土 白色砂ブロック多量、炭化物粒少量混入、粘性・しまり欠く。
- 4 10YR4/6褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、粘性もち、しまる。
- 5 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、しまる。
- 6 10YR3/3暗褐色土 白色砂粒多量混入、粘性もち、しまる。
- 7 10YR4/6褐色土 ローム粒・白色粘土粒多量混入、粘性もち、ややしまる。
- 8 10YR2/3黒褐色土 赤色粒・白色粒混入、粘性もち、ややしまり欠く。

第55図 1号井戸 (1:40)



1号井戸

調査区の中央部南西側、D-4区に位置する。18号住居跡を切る。平面形は略円形を呈し、長径1.7m、短径1.4m、深さ15m以上を測る。断面は漏斗状に近く、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。安全上の理由から完掘するまでには至らなかった。覆土中より須恵器甕、土師器坏・甕、古代瓦、埴、常滑系陶器甕などが出土した。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

2号井戸

調査区の中央部南東側、D・H-4・5区に位置する。5号住居跡と7号住居跡を切る。西側に近接して3・4・5号井戸が分布する。平面形は略円形を呈し、長径4.2m、短径3.8m、深さ2.2m以上を測る。攪乱が激しいことから、完掘するまでには至らなかった。断面はフラスコ状を呈し、確認面より深さ0.5m付近から壁面がオーバーハングし、最大21cmほど外側に膨らむ。深さ1.7m付近で再び垂直に近くなり、最深部で長径3.9mほどになる。覆土中より10世紀中葉～後半の土師器小皿、11世紀前半の穿孔された土師器小皿、猿投の長頸壺の模倣と思われる小壺、15世紀前半の瀬戸・美濃系陶器の折縁深皿などの他、長径64～68cm、厚さ20cmほどの大形の平石2個が出土した。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

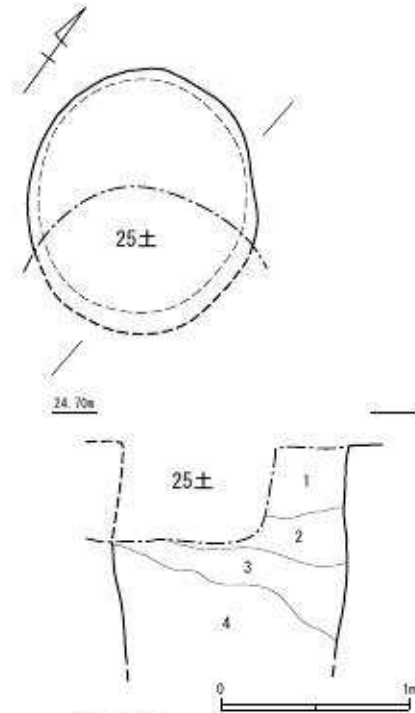
2号井戸土層

- 1 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量混入、やや粘性もち、しまる。
- 2 10YR3/3暗褐色土 白色砂粒少量混入、粘性もち、しまる。
- 3 10YR2/3黒褐色土 白色粒混入、粘性もち、ややしまり欠く。
- 4 10YR2/3黒褐色土 赤色粒・白色粒混入、やや粘性もち、ややしまり欠く。
- 5 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、しまる。
- 6 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量混入、やや粘性もち、ややしまる。
- 7 10YR4/0褐色土 炭化物粒少量混入、粘性・しまり欠く。
- 8 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。
- 9 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、やや粘性もち、しまる。
- 10 10YR4/6褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、粘性もち、しまる。
- 11 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量混入、やや粘性もち、ややしまる。
- 12 10YR4/6褐色土 ローム粒・白色粘土粒多量混入、粘性もち、しまる。
- 13 10YR4/6褐色土 ローム粒・白色粘土粒多量混入、やや粘性もち、ややしまる。

第56図 2号井戸 (1:60)

3号井戸

調査区の中央部南側、F-4区に位置する。44号土坑を切り、25号土坑に切られる。東側に5号井戸、南東側に4・2号井戸が近接して分布する。平面形は略円形を呈し、長径1.2m、短径1.1m、深さ1.1m以上を測る。攪乱が激しいことから、完掘するまでには至らなかった。断面は筒状に近く、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土中より須恵器坏蓋・甕、土師器坏・甕の他、中世の内耳鍋底部、15～16世紀の在地の鉢類などが出土した。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。



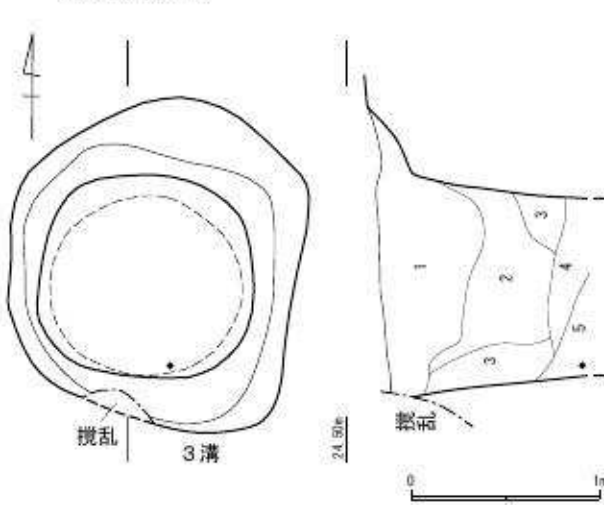
3号井戸土層

- | | | |
|---|---------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/3黒褐色土 | 褐色土ブロック・白色砂ブロック混入、粘性欠き、しまる。 |
| 2 | 2.5YR7/6明黄褐色土 | 白色砂主体、粘性欠き、しまる。 |
| 3 | 10YR5/8黄褐色土 | ロームブロック主体、粘性もち、ややしまる。 |
| 4 | 10YR5/8黄褐色土 | ロームブロック主体、粘性もち、しまり欠く。 |

第57図 3号井戸 (1:40)

4号井戸

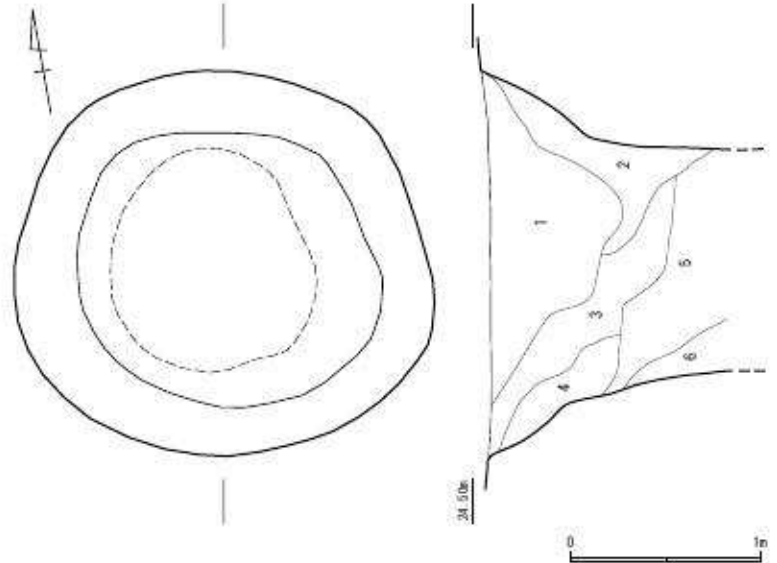
調査区の中央部南側、F・G-4区に位置する。北側に5号井戸、北西側に3号井戸、東側に2号井戸が近接して分布する。平面形は略円形を呈し、長径1.8m、短径1.7m、深さ1.2m以上を測る。安全上の理由から完掘するまでには至らなかった。断面は筒状に近く、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土中より須恵器甕、土師器坏・甕、古代瓦、灰釉陶器などの他、中世の在地系の瓦質播鉢底部が出土した。覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。



4号井戸土層

- | | | |
|---|--------------|-------------------------------|
| 1 | 7.5YR3/2黒褐色土 | ローム粒・炭化物粒多量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・白色粘土粒混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 3 | 7.5YR2/3暗褐色土 | ローム粒・赤色粒微量混入、粘性もち、しまり欠く。 |
| 4 | 7.5YR3/3暗褐色土 | ローム粒・白色粘土粒微量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 5 | 7.5YR3/2黒褐色土 | ロームブロック・白色粘土粒微量混入、粘性もち、ややしまる。 |

第58図 4号井戸 (1:40)



5号井戸土層

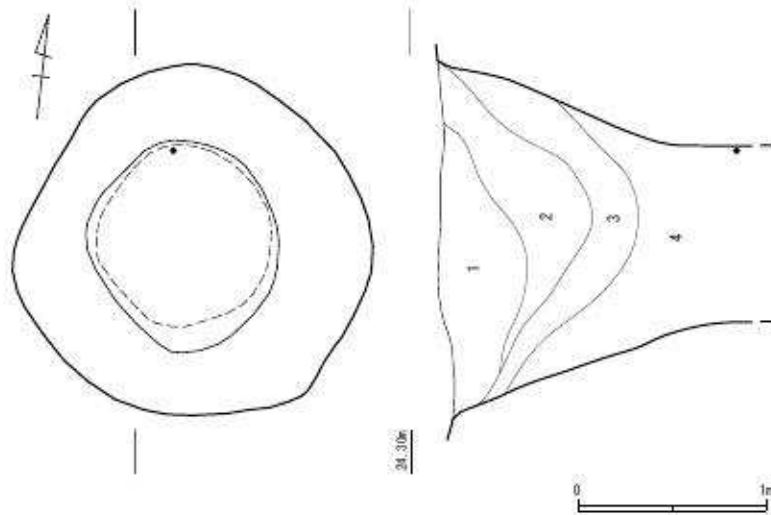
- | | | |
|---|--------------|-------------------------------|
| 1 | 7.5YR2/3暗褐色土 | ローム粒・炭化物粒少量混入、粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒多量、白色粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 3 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・白色粘土ブロック微量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 4 | 7.5YR2/3暗褐色土 | ローム粒混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |
| 5 | 7.5YR4/6褐色土 | ローム粒多量混入、粘性もち、ややしまる。 |
| 6 | 7.5YR2/3暗褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性もち、しまり欠く。 |

第59図 5号井戸 (1:40)

5号井戸

調査区の中央部南東側、F・G-4区に位置する。南東に2号井戸、南側に4号井戸、西側に3号井戸が

近接して分布する。平面形は略円形を呈し、長径 2.2 m、短径 2.0 m、深さ 1.3 m 以上を測る。攪乱が激しいことから、完掘するまでには至らなかった。断面は漏斗状を呈する。覆土中より土師器坏、灰釉陶器、多量の古代瓦の他、常滑系陶器壺・甕などが出土した。出土遺物や覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。



- 6号井戸土層**
- | | | |
|---|---------------|------------------------|
| 1 | 10YR2/3 黒褐色土 | ローム粒少量混入、粘性欠き、ややしまる。 |
| 2 | 7.5YR4/6 褐色土 | ロームブロック主体、粘性、しまり欠く。 |
| 3 | 7.5YR3/3 暗褐色土 | ローム粒少量混入、粘性もち、しまり欠く。 |
| 4 | 7.5YR5/6 明褐色土 | ローム粒多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。 |

第 60 図 6号井戸 (1:40)

6号井戸

調査区の中央部南西側、B・C-4 区に位置する。平面形は略円形を呈し、長径 1.9 m、短径 1.9 m、深さ 1.7 m を測る。攪乱が激しいことから、完掘するまでには至らなかった。断面は漏斗状を呈する。覆土中より須恵器甕、土師器坏・甕、灰釉陶器の他、多量の古代瓦などが出土した。覆土のあり方などから判断して中世の所産であった可能性が高い。

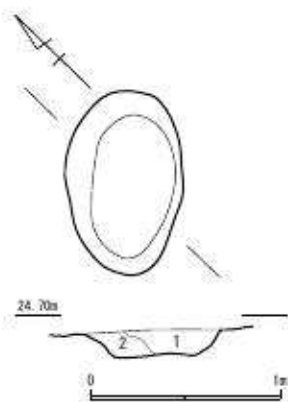
(小野)

4-4 土坑

中・近世の土坑は合計 42 基検出されている。調査区の広い範囲にわたって散在しているが、北宋銭「天聖元宝」が出土した 26 号や 35 号、白磁皿が出土した 30 号は、7 号、34 号、40 号などとともに長楕円形や隅丸長方形を主体とした平面プランや人為的な堆積状態などから中世の墓壇であった可能性が高いものであり、調査区の北西側から西側に集中分布する傾向をみせていることが注意される。

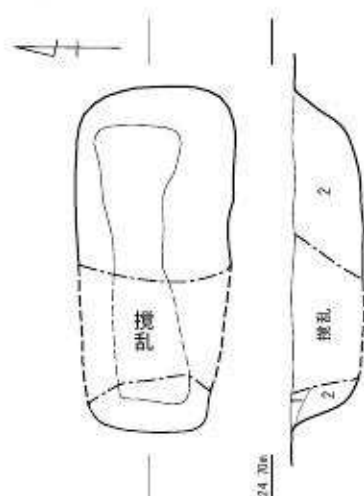
長径 2.3 m と大型の 6 号土坑からは 18 世紀後半～19 世紀の瀬戸美濃産片口とともに牛ないし馬と思われる顎骨が出土しており、江戸時代後期の牛馬埋葬の跡と推定される。

(小野)



- 1号土坑土層**
- | | | |
|---|---------------|----------------------------|
| 1 | 10YR2/3 黒褐色土 | ローム粒・赤色粒微量混入、やや粘性もち、しまる。 |
| 2 | 7.5YR3/4 暗褐色土 | ローム粒多量、赤色粒微量混入、やや粘性もち、しまる。 |

第 61 図 1号土坑 (1:40)



- 2号土坑土層**
- | | | |
|---|---------------|------------------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色土 | ローム粒・白色粘土粒混入、粘性欠き、しまる。 |
| 2 | 7.5YR3/2 黒褐色土 | 白色粘土粒多量、ローム粒微量混入、やや粘性欠き、しまる。 |

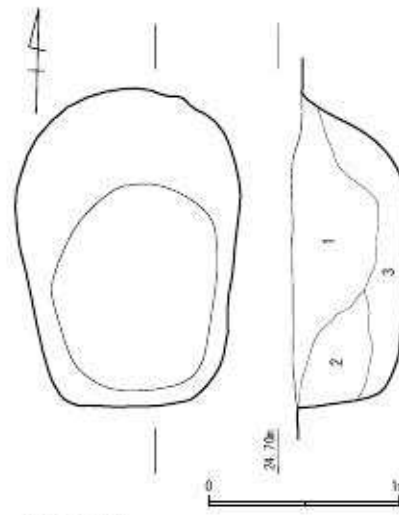
第 62 図 2号土坑 (1:40)



3号土坑土層

- 1 7.5YR4/4褐色土 ローム粒・ロームブロック混入、粘性欠き、しまる。
- 2 10YR2/3黒褐色土 ロームブロック・白色粘土粒少量混入、粘性欠き、しまる。

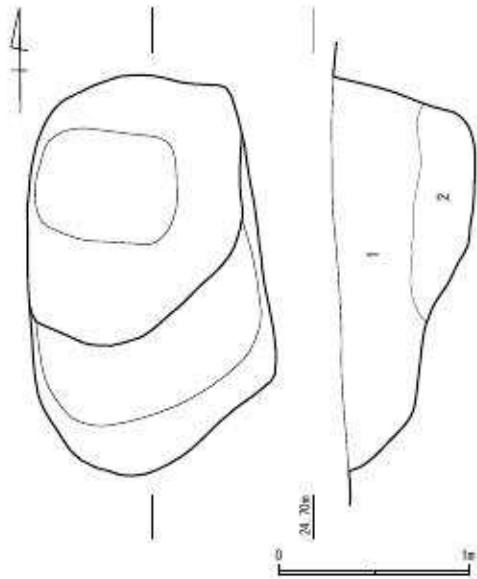
第63図 3号土坑 (1:40)



4号土坑土層

- 1 7.5YR4/4褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粘土粒混入、粘性欠き、しまる。
- 2 7.5YR2/3黒褐色土 ローム土多量混入、粘性欠き、しまる。
- 3 7.5YR4/6褐色土 ローム土多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

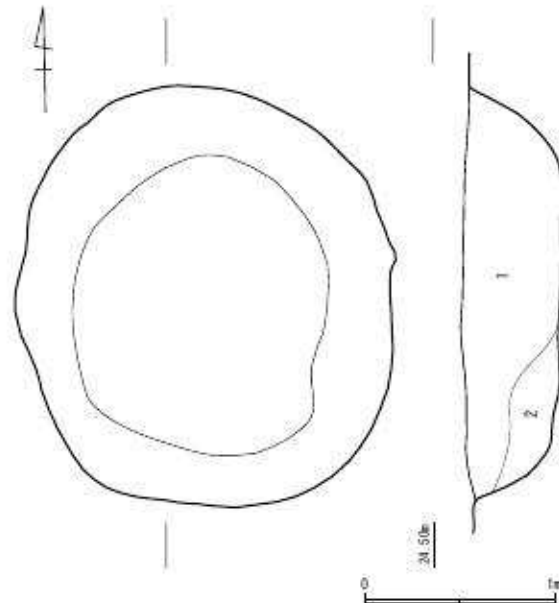
第64図 4号土坑 (1:40)



5号土坑土層

- 1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・白色粘土ブロック混入、粘性欠き、しまる。
- 2 7.5YR4/4褐色土 ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、ややしまる。

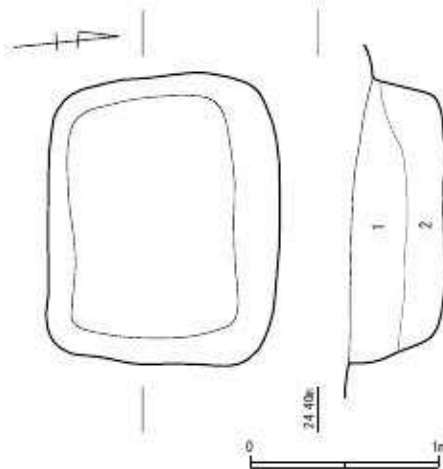
第65図 5号土坑 (1:40)



6号土坑土層

- 1 7.5YR4/4褐色土 ロームブロック多量、炭化物粒微量混入、粘性欠き、しまる。
- 2 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性欠き、しまる。

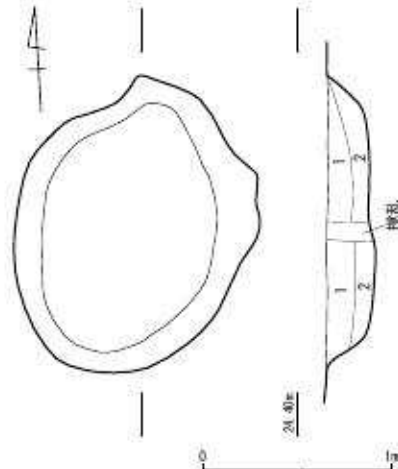
第66図 6号土坑 (1:40)



7号土坑土層

- 1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒少量混入、やや粘性もち、ややしまり欠く。
- 2 10YR4/6褐色土 ロームブロック多量混入、やや粘性もち、ややしまる。

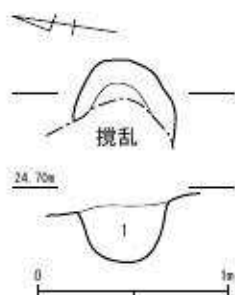
第67図 7号土坑 (1:40)



8号土坑土層

- 1 10YR4/4褐色土 ロームブロック多量混入、粘性もち、しまり欠く。
- 2 7.5YR3/2黒褐色土 粘土主体、粘性もち、しまる。

第68図 8号土坑 (1:40)



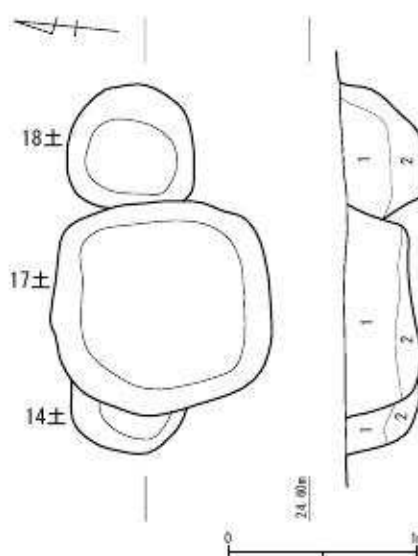
9号土坑土層
1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒、炭化物粒少量混入、粘性もち、しまる。

第69図 9号土坑 (1:40)



10号土坑土層
1 7.5YR4/4褐色土 ローム粒・白色粘土混入、粘性欠き、しまる。
2 7.5YR2/3黒褐色土 ローム粒混入、粘性欠き、しまる。

第70図 10号土坑 (1:40)



14号土坑土層
1 7.5YR2/3黒褐色土 ローム粒・炭化物粒少量混入、粘性欠き、しまる。
2 10YR4/6褐色土 ローム主体、黒褐色土多量混入、やや粘性もち、ややしまり欠く。

17号土坑土層
1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混入、粘性欠き、しまる。
2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒多量、赤色粒微量混入、やや粘性欠き、しまる。

18号土坑土層
1 7.5YR5/8明褐色土 ローム主体、黒褐色土多量混入、やや粘性もち、ややしまる。
2 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量混入、やや粘性もち、ややしまる。

第71図 14号・17号・18号土坑 (1:40)



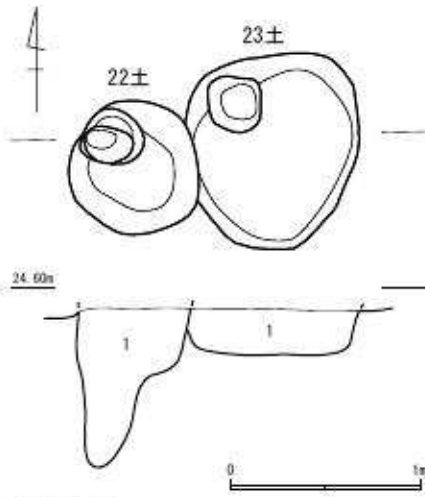
15号土坑土層
1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・赤色粒微量混入、粘性もち、しまる。
2 7.5YR2/3暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量混入、粘性もち、しまる。

第72図 15号土坑 (1:40)



16号土坑土層
1 7.5YR2/3黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入、粘性欠き、しまる。

第73図 16号土坑 (1:40)



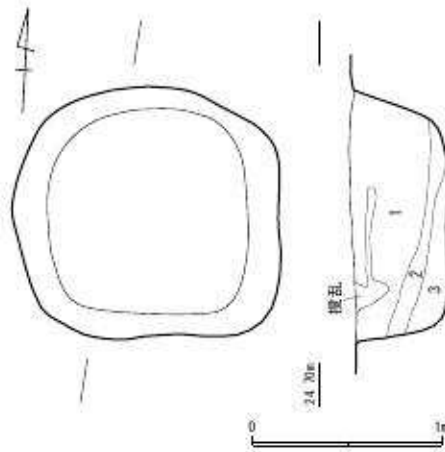
22号土坑土層

1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量、炭化物粒微量混入、粘性欠き、しまる。

23号土坑土層

1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量、炭化物粒少量混入、やや粘性欠き、しまる。

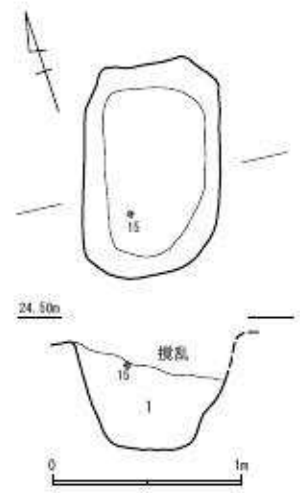
第74図 22号・23号土坑 (1:40)



25号土坑土層

1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混入、粘性欠き、しまる。
2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・赤色粒微量混入、やや粘性欠き、ややしまる。
3 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、やや粘性もち、ややしまる。

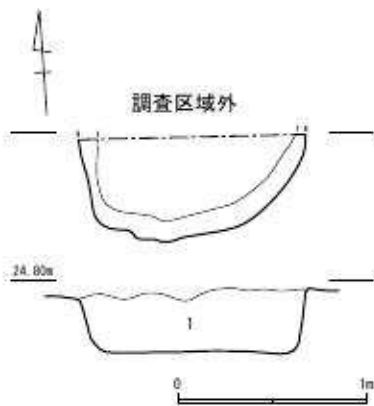
第75図 25号土坑 (1:40)



26号土坑土層

1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量、炭化物粒微量混入、粘性欠き、しまる。

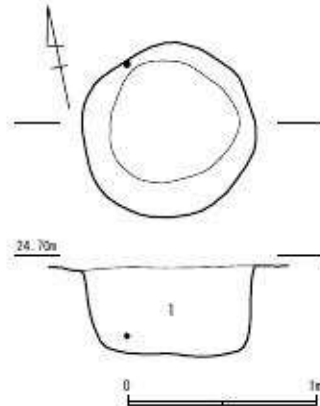
第76図 26号土坑 (1:40)



27号土坑土層

1 7.5YR4/3褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒褐色土混入、やや粘性もち、しまる。

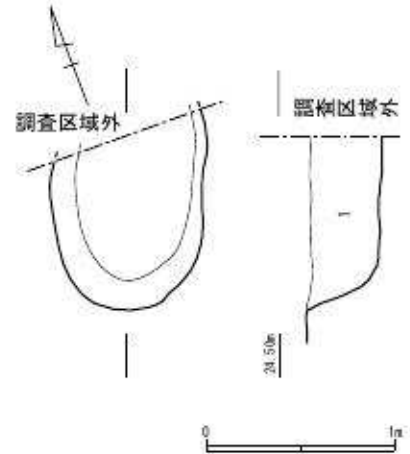
第77図 27号土坑 (1:40)



28号土坑土層

1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・赤色粒少量混入、粘性もち、しまる。

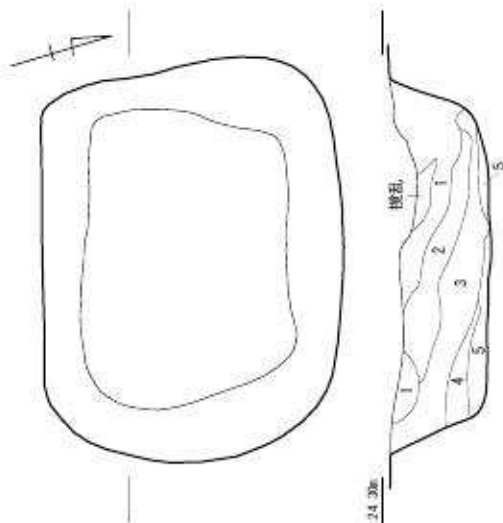
第78図 28号土坑 (1:40)



30号土坑土層

1 7.5YR4/6褐色土 ローム粒・黒褐色土少量、赤色粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

第80図 30号土坑 (1:40)



29号土坑土層

1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・白色砂粒、炭化物微量混入、粘性もち、しまる。
2 10YR7/8黄褐色土 白色砂多量、ローム粒、+ロームブロック混入、粘性欠き、しまる。
3 10YR8/8黄褐色土 白色砂主体、黒色ブロック・赤色粒少量混入、粘性欠き、しまる。
4 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、しまる。
5 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・白色粒・赤色粒少量混入、粘性もち、しまり欠く。

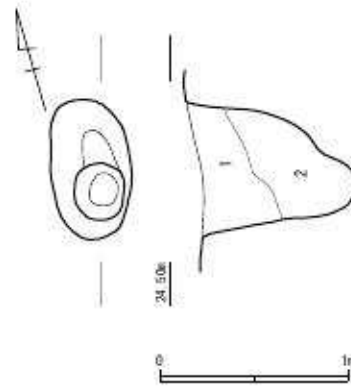
第79図 29号土坑 (1:40)



31号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量、炭化物微量混入、粘性もち、しまる。

第81図 31号土坑 (1:40)



32号土坑土層

- 1 7.5YR4/6褐色土 ローム粒少量、赤色粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
2 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性もち、しまる。

第82図 32号土坑 (1:40)



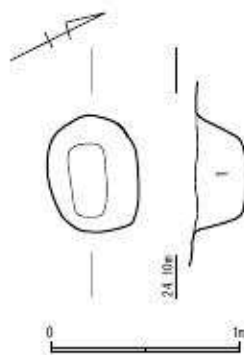
34号土坑土層

- 1 4.0YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土・赤色粒少量混入、粘性もち、しまり欠く。

35号土坑土層

- 1 7.5YR4/6褐色土 白色砂多量、ローム粒、ロームブロック混入、粘性欠き、しまる。
2 7.5YR4/6褐色土 白色砂主体、黒色ブロック・赤色粒少量混入、粘性欠き、しまる。
3 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性もち、しまる。

第83図 34号・35号土坑 (1:40)



37号土坑土層

- 1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、やや粘性もち、しまる。

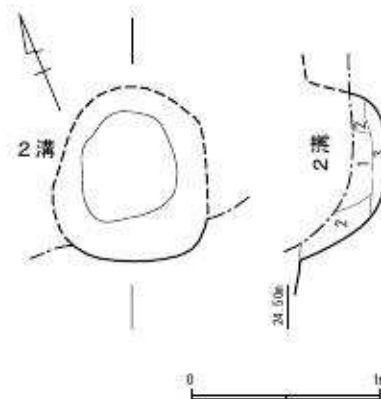
第85図 37号土坑 (1:40)



36号土坑土層

- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・黒褐色土少量混入、粘性欠き、しまる。

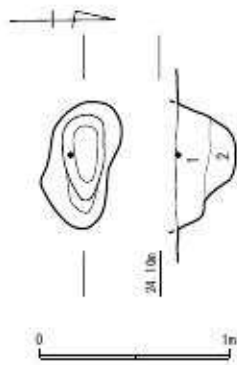
第84図 36号土坑 (1:40)



39号土坑土層

- 1 7.5YR4/6赤褐色土 ローム粒多量混入、粘性もち、しまり欠く。
2 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒多量、炭土粒微量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
3 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒混入、粘性もち、ややしまり欠く。

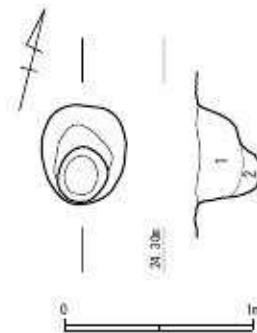
第86図 39号土坑 (1:40)



40号土坑土層

1. 7.5YR4/6褐色土 黒色土・赤色粒少量混入、やや粘性欠き、しまる。
2. 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性もち、ややしまる。

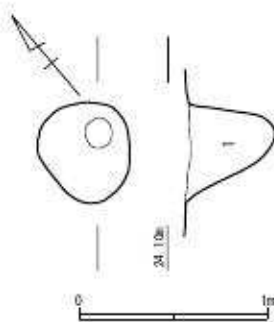
第 87 図 40 号土坑 (1 : 40)



41号土坑土層

1. 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、しまる。
2. 10YR3/4暗褐色土 ローム粒・赤色粒少量混入、粘性もち、ややしまり欠く。

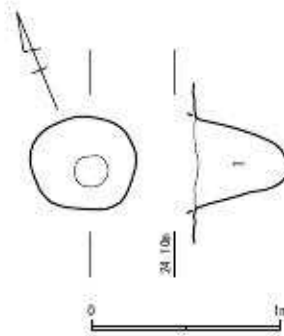
第 88 図 41 号土坑 (1 : 40)



42号土坑土層

1. 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量混入、粘性もち、ややしまる。

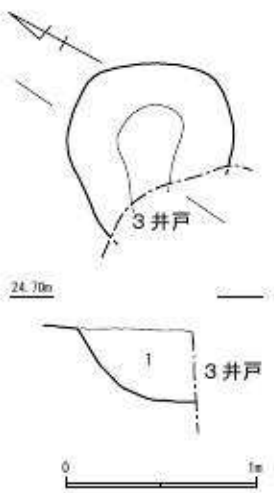
第 89 図 42 号土坑 (1 : 40)



43号土坑土層

1. 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・赤色粒少量混入、やや粘性もち、しまる。

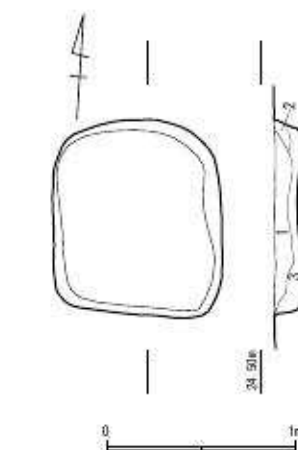
第 90 図 43 号土坑 (1 : 40)



44号土坑土層

1. 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・赤色粒少量混入、やや粘性もち、しまる。

第 91 図 44 号土坑 (1 : 40)



45号土坑土層

1. 10YR3/4暗褐色土 白色粘土粒多量、ローム粒・黒褐色土少量混入、粘性欠き、しまる。
2. 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、やや粘性欠き、しまる。
3. 7.5YR4/3褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、やや粘性欠き、ややしまる。

第 92 図 45 号土坑 (1 : 40)



- 46号土坑土層**
- 1 10YR3/4暗褐色土 白色粘土粒多量、ローム粒・黒褐色土少量混入、粘性欠き、しまる。
 - 2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・炭化物粒混入、粘性欠き、しまる。

第93図 46号土坑 (1:40)



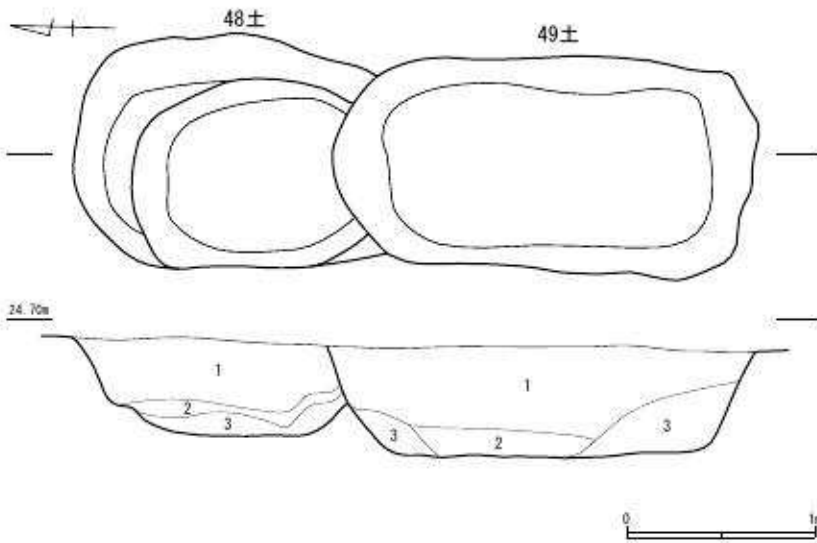
- 47号土坑土層**
- 1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒・白色粘土粒混入、粘性欠き、しまる。
 - 2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量混入、粘性欠き、しまる。

第94図 47号土坑 (1:40)



- 50号土坑土層**
- 1 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒・粘土粒多量、黒褐色土少量混入、粘性欠き、しまる。

第96図 50号土坑 (1:40)



- 48号土坑土層**
- 1 7.5YR4/4褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒褐色土混入、粘性欠き、しまる。
 - 2 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性もち、ややしまり欠く。
 - 3 7.5YR3/3暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混入、やや粘性欠き、しまる。

- 49号土坑土層**
- 1 7.5YR4/4褐色土 ローム粒・白色粘土粒混入、粘性欠き、しまる。
 - 2 7.5YR3/2黒褐色土 ロームブロック少量混入、粘性もち、しまる。
 - 3 7.5YR3/4暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性もち、しまる。

第95図 48号・49号土坑 (1:40)



- 53号土坑土層**
- 1 7.5YR3/2黒褐色土 ローム粒少量混入、やや粘性もち、しまる。

第97図 53号土坑 (1:40)

第6表 中・近世土坑一覽

No	位置	平面形	残存度	規模(長径×短径) cm	深さ cm	長軸方向	断面形	出土遺物	時期	備考
1	H-1-3	長楕円形	完存	97×62	14	N-46°-E	皿状	土師器 3片	中・近世	1溝を切る。
2	G-3	隅丸長方形	一部欠	183×84	37	N-89°-W	鍋底状	縄文土器 2片 須恵器 28片 土師器 123片 瓦 47片 陶器 1片 鉄製品 1点	中・近世	
3	G・H-2	不整 隅丸長方形	完存	181×116	42	N-5°-E	鍋底状	須恵器 3片 土師器 7片 瓦 1片 石製品 1点 鉄製品 1点	中・近世	北側に落ち込む。 8住を切る。
4	H-3	隅丸長方形	完存	169×119	60	N-2°-W	筒状	須恵器 1片 土師器 12片 瓦 2片 陶器 1片 石製品 1点	中・近世	
5	H-1-4	不整 隅丸長方形	完存	212×128	76	N-3°-E	筒状	須恵器 2片 土師器 30片 瓦 4片 石製品 1点 鉄製品 2点	中・近世	南側にテラス状平坦面。 2溝を切る。
6	C・D-4	楕円形	完存	230×202	52	N-1°-E	筒状ないし 鍋底状	須恵器 2片 土師器 6片 瓦 10片 磁器 1片 陶器 1片	18世紀後葉～ 19世紀	2溝を切る。 牛馬埋葬跡
7	B-3	隅丸長方形	完存	154×123	50	N-84°-W	筒状ないし 鍋底状	なし	中世	墓塚?
8	B-3	不整 楕円形	完存	157×127	26	N-4°-E	皿状	なし	中・近世	
9	I-2	不明	半欠	(54)×(38)	30	不明	筒状	なし	中・近世	
10	J-4	不明	半欠	(106)×(31)	24	N-7°-E	鍋底状	なし	中・近世	2溝を切る。
14	H-2・3	不明	一部	(62)×(30)	(40)	不明	筒状	須恵器 4片 土師器 32片 瓦 6片 鉄製品 1点	中・近世	17土に切られる。
15	H-3	不整 隅丸長方形	一部欠	179×(106)	30	N-5°-W	皿状	須恵器 1片 土師器 7片	中・近世	1溝を切る。
16	H-2	楕円形	一部欠	(142)×124	21	N-70°-E	皿状	須恵器 2片 土師器 29片 瓦 6片	中・近世	8住を切る。
17	H-1-2・3	不整 隅丸方形	完存	117×112	40	N-84°-E	筒状	須恵器 1片 土師器 55片 瓦 4片 鉄製品 1点	中・近世	14・18土を切る。
18	I-2・3	略円形	一部欠	68×68	42	N-7°-W	筒状	須恵器 2片 土師器 10片 瓦 1片	中・近世	17土に切られる。
22	D-2	略円形	完存	71×70	84	N-2°-W	筒状	須恵器 7片 土師器 43片 瓦 4片	中・近世	西側に深い落ち込み。 10住・23土を切る。
23	D-2	不整 楕円形	完存	110×94	24	N-2°-E	筒状ないし 鍋底状	須恵器 2片 土師器 18片 瓦 2片	中・近世	10住を切り、22土に切られる。
25	F-4	隅丸方形	完存	141×133	52	N-6°-E	筒状	須恵器 1片 土師器 3片 瓦 1片	中・近世	3井戸を切る。 第98図14

No	位置	平面形	残存度	規模(長径×短径) cm	高さ cm	長軸方向	断面形	出土遺物	時期	備考
26	C-1・2	不整 隅丸長方 形	完存	121×71	55	N-20°-E	筒状	須恵器 4片 土師器 23片 石製品 1点 銭 1点	中世	墓墳? 第98図15
27	E-1	不明	半欠	(120)×(55)	23	不明	筒状	土師器 1片	中・近世	
28	E-1・2	略円形	完存	95×90	47	N-79°-W	筒状	須恵器 3片 土師器 30片 瓦 1片	中・近世	
29	F-3	隅丸長方 形	完存	212×160	49	N-73°-W	筒状ないし 鍋底状	須恵器 15片 土師器 63片 瓦 17片 陶器 3片 石製品 1点	中世	
30	C-1	長楕円形	一部欠	(106)×80	38	N-21°-E	筒状ないし 鍋底状	須恵器 2片 土師器 10片 陶器 1片	15世紀	墓墳? 北側調査区域外。 6住を切る。 第98図16
31	F-5	隅丸長方 形	一部欠	121×(92)	34	N-89°-E	筒状ないし 鍋底状	なし	中・近世	16住を切る。
32	G-3	長楕円形	完存	75×43	81	N-16°-E	筒状	須恵器 4片 土師器 41片 瓦 9片 石製品 2点	中・近世	南側に落ち込む。
34	C-2	長楕円形	完存	135×89	40	N-9°-E	筒状ないし 鍋底状	須恵器 5片 土師器 28片	中・近世	墓墳? 35土を切る。
35	C-2	隅丸長方 形	一部欠	127×(93)	51	不明	筒状	瓦 1片 陶器 1片 銭 1点	14世紀末～ 15世紀中葉	墓墳? 34土に切られる。 第98図17
36	B-5	不明	一部	(114)×(26)	(29)	不明	鍋底状	なし	中・近世	南側調査区域外。
37	B-4	楕円形	完存	62×48	27	N-63°-W	筒状ないし 鍋底状	なし	中・近世	
39	G・H-4	楕円形	一部	(93)×(82)	(45)	N-22°-E	筒状ないし 鍋底状	須恵器 1片 土師器 21片	中世	7住を切り、2溝に切られる。
40	B-4	不整 長楕円形	完存	67×36	32	N-89°-W	鍋底状	土師器 1片	15世紀後葉か	墓墳? 西側に落ち込む。
41	A-3	楕円形	完存	53×44	33	N-14°-W	筒状	なし	中・近世	南側に落ち込む。
42	B-3	略円形	完存	53×49	45	N-41°-E	筒状	なし	中・近世	
43	B-3・4	略円形	完存	56×49	47	N-23°-E	筒状	なし	中・近世	
44	F-4	不明	半欠	(90)×87	(37)	不明	鍋底状	須恵器 2片 土師器 5片	中世	3井戸に切られる。
45	H-2・3	隅丸長方 形	完存	104×89	14	N-4°-W	皿状	土師器 5片 瓦 1片	中・近世	15住・6竪穴を切る。
46	H-3	隅丸長方 形	完存	172×114	38	N-4°-W	筒状ないし 鍋底状	須恵器 4片 土師器 7片 瓦 2片	中・近世	15住・1溝を切る。
47	H-4	不整 楕円形	完存	96×79	37	N-20°-W	筒状ないし 鍋底状	なし	中・近世	2溝を切る。
48	H-3・4	楕円形	一部欠	(159)×123	51	N-2°-W	筒状ないし 鍋底状	土師器 7片 瓦 1片 陶器 3片	中・近世	49土に切られる。 第98図18
49	H-4	隅丸長方 形	完存	223×115	58	N-2°-W	筒状ないし 鍋底状	須恵器 3片 土師器 1片 瓦 1片	中・近世	48土を切る。
50	I-5	不整 楕円形	完存	111×84	22	N-6°-W	皿状	なし	中・近世	
53	E・F-5	不整 隅丸長方 形	一部欠	119×(81)	34	N-89°-E	筒状ないし 鍋底状	なし	中・近世	

4-5 遺物

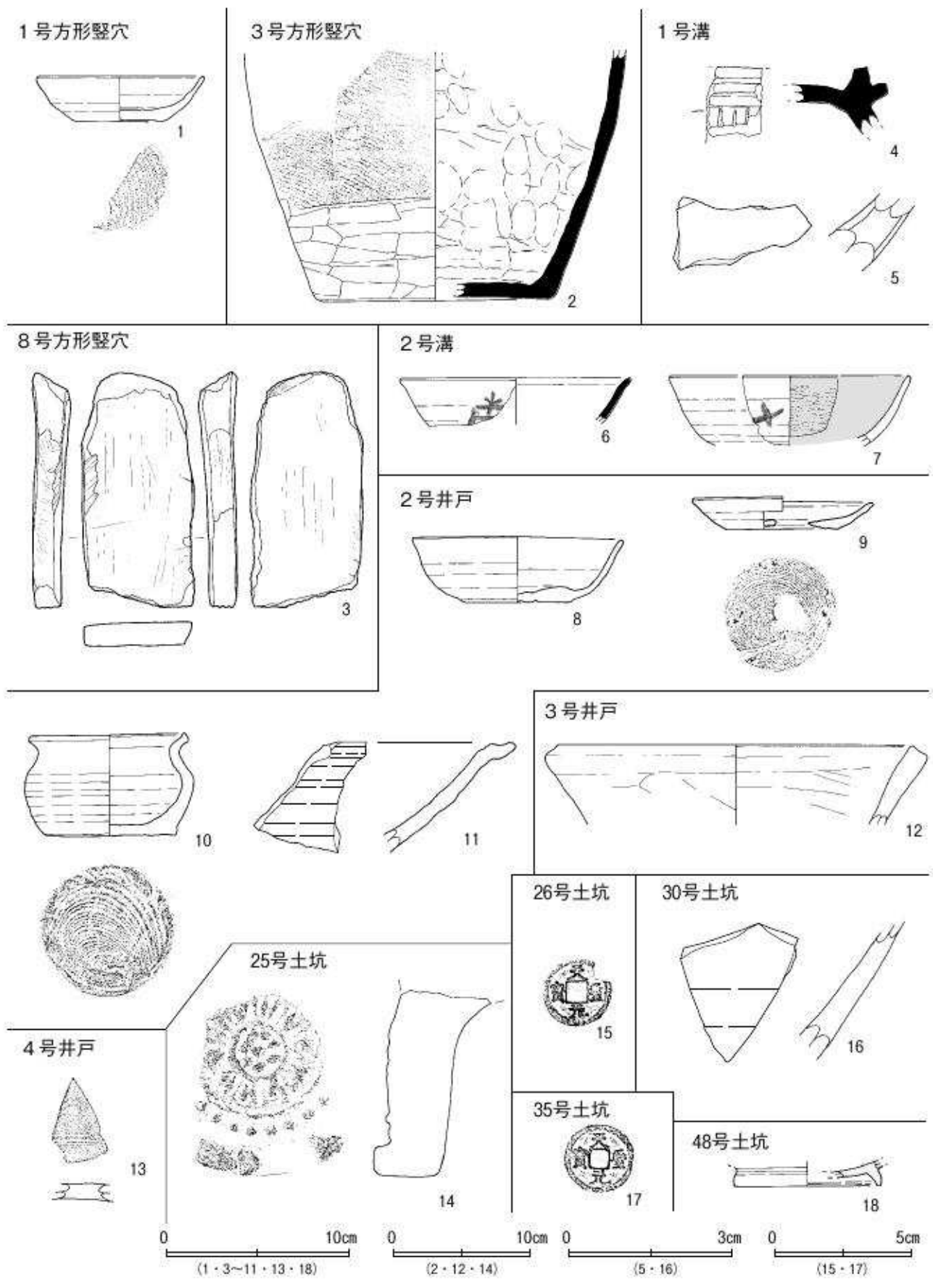
中・近世の遺物として陶器、磁器、土師質土器、銭貨、石製品などが出土した。いずれも量的にはごくわずかであり、しかも大部分が細片で占められていた。それとは対照的に、当該期の遺構からは流れ込みと思われる奈良・平安時代の遺物が少なからず出土したことが注意される。

第36図1は1号住居跡確認面、第98図1は1号方形竪穴から出土した土師質土器の小皿。いずれもロクロ調整が施され、底部には回転糸切り痕がみられる。3は8号方形竪穴から出土した4面砥石。5は1号溝出土の青磁碗の破片、13～14世紀頃の中国・龍泉窯産と思われる。11は内外面に灰釉が施された瀬戸・美濃系の鉢。2号井戸から出土した。形状から15世紀のものであろう。12は3号井戸出土の土師質土器の鉢、13は4号井戸出土の瓦質土器の播鉢である。16は30号土坑出土の磁器碗。内外面に白磁釉がかけられるもので、13世紀後半～14世紀後半の中国産であらう。見込み部に文様は不明であるが線刻をもつ。15と17は26号土坑および35号土坑から出土した銭貨。中国北宋の仁宗1023年に初鑄された天聖元寶である。

この他、図示できなかったが、2・3号井戸や30号土坑から常滑系陶器片、30号土坑から13世紀後半～14世紀後半の白磁片や15世紀後半～16世紀前半の土製内耳鍋、35号土坑から14世紀末～15世紀中葉の古瀬戸深皿などが出土している。(林)

第7表 出土遺物一覧

番号	出土位置	器種	種別	法量			胎土	色調		焼成	時期	備考
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		外面	内面			
1	1号方形竪穴	皿	土師質土器	(8.8)	(4.8)	2.4	少量の石英・赤色粒	淡赤褐色	淡赤褐色	良好	13世紀初	ロクロによる成形、底部：回転糸切り、在地系
2	3号方形竪穴	甕	須恵器	—	17.2	—	雲母・石英・白色粒	灰青色	灰青色	良好	9世紀	内面：ナデ、外面：平行タタキ、胴部下部ヘラケスリ
3	8号方形竪穴	砥石	石製品	長さ12.8	幅6.2	厚さ1.3	—	—	—	—	—	シルト岩・4面砥面として使用
4	1号溝	円面碗	須恵器	—	—	—	石英・白色粒	暗灰色	暗灰色	良好	8世紀後半?	内面：ヨコナデ、外面：自然釉
5	1号溝	碗	磁器	—	—	—	密	緑青色	緑青色	良好	13世紀～14世紀	内外面：青磁釉、中国龍泉窯系
6	2号溝	環	土師器	(12.1)	—	<2.5>	小礫	明灰白色	明灰白色	良好	—	外面に墨書
7	2号溝	環	土師器	(12.8)	—	<3.8>	石英・少量の白色粒・赤色粒	褐色	黒色	良好	9世紀中葉	ロクロ調整、内面：黒色処理、ミガキ
8	2号井戸	環	土師器	11.2	5.6	3.6	石英・雲母・白色粒	明褐色	明褐色	良好	10世紀後半	ロクロ調整、底部：ヘラキリ
9	2号井戸	環	土師器	9.5	6.0	1.8	少量の石英・白色粒	明褐色	明褐色	良好	11世紀前半	ロクロ調整、底部：回転糸切り、底部中央部に穿孔
10	2号井戸	広口壺	土師器	8.3	7.0	5.6	石英・少量の雲母	暗赤褐色	暗赤褐色	良好	古代	ロクロ調整、底部：回転糸切り
11	2号井戸	鉢	陶器	—	—	—	灰色	緑色	緑色	良好	15世紀	瀬戸・美濃系、内外面：灰釉
12	3号井戸	鉢	土師質土器	(25.8)	—	<5.7>	少量の石英・チャート・雲母・小礫を含む	褐色	褐色	良好	中世	ロクロによる成形、内面に強いナデ、在地系
13	4号井戸	播鉢	瓦質土器	—	—	—	少量の石英・白色粒	明黒灰色	明黒灰色	良好	中世	4本1単位による条線、在地系
15	26号土坑	銭貨	銅製品	長径2.5	孔幅0.7	厚さ0.1	—	—	—	—	—	天聖元寶 重量2.2g
16	30号土坑	碗	磁器	—	—	—	密	淡緑白色	淡緑白色	良好	13世紀後半～14世紀後半	内外面：白磁釉、被熱により内外面ともザラザラしている、中国系
17	35号土坑	銭貨	銅製品	長径2.5	孔幅0.6	厚さ0.1	—	—	—	—	—	天聖元寶 重量3.2g
18	48号土坑	皿	緑釉陶器	—	8.0	—	少量の白色粒	緑色	緑色	良好	9世紀後半～10世紀前半	内外面：緑釉



第 98 图 出土遗物

第5章 近・現代 — 神栄株式会社石岡工場の頃

今回の本遺跡の調査では製糸工場の建物跡も検出され、それに関連する様々な遺物も少なからず出土した。石岡では、近代に入ると様々な産業が勃興した。当初は近世から続く醸造業が中心であったが、明治20年代に入ると製糸業がスタートした。明治24年には「石岡製糸所」、同27年には「熊岡製糸所」が創業し、やがて「石岡ノ地タル県下ニ於テ古河町ニ次ゲル製糸地タリ」（『茨城百科全書』明治44年）と言われるようになるほど、石岡における産業の大きな部分を占めるようになった。

大正初期にはこれらの製糸所は操業を停止するが、大正6年、今回の調査地点に小口組という長野県内の製糸業者が工場を設立し、操業を始めた。しかし、小口組は昭和初期の金融恐慌により資金繰りが悪化したため、大口取引先である株式会社「神栄生糸」に救済を申し立て、昭和7年（1932）以降、当該会社が石岡工場を引き継ぐことになった。

「神栄生糸」はその後「神栄製糸」と会社名を変更し、戦中には軍需関連製品などの生産にも従事している。しかし、オイルショック以降の製糸業界の不況により、昭和58年、製糸業からは完全撤退した。

今回の調査で検出された近・現代の遺構としてはレンガを砕いた建物基礎、セメントモルタル製の基礎などが挙げられる（第99図、図版10）。当時の図面を見ると、今回の調査地点は事務所棟と食堂・食料倉庫部分にあたる。レンガを砕いて基礎に入れた建物は、建物配置からすると事務所棟の跡と考えられる。また、モルタル製の基礎は食料倉庫跡であろう。さらに、調査地点上面は石炭ガラで厚く覆われており、機械を稼働させるためにボイラーで大量の石炭が使用されていたことを示している。

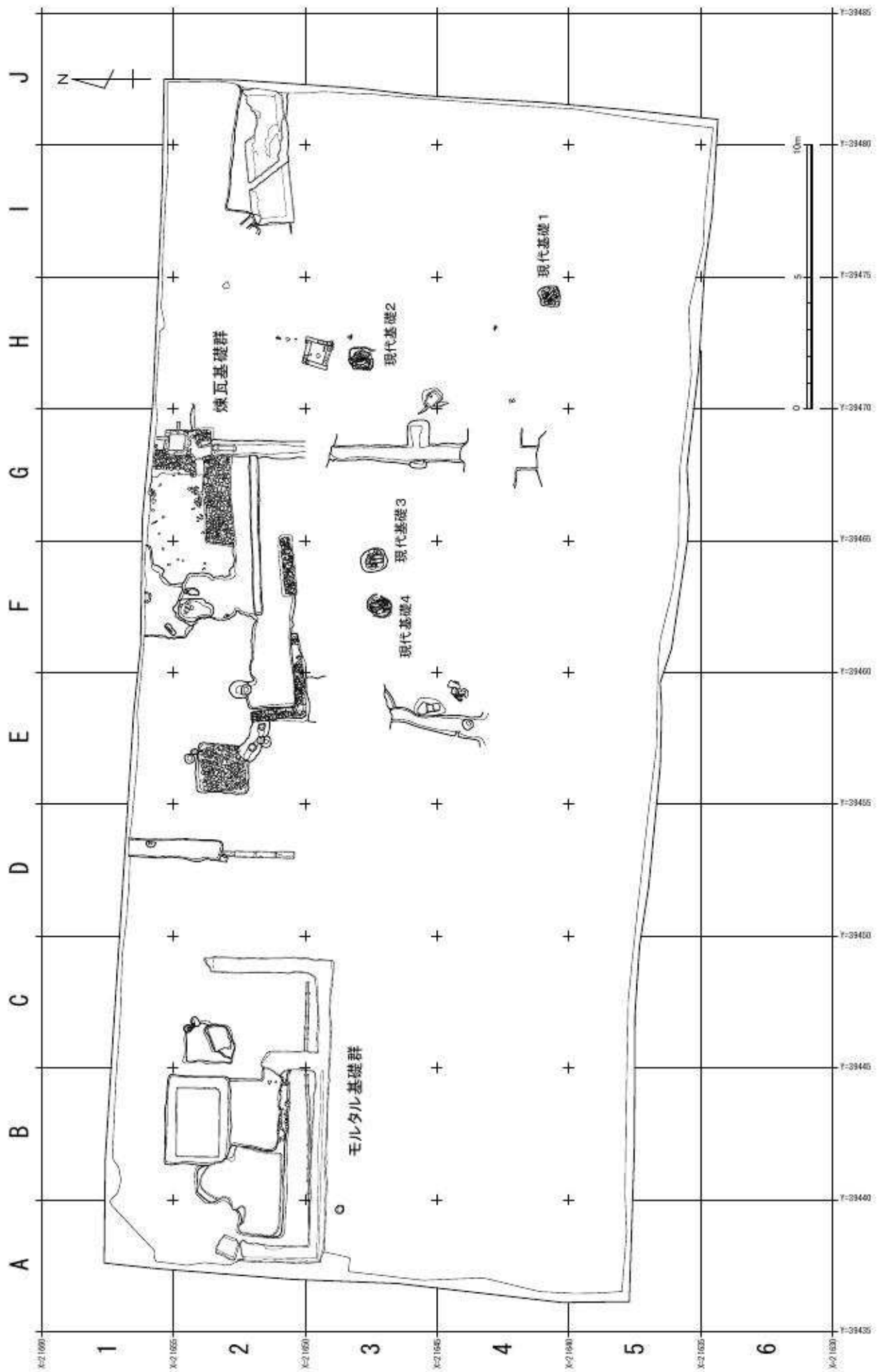
一方、出土した遺物は主に昭和期のもので、工場建物に関連する赤レンガ、ボイラーに関連すると見られる耐火レンガ、製糸に関連する集緒器・繰り糸鍋の他に、インク瓶をはじめとする各種の瓶類、茶碗、皿、急須、湯飲み、汽車土瓶などが含まれている（図版17）。

工場建物に関連する赤レンガ、ボイラーに関連すると見られる耐火レンガには、製作場所を示す刻印・などはみられなかった。集緒器や繰り糸鍋は石岡市教育委員会の試掘調査でも出土している。神栄製糸では昭和38年に自動操糸機が導入されるまでは座繰りが行われていた。繰り糸鍋は、座繰りの際、繭を茹でながら糸を紡ぐための道具である。また集緒器は、繭の糸を集めて撚りをかけるための道具である。インク瓶は事務所などで使用されたものであろう。

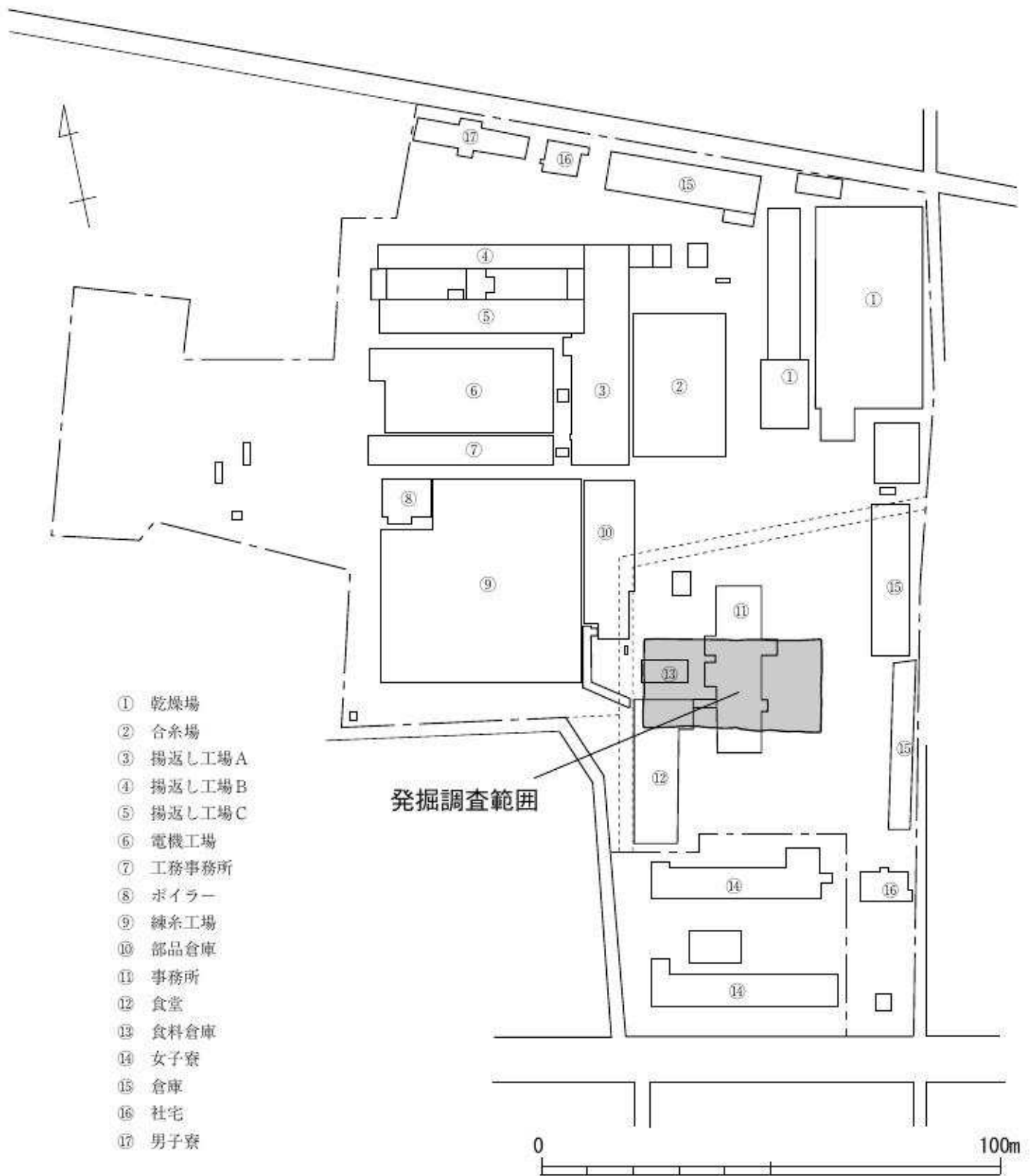
神栄製糸における労働の主体は女性であった。これらの女性工具には、近隣の町村だけでなく福島県などの出身者も含まれており、大部分が工場内の寮に入っていたという。出土した瓶の中にクリーム、香水といった化粧品用の容器が多数見られることも女性の多い職場であったことを裏付けている。茶碗、皿、急須、湯飲みなどは工場や寮などで使用されたものであろう。これ以外にも目薬や内服薬の瓶などの出土が確認されている。

以上、非常に簡単な説明であるが、国分遺跡で発見された近・現代の遺構や遺物には、明治から昭和にかけての本地域の歴史、特にその近代化に向けての試行の跡が凝縮されていたことが指摘されるのである。

本文をまとめるにあたり、神栄株式会社より旧石岡工場関係の資料をご提供いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。（市瀬）



第99図 神栄石岡工場関係近・現代基礎 (1:200)



第 100 図 神栄石岡工場建物配置図 (昭和 60 年当時 1 : 1,200)

第6章 総括

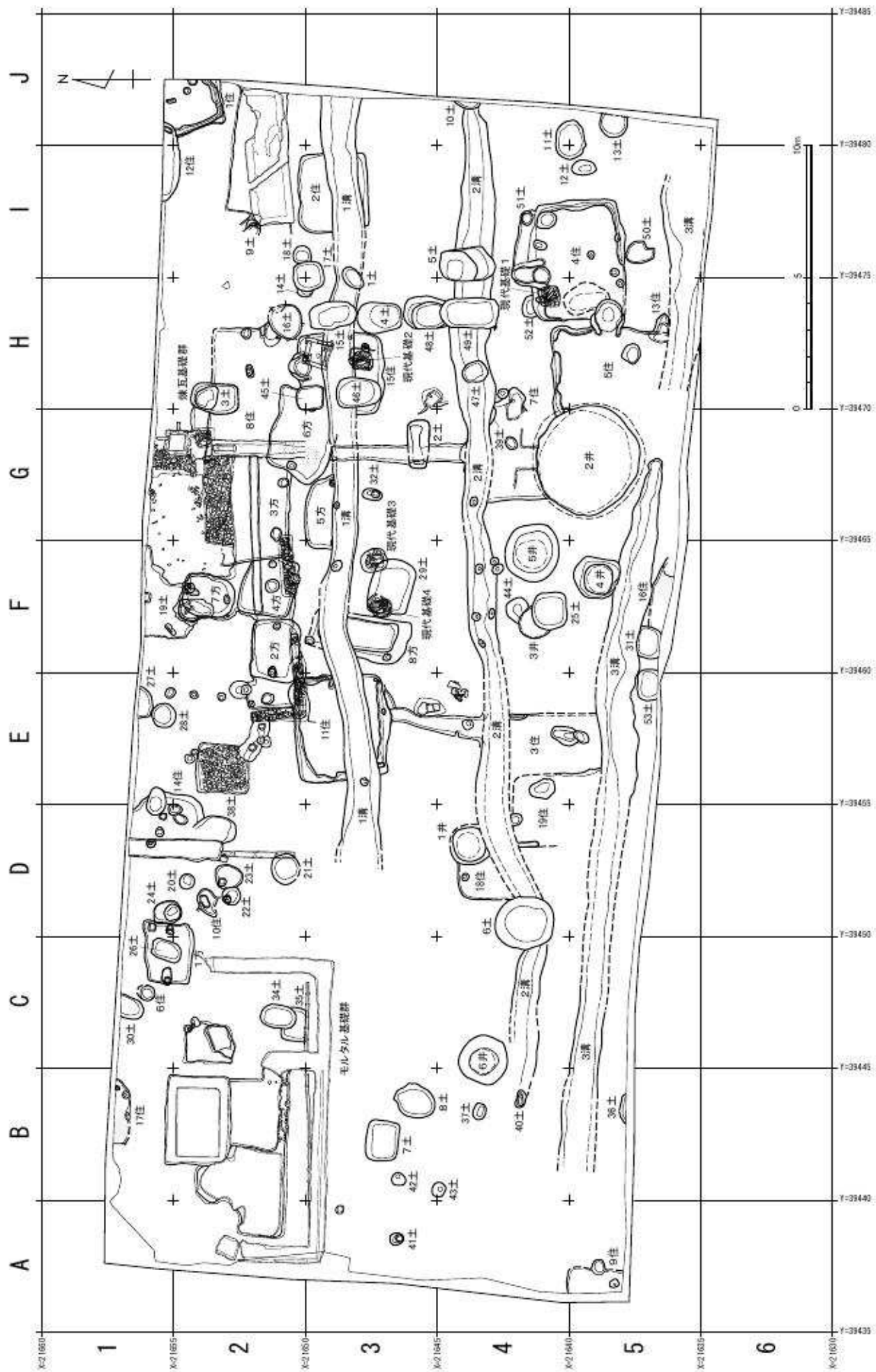
今回の調査で本遺跡では奈良・平安時代の堅穴住居跡 19 軒、土坑 10 基、中・近世の方形堅穴 8 軒、溝 3 条、井戸 6 基、土坑 42 基、さらに近・現代の製糸工場関連の建物基礎などが検出された。各遺構の詳細は本文に譲り、ここでは遺構の年代構成や出土遺物からみた当該地区の土地利用の変遷を概観したい。

1. 奈良・平安時代

当該期の住居群は、出土遺物からみて 8 世紀末～9 世紀前葉の様相を示す 2・8・11・15 号住居跡がもっとも古く、9 世紀中葉ごろと推定される 13 号住居跡、9 世紀後葉～10 世紀前葉に位置づけられる 3・4 号住居跡がそれに続く。10 世紀中葉から後葉にかけて 7・9・10・12・14・16・17 号住居跡や土墳墓と推定される 11・13・19・20・21・24 号土坑などが出現し、前代と比較して急激な遺構数の伸びがみられる。国分遺跡周辺での人口増加を示す現象であり、天慶 2 年 (939) 11 月の平将門による常陸国府襲撃と国分寺炎上を契機とする国分寺寺院地周辺の荒廃、およびそれに伴う一般集落の流動状況を示しているともみられるが、推測の域を出ない。以後、11 世紀初頭の 5 号住居跡と遺構数の減少傾向は明らかになる。なお、切り合い関係をみると 19 号住居跡は 9 世紀後葉以前、1 号住居跡は 10 世紀後葉以前にそれぞれ位置づけることが可能である。

本遺跡の前半期 (8 世紀末～10 世紀前葉) の住居群は、緑釉や灰釉などの施釉陶器をはじめとして、墨書土器、土師器や須恵器を転用した硯などの多彩な遺物を伴う点に大きな特徴がある。2 号住居跡出土の猿投系の優品である灰釉浄瓶ないし水瓶、3 号住居跡出土の四弁花を描いた坏、4 号住居跡出土の置きカマドや墨書土器、8 号住居跡出土の灰釉長頸壺、11 号住居跡出土の「上家」や「官」の文字が記された高台付盤、16 号住居跡出土の内面にタール状物質の付着する土師器などはその一例であり、2 号住居跡直上の中世の 1 号溝からは円面硯が出土している。

これらの遺物の中に、猿投産の浄瓶ないし水瓶などのように、寺院との関連をうかがわせるものが少なからず含まれていることも当該期の重要な特徴であり、時期は異なるが 1 号住居跡出土の匙状の銅製品も仏具に関連した遺物であった可能性が考えられる。この点とも関連するが、本遺跡の土師器小皿や坏の中には内面に油煙が付着した製品が多く見られる。通常の使用ではここまで付着するとは考えにくいことから、ここに住んだ人々が国分寺との何らかの関わりを有していたか、国分寺に対する信仰心の発露から仏教行事が盛んに行われていた可能性を指摘することができる (註 1)。宮城県多賀城市山王遺跡では、国府多賀城に付属する寺院と思われる「観音寺」墨書名の坏のほか、内面にタール状の付着物を有する土師器・須恵器などが多数出土し、『続日本記』に描写された東大寺や朱雀大路などにおける万灯会に類似した仏教行事が国府多賀城内でも行われていたことが推測されている (平川 2007)。10 世紀中葉～後葉以後の住居群については遺物の様相が一般集落に近くなることも指摘されるが、国分寺寺院地の南西部分という立地条件を加味するならば、前半期を中心とする本集落が国分寺に関係する役人や下級の僧侶、小鍛冶など、寺の維持・経営に携わる人々の居住地であった可能性はきわめて高い。すなわち、国分遺跡の奈良・平安時代の住居群は、尼寺ヶ原遺跡 (旧名若松遺跡) (安藤 1988) で確認された、常陸国分尼寺の維持・経営に従事した集団の集落と推定される遺構群と、その立地や年代、遺物の内容からみても大差のない内容を有していたものと考えられる。



第101図 遺構全体図 (1:200)

2. 中・近世

12世紀頃になると方形竪穴遺構が出現する。この遺構は調査区北半部に集中しており、南に位置する井戸群と立地を明瞭に異にしていることが注目される。このうち、11世紀後葉から13世紀初頭頃と推定される1号以外は正確な年代は不明であるが、若干の切り合いをみせながらもほぼ東西の同一ライン上に連なるような配置をみせており、平面形や覆土の類似性からもおおむね同様の時期の所産と思われる。

方形竪穴遺構については、城館や墓地などに分布するものの他、単独あるいは掘立柱建物や井戸などと組み合う形で生産・消費の最小単位と推定される場合などがある。居住・収蔵・作業場・葬送儀礼といった様々な使用方法と相俟って、その性格は遺跡ごとに検討される必要があるだろう（田代・鈴木2005）。

1・2・4・5・6号のような長軸上の両端にピットを持つものは、茨城県内の方形竪穴遺構565基を集成した松本直人の分類では最多の190基を数え、居住施設を多く含むA類としてとらえられている（松本2005）。また、明瞭な柱痕跡の認められない3号はA類に次ぐ169基が確認されたG類、壁面片側の両端にピットを持つ8号は71基が確認されたH類に位置づけられよう。ただし、H類とされる事例の中には8号と同様の平面形を持つものは確認できなかったため、今回の事例が初出となる可能性を指摘しておきたい。8号の上屋構造は西側を開口部とする片屋根と考えられる。確認面より1mと、他の方形竪穴よりかなり深く掘削されており、西壁と北壁の下段に出入りのためのテラス状の削り出しを持つ。内部より凝灰岩製の仕上げ砥石が出土しており、作業場ないし倉庫のような使用が想定される。また、床に顕著な硬化面の検出された5号、床面中央から南西隅にかけて薄く灰の散布の確認された6号、中世における再利用品と推定される須恵器の甕が床面上より出土した大型の3号などは、住居ないし作業場としての利用が想定される。これ以外は明瞭な生活の痕跡は認められなかったが、大型井戸をはじめとする多数の井戸の存在などからも、本遺跡の方形竪穴遺構は、居住や貯蔵、作業スペースといった複数の用途を持つ生活空間であったと考えたい。この他、一括ではあるが調査区南東部付近より12～13世紀前葉の渥美系壺甕類、13世紀後葉の鉢I類などが出土している。

14～16世紀になると、この地域には土壙墓と推定される7・26・30・34・35・40号土坑、1～6号井戸などが造られるようになる。発掘調査による出土事例では茨城県内最大となる長径4.2mの2号井戸については、出土遺物より15世紀前葉頃を下限とし、その後、埋め戻された可能性が高い。これほど大規模な井戸が開削された背景には、当然のことながら周辺に大規模な中世集落の存在した可能性が推測されるが、今回の調査範囲内では明確な住居跡の分布を確認することはできなかった。

溝に関しては、東西に並走する1～3号溝がいずれも近接し、同一方向に構築されていることなどから、比較的短期間のうちに構築されたものと考えられる。

3. 文献資料から見た国分遺跡周辺

城下町や商都として繁栄したこともあり、現在の石岡中心市街地に関連する絵図や古地図は比較的多く残されている。それらの資料を用いて当該地の変遷をみてみたい。第一に、国分遺跡の大掾氏府中城下における位置を検討する。原本は不明であるが、江戸期の比較的古い時期に府中城の縄張りを忠実に写したと考えられる「石岡城跡見取図」（第102図）（手塚1959）によると、恋瀬川に南面する舌状台地上に築かれた主郭を中心に、大きく3つの郭と南方以外の3方向に4つの出丸を配置した府中城の姿が描かれている。東方に接する城下は「カラ堀」でぐるりと囲まれ、惣構を形成している様子が看取される。惣構を含めた城郭全体の規模は東西約1500m、南北約1000mに及ぶ。この巨大な城郭は、周辺諸城の例からみても、大掾氏時

代末期には形成されていたと思われる。当該地は城の北東、惣構の北側外に位置する。

第103図は寛文4年(1664)作成の「平村・染谷村上絵図」である。これによると、当該地は町場に隣接し、正面の国分寺と東の「寺」千手院の間に位置する畑として描かれている。第104図は天保年間(1830～43年)作成の「府中町絵図」である。ここでは国分寺が千手院の西の畑に移動しており、元の位置には「ヤクシ」が建てられている。当該地は国分寺の後背地でやはり畑となっている。

第105図の大正2年(1913)「石岡町市街図」になると、国分寺の位置に千手院が移り、千手院の旧地は道路や町となり、国分寺が北の薬師と同位置に所在している。そして、畑であった当該地は四周を道路に囲まれた長方形の土地として区画され、その南に熊岡製糸工場、北に大澤製糸工場がそれぞれ建てられている。第106図の大正14年(1925)「石岡町市街図」では、この長方形の土地には小口組製糸工場のみが建つ。第107図の昭和10年(1935)「石岡町市街図」では、道路敷設により長方形の土地の南部が寸断され、代わって北から北西方向かけてL字状に小口組製糸工場が拡張される。そして、若干の変動はあるものの、基本的にこの区域が神栄製糸工場を経て現在のイベント広場へと踏襲されている。

4. 中世府中の景観

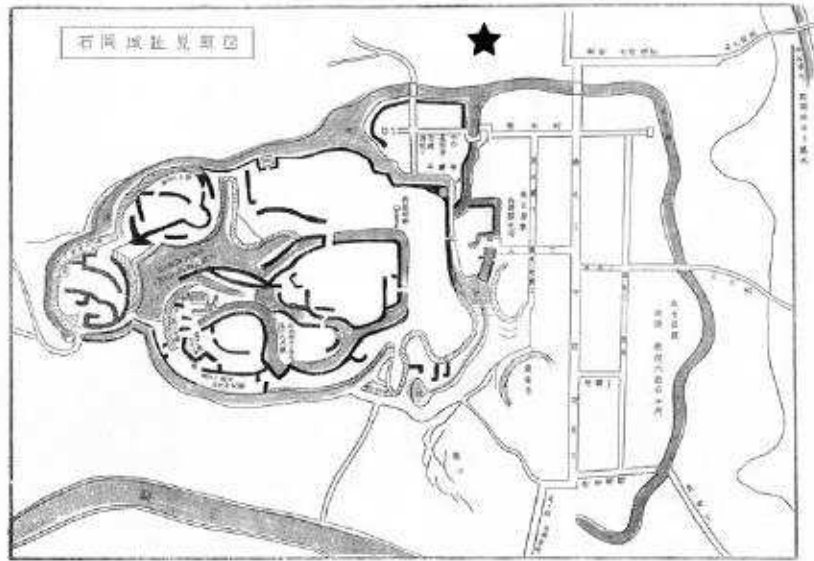
市村高男は、戦国～近世初頭に至る府中の町の検討から惣構の内側に戦国期の町場が所在し、さらに街区の中心から外側に向かって延びる道路に沿って人家が連なるといった景観を復元している(市村1991)。今回の調査地点は惣構の外側に位置するが、西に近接して国分寺や後の水戸街道が位置する条件にあり、この周辺の集落にとっては、将門の乱による焼失後も税所氏や大掾氏により再建・維持されてきた国分寺の存在が大きかった可能性は否定できない。先の市村は、府中城と城下町が国府という国内最大の都市的な場を再編することによって形成されたため、大掾氏の権力規模に見合わないほど充実しているとも述べている。すでに南北朝期より府中において六斎市が開催されていた(佐々木1970)ことも含め、今回発掘された鎌倉時代と推測される方形堅穴群や、室町時代と推測される県内最大級の2号井戸の存在は、間接的にはあるが、未解明部分の多い大掾氏支配下の中世都市府中の繁栄ぶりを示す有力な物証になると考える。

5. まとめ

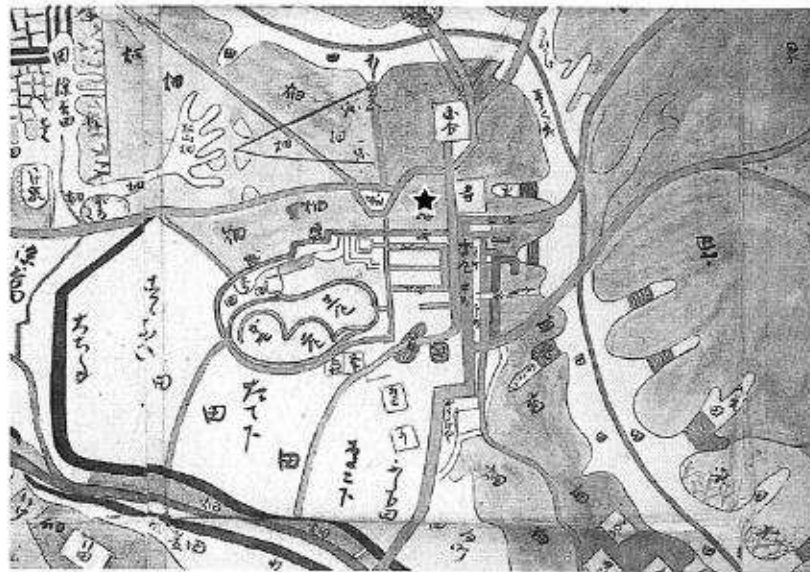
以上をまとめるならば、8世紀末から9世紀初頭にかけて、おそらく国分寺と関わりのある役人や僧侶、工人などの集落が形成される。10世紀中葉～後半にかけて人口が大幅に増大するが、11世紀に入ると減少する。12世紀～13世紀に方形堅穴遺構や井戸を中心に再び集落が形成され、14・15世紀頃には墓と思われる遺構が中心となるが、大型井戸や出土遺物などから周辺には依然、集落のあったことが想定される。17世紀に入ると、若干の出土遺物のみで土地利用の痕跡は不明瞭となり、絵図類にある畑地の景観が近世を通じて踏襲されていったものと思われる。つまり、8世紀末～9世紀初頭から16世紀近くまで、本遺跡一帯にはほぼ一貫して集落が形成されていたと想定されるが、16世紀末の大掾氏の滅亡と、17世紀以降の佐竹氏などによる府中の新規町立てなどにより、この地は長らく畑地となったと考えられる。この地が再び注目されるようになるのは、新たな産業として製糸業が興る近代であり、以後、近年に至るまで製糸工場として活用されたのである。限定された範囲での想定ではあるが、今回の発掘調査で明らかになった国分遺跡をめぐる土地利用の変遷の姿は、国府・府中・石岡と受け継がれた、この町の歴史そのものであったといえるだろう。

(小野)

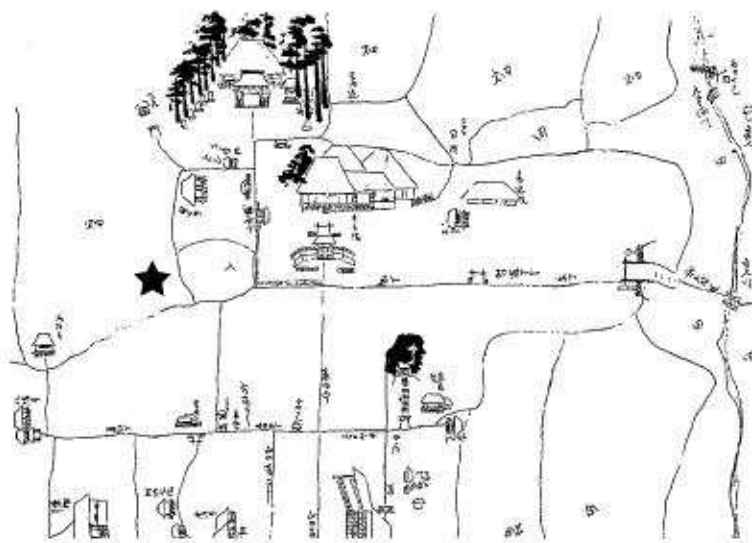
註1 佐々木義則氏の御教示による。



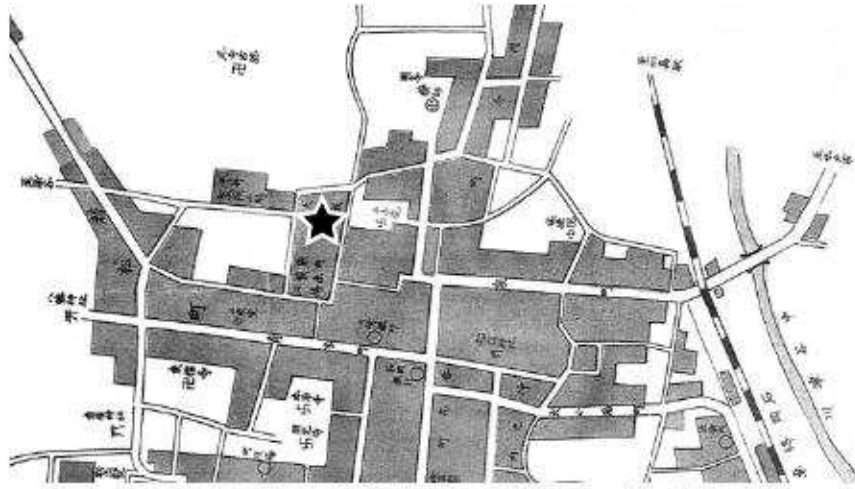
第 102 図 石岡城跡見取図



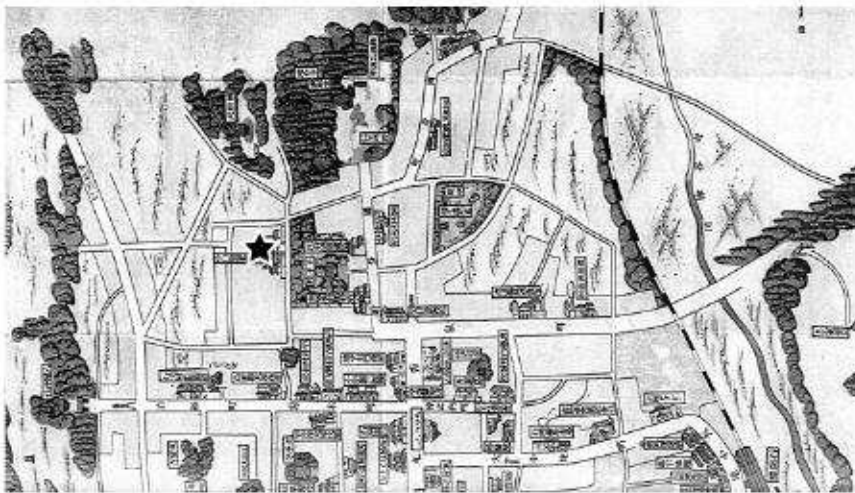
第 103 図 平村・染谷村上絵図 寛文 4 年 (1664)



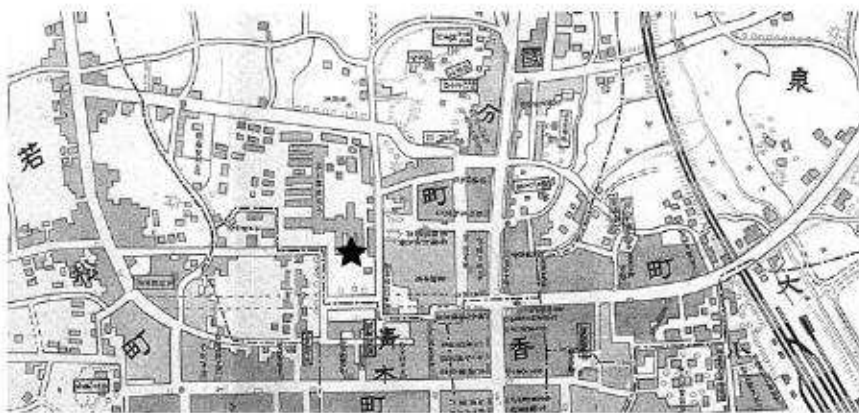
第 104 図 府中町絵図 天保年間 (1830 ~ 1843)



第 105 図 石岡町市街図 大正 2 年 (1913)



第 106 図 石岡町市街図 大正 14 年 (1925)



第 107 図 石岡町市街図 昭和 10 年 (1935)

参考文献

- 足立文太郎 2001「製糸工場の女たち」『二十世紀を生きた私 石岡の女性聞き書き集』石岡市
- 安藤敏孝 1988「若松遺跡発掘調査報告」石岡市教育委員会
- 安藤敏孝 1996「常陸国分尼寺発掘調査概報」石岡市教育委員会
- 安藤敏孝・新山保和ほか 2001「石岡市遺跡分布調査報告」石岡市教育委員会
- 石井豊 1992「中世常陸諸家譜」下巻 暁印書館
- 石岡市文化財関係資料編さん委員会 1996「石岡の地名－ひたちのみやこ1300年の物語－」石岡市教育委員会
- 石岡市史編纂委員会 1979「石岡市史 上巻」石岡市
- 石岡市史編纂委員会 1985「石岡市史 下巻 通史編」石岡市
- 市村高男 1991「戦国－近世初期の府中について－常陸府中の城下町化を中心として」『国史学』143号
- 市村高男 1994「戦国期東国の都市と権力」思文閣出版
- 糸賀茂夫 1997「中世国府の盛衰と大豫氏」石岡市文化財関係資料編纂会「常府石岡の歴史－ひたちのみやこ1300年の物語」
- 茨城県教育庁文化課 1985「重要遺跡調査報告書Ⅱ（城跡跡）」茨城県教育委員会
- 茨城城郭研究会 2006「図説茨城の城」国書刊行会
- 茨城大学中世史研究会 2004「茨城大学 中世史研究」Vol.1
- 茨城大学中世史研究会 2005「茨城大学 中世史研究」Vol.2
- 茨城大学中世史研究会 2006「茨城大学 中世史研究」Vol.3
- 茨城大学中世史研究会 2007「茨城大学 中世史研究」Vol.4
- 茨城県立歴史館 1994「学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究」
- 岩田敏雄 1994「常陸大豫氏初期の頃について」『郷土文化』第三五
- 岩田敏雄 1995～1997「常陸大豫氏の興亡（其の二～四）」『郷土文化』第三六～三八
- 江原忠昭 1991～2002「常陸大豫の一族（その一～十一）」『郷土文化』第三二～四三
- 海老澤弘子 2001「神楽製糸の女子工員として」『二十世紀を生きた私 石岡の女性聞き書き集』石岡市
- 岡田大輔 2004「考察」『八王子打越小ザス遺跡Ⅱ』武蔵文化財研究所
- 小川和博・小杉山大輔 2007「柿岡池下遺跡 発掘調査報告書」石岡市教育委員会
- 小佐野浅子 2005「石岡城（外城）の成立とその軍事的地位」『茨城大学 中世史研究』Vol.2
- 鐘方正樹 2003「井戸の考古学」同成社
- 株式会社東京航業研究所 2007「茨城県石岡市 片野城跡」
- 川井正一 1997「常陸国府の誕生」石岡市文化財関係資料編纂会「常府石岡の歴史－ひたちのみやこ1300年の物語」
- 小杉山大輔 2005「代官屋敷遺跡発掘調査報告書」石岡市教育委員会
- 小杉山大輔 2006「市内遺跡調査報告書」石岡市教育委員会
- 小杉山大輔 2007「市内遺跡調査報告書 第2集」石岡市教育委員会
- 小松崎博一 2002「国分遺跡－確認調査報告書－」石岡市教育委員会
- 小松崎博一・山本吉一 2007「常陸国府域出土施釉陶器集成Ⅰ 図版編」『茨城県考古学協会誌』第19号 茨城県考古学協会
- 今平利幸 1999「宇都宮市埋蔵文化財報告書第44集 飛山城跡Ⅲ」宇都宮市教育委員会
- 財団法人茨城県教育財団 2007「平成19年度茨城県教育財団発掘調査遺跡紹介展」パンフレット
- 斎藤弘 1995「中世墓地に伴う井戸について」『唐沢考古』第14号 唐沢考古研究会
- 斎藤弘・進藤敏雄 1995「北関東における中世集落跡について」『研究紀要』第3号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 桜井明 1979「第V編 第3章 第2節 石岡銀行と諸産業の勃興」『石岡市史 下巻』石岡市
- 佐々木銀跡 1970「中世常陸の六京市とその商業」『茨城県史研究』18 茨城県史編さん委員会
- 佐々木義則 2007「茨城県における奈良・平安時代土器研究の現状」『考古学の深層－瓦吹堅先生還暦記念論文集－』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会
- 佐藤正好・渡辺俊夫 1982「常磐自動車道関係発掘調査報告書4 宮部遺跡・鹿の子A遺跡・砂川遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告XIV
- 佐藤正好・川井正一 1983「常磐自動車道関係発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第20集
- 柴田友秋 2000「江戸氏と鹿行領主」鉾田町史研究「七瀬」10 鉾田町
- 写真にみる石岡の昭和史研究会編 1995「写真集 いしおか昭和の肖像」
- 関口満・窪田恵一 2004「大宮前遺跡－真鍋小学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」大宮前遺跡調査会
- 高野博之 2003「峠遺跡・波付遺跡」石岡市教育委員会・山武考古学研究所
- 高橋伸夫ほか 1994「石岡市中心部における都市空間の特性」『地域調査報告』16
- 田代隆ほか 2007「第8章中世・近世」『研究紀要』第15号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 田代隆・鈴木泰浩 2005「道・市・宿－下古館遺跡となにか」橋本澄朗・千田孝明編「知られざる下野の中世」随想舎
- 玉里村立史料館編 2001「特別展 近現代遺跡、発掘！」
- 手塚敏郎 1959「石岡城（府中城）及古城跡見取図に就て」『石岡市史編纂資料』第5号 石岡市教育委員会
- 寺山光晴ほか 1999「幻の国府を掘る－東国の歩みから－」雄山閣

- 中山信名 1967『新編常陸国誌』宮崎報恩会復刊本
- 萩原龍夫 1977『江戸氏の研究（関東武士研究叢書1）』名著出版
- 橋本澄朗 2005『掘り出された中世の世界－近年の考古学の成果から』橋本澄朗・千田孝明編『知られざる下野の中世』随想舎
- 平川南 2007『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 松本直人 2005『茨城県における方形竪穴遺構の集成』『年報24（平成16年度）』茨城県教育財団
- 箕輪健一 2001『常陸国衙跡－石岡小学校温水プール建設事業に伴う調査－』石岡市教育委員会
- 箕輪健一 2003『常陸国衙跡Ⅰ－国衙域の第一次調査概報－』石岡市教育委員会
- 箕輪健一 2004『常陸国衙跡Ⅱ－国衙域の第二次調査概報－』石岡市教育委員会
- 箕輪健一 2005『常陸国衙跡Ⅲ－国衙域の第三次調査概報－』石岡市教育委員会
- 箕輪健一 2006『常陸国衙跡Ⅳ－国衙域の第四次調査概報－』石岡市教育委員会
- 桃崎裕輔 1995『中世常陸における葬送の風景』『茨城県考古学協会誌』第7号
- 桃崎裕輔 2004『筑波山麓における戦国の風景』『戦国時代の考古学』高志書院
- 山中敏史 1994『古代地方官衙の研究』塙書房
- 義江彰夫 1985『中世前期の国府－常陸国府を中心に－』『国立歴史民族博物館研究報告』8
- 義江彰夫 1991『平安末・鎌倉時代の国府・府中－常陸国府を中心に－』『国史学』143号

写 真 图 版



調査区全景（東から）



調査区全景（南西から）

図版 2



調査区と龍神山（南東から）



1・12号住居全景（西から）



2号住居全景（西から）



3・19号住居全景（南から）



調査風景



4号住居全景（南から）



4号住居カマド検出状況（南東から）



4号住居墨書土器出土状況（南から）



4号住居遺物出土状況（南から）



4号住居遺物出土状況（南から）

図版 4



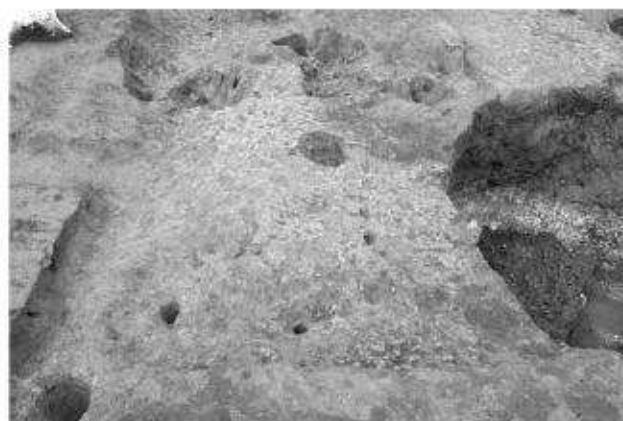
5・13号住居全景（南から）



5号住居遺物出土状況（南西から）



6号住居全景（南から）



7号住居全景（西から）



8号住居全景（西から）



9号住居全景（東から）



10号住居全景（西から）



調査風景



11号住居遺物出土状況（西から）



11号住居カマド遺物出土状況（西から）



11号住居カマド全景（西から）



11号住居全景（西から）



調査風景

図版 6



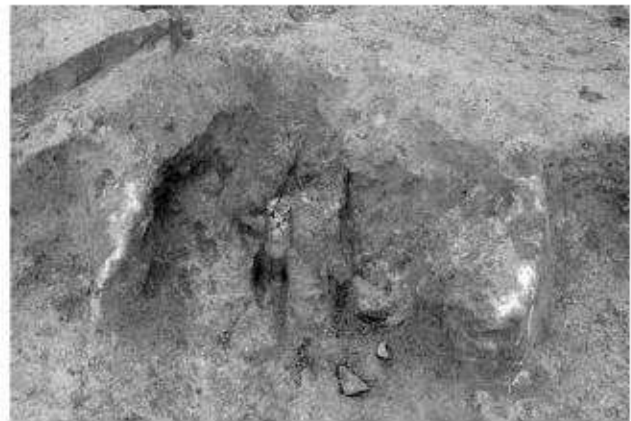
14号住居全景 (西から)



15号住居全景 (南から)



15号住居カマド遺物出土状況 (南から)



15号住居カマド遺物出土状況2 (南から)



16号住居全景 (西から)



17号住居全景 (南から)



18号住居全景 (西から)



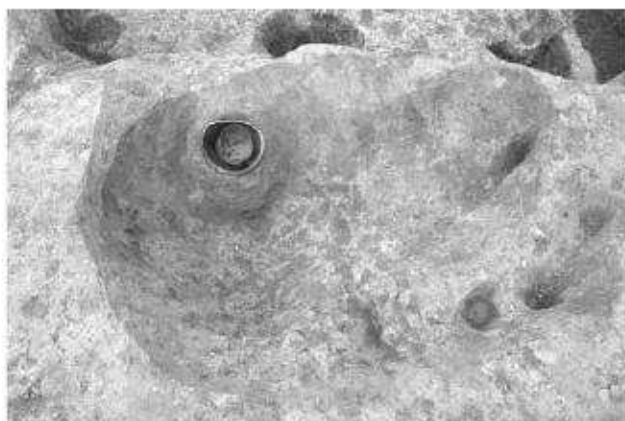
調査風景



19号土坑遺物出土状況（西から）



21号土坑遺物出土状況（南から）



24号土坑遺物出土状況（東から）



51号土坑遺物出土状況（南から）



1号方形堅穴全景（南から）



2号方形堅穴全景（南から）



3号方形堅穴全景（北から）



4号方形堅穴全景（北から）

図版 8



5号方形堅穴全景（北から）



6号方形堅穴全景（南から）



7号方形堅穴全景（西から）



8号方形堅穴全景（東から）



8号方形堅穴全景（南西から）



1号溝全景（東から）



1号溝円面硯出土状況（南から）



2号溝全景（東から）



3号溝全景（東から）



1号井戸断面（東から）



2号井戸全景（南から）



調査風景



3号井戸全景（北西から）



4号井戸断面（西から）



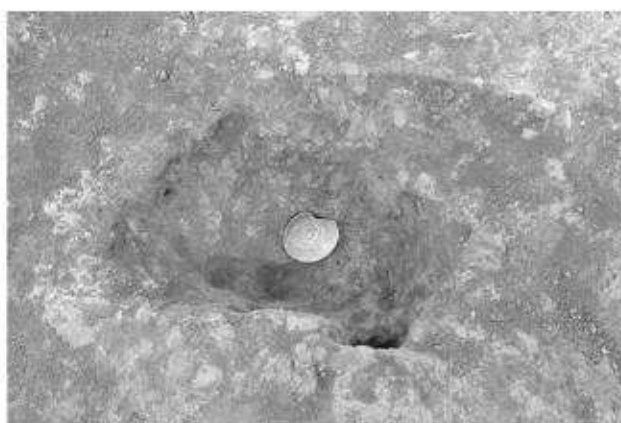
5号井戸全景（西から）



6号井戸全景（北東から）



34・35号土坑全景（西から）



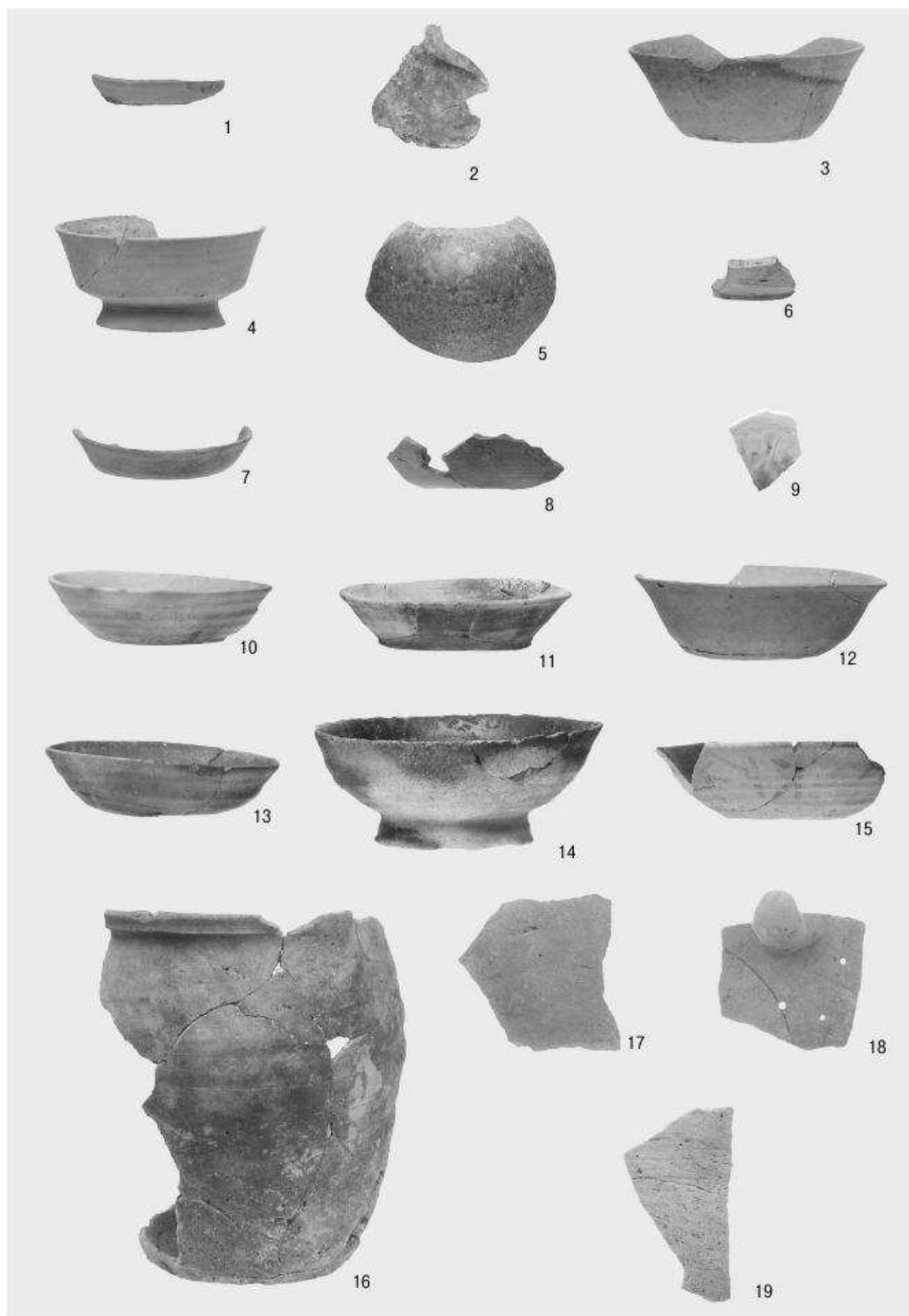
40号土坑全景（東から）



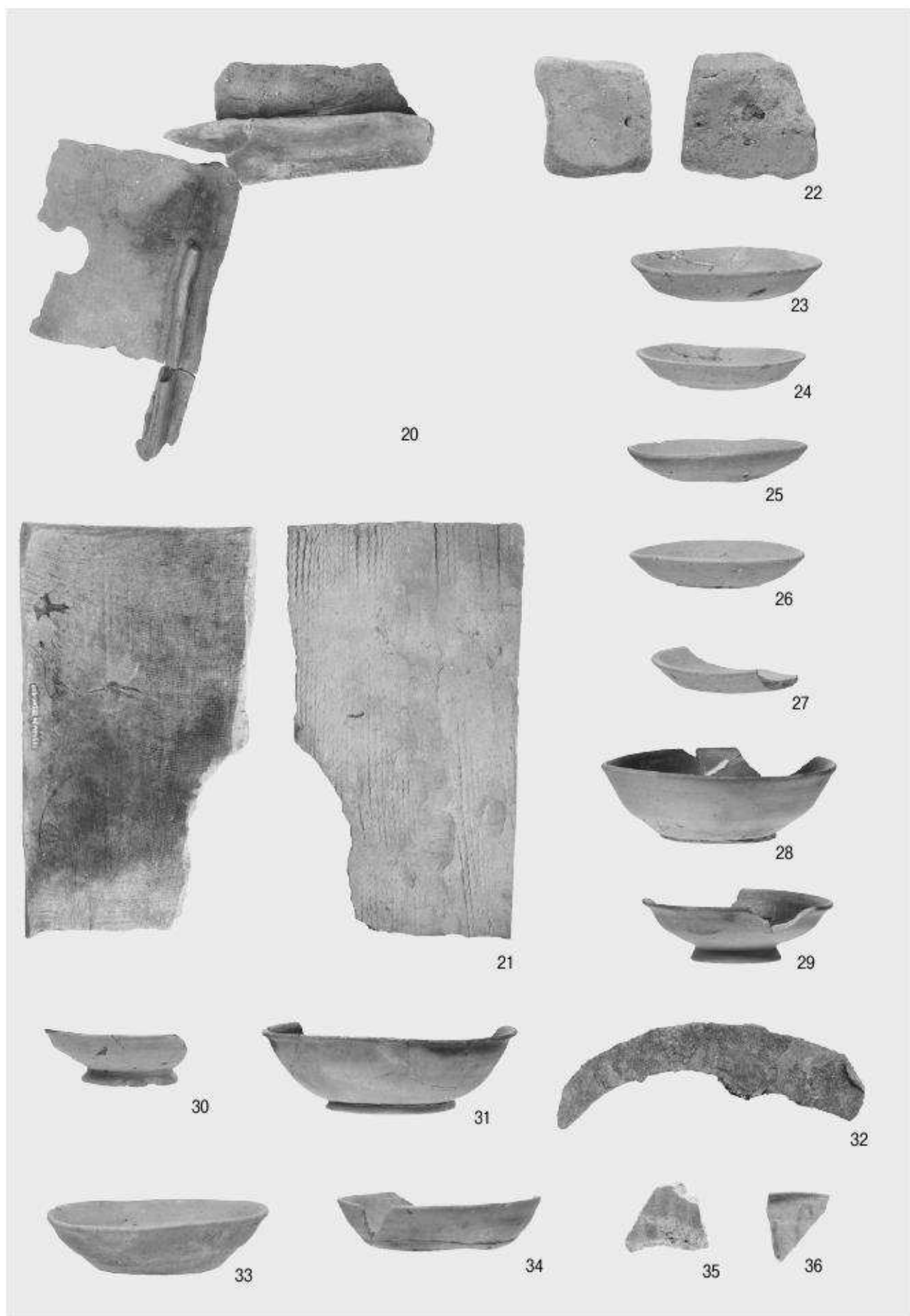
煉瓦基礎群（北東から）



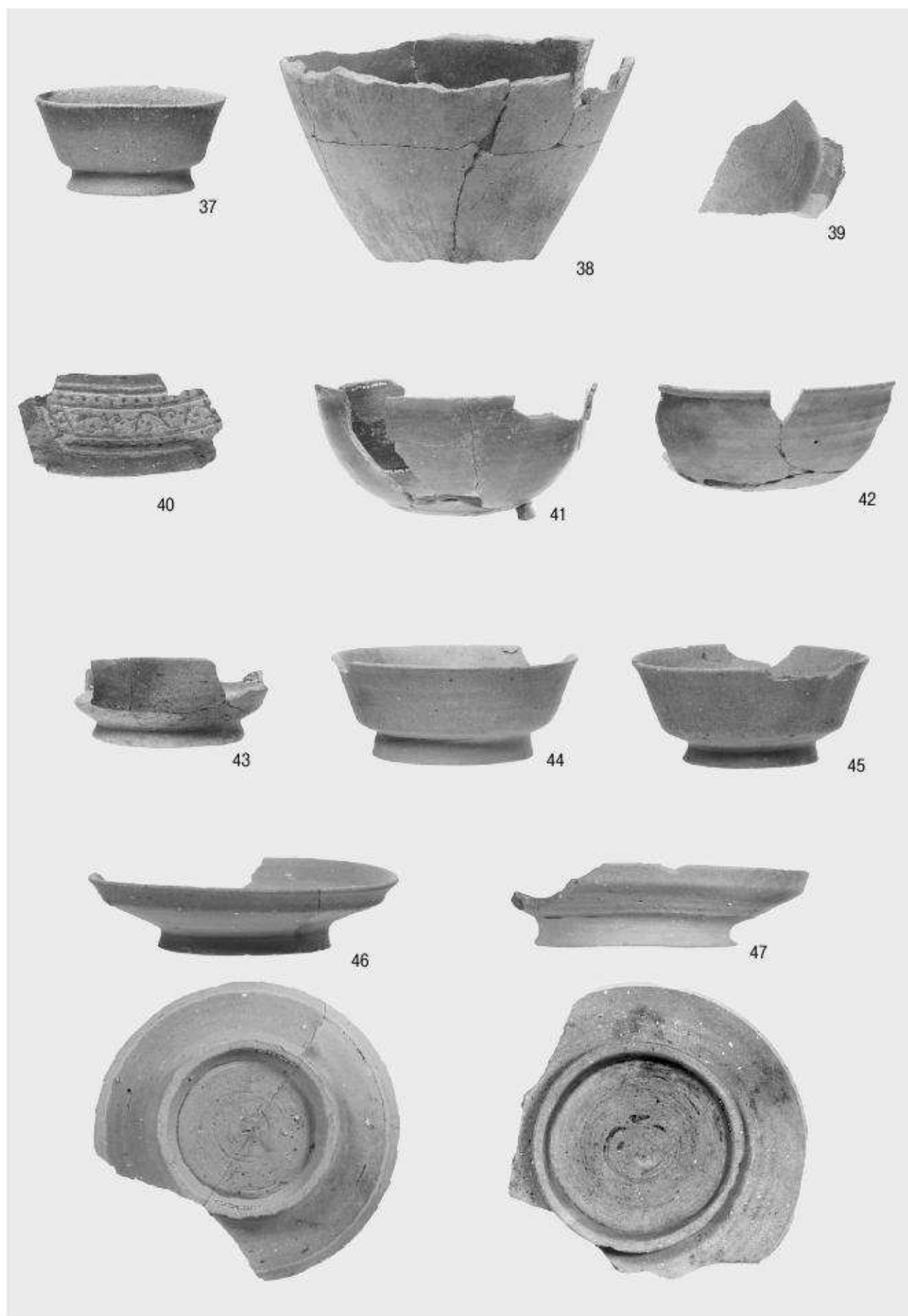
モルタル基礎（西から）



出土遺物 (1)



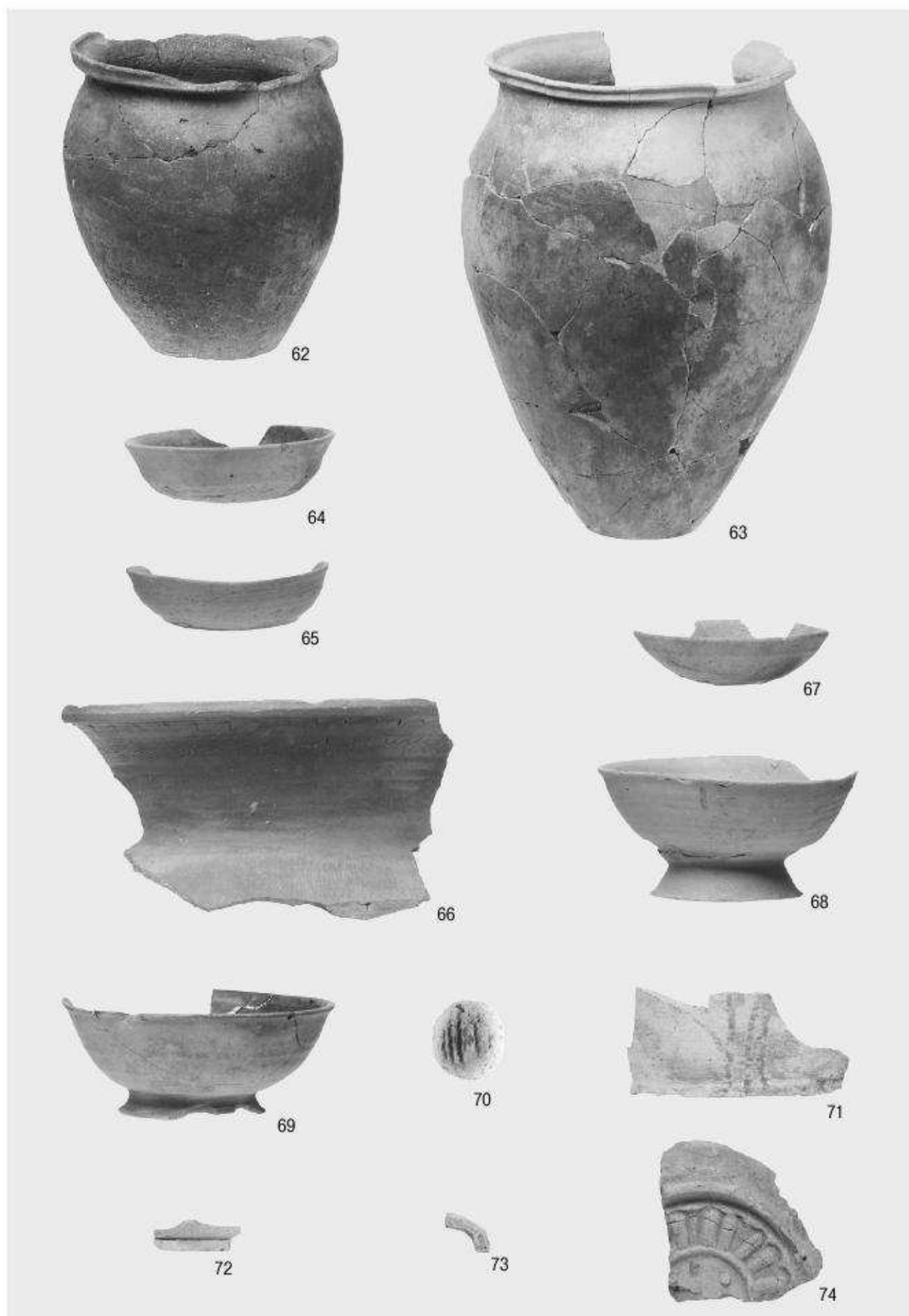
出土遺物 (2)



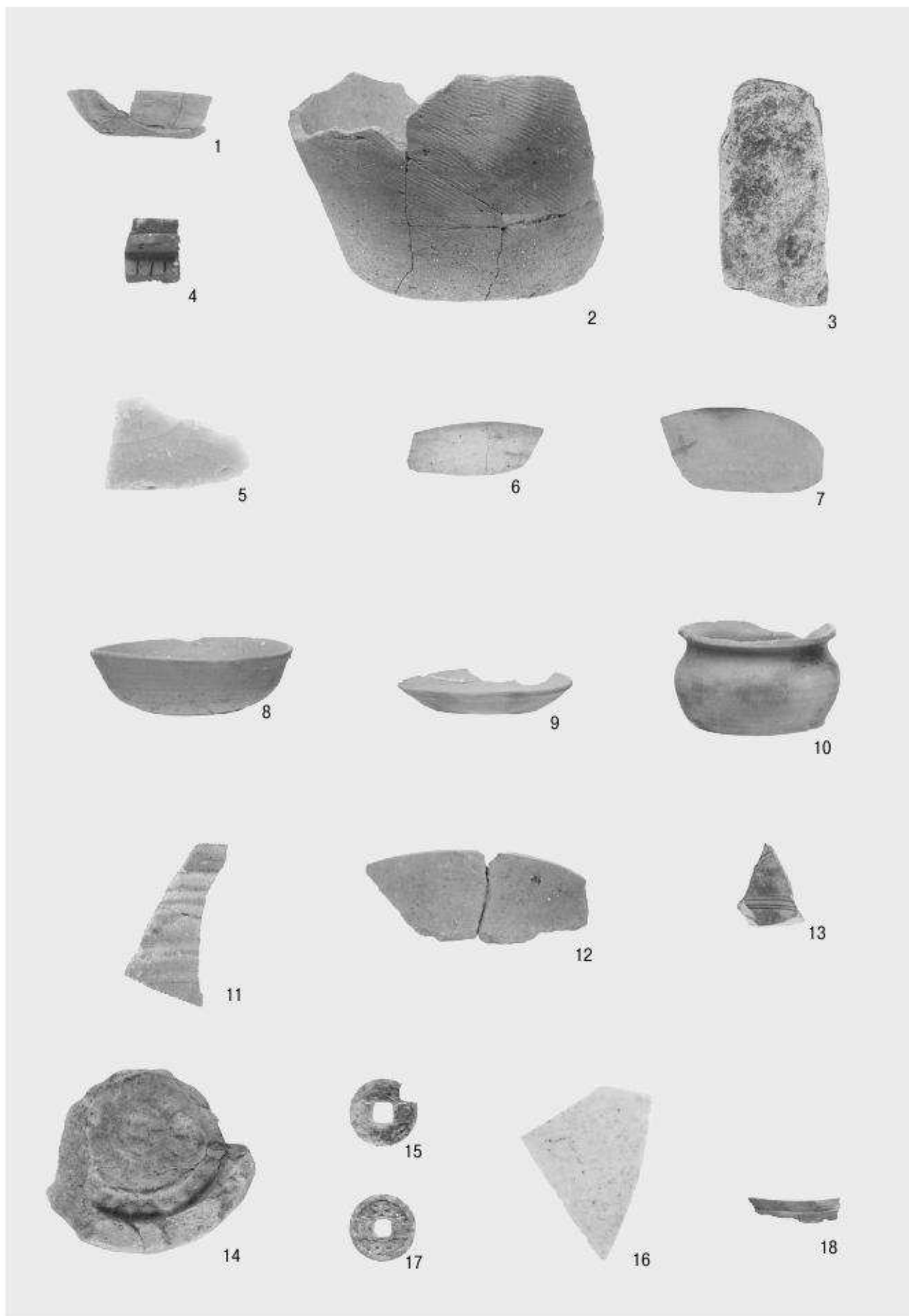
出土遺物 (3)



出土遺物 (4)



出土遺物 (5)



出土遺物 (6)



出土遺物 (7)



出土遺物 (8)

報告書抄録

ふりがな	いしおかしこくふいせき							
書名	石岡市国分遺跡							
副書名								
巻次								
編集者名	佐々木藤雄 小野麻人 林邦雄							
著者名	曾根俊雄 小杉山大輔 佐々木藤雄 小野麻人 林邦雄 市瀬俊一							
編集機関	株式会社東京航業研究所 埼玉県川越市伊佐沼 28-1 TEL049-229-5771							
発行機関	石岡市教育委員会							
所在地	茨城県石岡市柿岡 5680-1 TEL 0299-43-1111							
発行年月日	平成 20 年 3 月 14 日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
国分遺跡	茨城県石岡市若宮 3 丁目 400 番の 4 番	08205	066	36° 11′ 30″	140° 16′ 15″	2007.7.26 ～ 2007.9.13	908 m ²	複合文化施設建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国分遺跡	集落跡	奈良・平安	住居跡 19 軒 土坑 10 基		土師器 須恵器 灰釉・緑釉陶器 国分寺系古瓦 埴 中世陶磁器 銭貨 昭和前期の日常生活品 製 糸関連遺物	国府城の一部を形成する集落跡と多数の埴釉陶器を検出した。また、大掾氏の府中城下に関連する中世集落跡と、発掘事例では県内最大級の井戸を検出した。その他、近代の製糸工場跡と関連遺物も多数検出された。		
		中・近世	方形竪穴 8 基 溝 3 条 井戸 6 基 土坑 42 基					
		近・現代	製糸工場関係基礎					

茨城県石岡市

国分遺跡

2008 年 3 月 14 日発行

編集 株式会社東京航業研究所 〒 350-0855 埼玉県川越市伊佐沼 28-1
TEL049-229-5771

発行 石岡市教育委員会 〒 315-0195 茨城県石岡市柿岡 5680-1
TEL0299-43-1111

印刷 関東図書株式会社 〒 336-0021 埼玉県さいたま市南区别所 3-1-10
TEL048-862-2901